
HEAVEN ! ヘヴン ! HEAVEN ! 3

coconeko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！3

【Nコード】

N0370F

【作者名】

cocconeko

【あらすじ】

お待たせいたしました。HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！シリーズ続編です（<http://ncode.syosetu.com/n7713a/>）。天上天下唯我独尊幼女と、見た目青年中身どんどん年寄り（現在進行形）に、陸に上がった海賊もプラスされ、果たしてエルドラドへの道は見つかるか？道筋を早く正したいキャラとセインです。

嵐の前の嵐（前書き）

お待たせいたしました。H E A V E N！ヘヴン！H E A V E N！シリーズ続編です。

ギャンギャンのせいで、探し物を探す道筋から脱線しまくっている二人ですが、それでも精一杯努力している凸凹コンビです。

投稿用の小説と、平行して書いていますので、UPが遅くなるかと思いますが、よろしくお願い致します。本当は、もっと時間に余裕のあるときに書こうと思っていたんですが、友人に急かされました。

嵐の前の嵐

轟々と風が吹き荒れ、バケツをひっくり返したような雨が降り注ぐ。

雨にけぶる中、街道を、小さな人影が一つと、大きな人影が三つ。風に飛ばされまいと、固まって進んで行く。

互いの声は、雨音と風音にかき消されてしまわない様、自然と怒鳴り声になる。

「何でこんな嵐になるのよ！」

「仕方ないよ、もう少しで村に出るから、頑張って！」

小さな影は少女で、背の高い人物に、しっかりとしがみ付いている。

「嵐になりそうだから、急げって言っただろう」

先頭に立つ大きな影は、少女を振り返りながら、平然と答える。

「急いでも間に合わなかったんだから、仕方ないでしょう?!」

「もう、野宿四日目っスからね。しかたないっスよ」

最後尾にいる影が、頭からかぶったマントを、頭に巻いたバンダナごと、飛ばされないようにしっかりと掴み直す。

すぐそこにいるはずの、お互いの顔さえ、降り注ぐ雨と、叩き付ける風で良く見えない。

「こんな状況で、本当に道は合っているんですか!？」

少女を庇いながら歩く背の高い人物も、普段掛けている眼鏡を外し、しがみ付く少女ごと、マントで体を隠す。

「俺を信用しろよ」

「信用出来ないから言っているんです!」

怒鳴り声が、一際大きくなった。

「つつ・・・」

「セイン!」

少女は、自分がしがみ付いている人物が、眉をしかめているのに

気が付いて、彼が持つてくれていた自分の大きな鞆を、無理やり奪い取る。

「キヤル？」

「あんた、まだ傷が治っていないんでしょ？無理しないで！」

こそこそと、この大雨でも、他の二人に悟られないよう、声をひそめる。

「どうした？」

先頭の男が振り向いたのを、少女は睨んだ。

「何でもないわよ！それより、いつになったら、宿屋に着くのよ！」

「もうすぐだって言ってるだろ？」

「そのもうすぐが長いのよ！」

先程から、この風と雨とで視界が悪く、進んでいるのか後退しているのか、おかしな錯覚に捕らわれるというのに、この男の、いつもの飄々とした態度が気に入らない。

早く休ませなければ。背の高い青年の、息遣いが徐々に荒くなっているのは、気のせいではないだろう。しかし、だからといって他の二人に、この青年を任せる気には最早なれない。

それは、セインと呼ばれた当の青年も同じらしく、気付かれないように、普通を装って歩く。目の前の、日に焼けた精悍な顔立ちの、いかげんなくせに勘の良い、飄々とした男には、気付かれている可能性は高いが、知らない振りをする。

理由は一つ。

少女は、世間にその名を知られた「ゴールデン・ブラッディ・ローズ」の異名を取る賞金稼ぎで、キヤロットという彼女の本名より、この通り名を示せば、大概の賞金首は恐れ戦く。

また、彼女を庇って歩く背の高い青年は、ひよろりとした体型からは想像もできないのだが、それでも伝説の聖なる剣、大賢者セインローズの本性である。

そしてこの二人を挟む男二人。最後尾の禿げ頭は、少女からの信頼を得ている腕の良い料理人であるが、先頭の男の、不幸にも部下

だ。

そして、問題の先頭を行く、日に焼けた褐色の肌に、精悍な顔立ち。白い歯を見せて、ちよつと二ヒルに笑えば、大概の女性はそれだけで落とせしてしまうような男前のこの人物は、世界に名の知られた大海賊。海賊の中の海賊と唄われる海賊王、ギャンガルドである。この海賊王と、少女等が出会ったのは最近の事なのだが、とにかくこの男。信用が出来ない。

二人を気に入ったと言いながら、常に伝説の聖剣であるセインを欲しがっている節があり、諦めたと言いながら、何かとちよつかいを出してくる。

今回仕方なく同行しているのだが、それも二人がこの海賊王の厄介事に巻き込まれた為だ。

なので、こんなに危険極まりない人物の前で、先日負ったばかりの怪我が治癒できなくて、この嵐のおかげで疼くなどと、悠長な事は言っていられないのである。

「がんばって！」

「うん、ごめんね」

マントの中で、ずぶ濡れになりながら、二人はギャンガルドから視線を外さない。

「よっし！入り口についたぞ！」

そのギャンガルドの大声に、顔を上げれば、暗い風景の中に、雨に叩きつけられて黒く霞んだ村の入り口を示すアーチ型の看板があった。これをくぐれば、ようやく村の中だ。

一同は、急ぎ足で看板を潜った。

手際良く、禿げ頭のタカが、走り出て宿屋を探してくる。これでようやく一息つけると、キヤルもセインも、ほっと胸をなでおろした。

タカが見つけて来た宿屋は、この大雨で客足が遠のいたためか、宿泊客もまばらで、余裕で部屋を取る事が出来た。

「こんなに早く見つけてくるなんて、タカはやっぱり信用できるわ

！

「いやあ、雨のおかげさあ。お嬢にこんな褒められると、照れちゃう」

ギャンガルドと同室になるわけにはいかないキヤルとセインには非常に有難く、タカをめいっばい褒め称える。

「じゃあ、明日、天気を見て出発しましょ」

「僕たちは部屋に上がるから。また後で」

そそくさと、割り当てられた部屋へと向かう。

ギャンガルドが何か言いたそうだったが、有無を言わせなかった。口を開けば、ろくな言葉が出てこないのがギャンガルドだ。

部屋に着くと、キヤルの鞆からタオルを取って、シャワー室へキヤルを向かわせると、自分はもう一枚のタオルで体中を拭いた。じわりと、腹に巻いた包帯から、赤い血が滲む。

「・・・・・・っ」

眉をしかめて、痛みをやり過ぐす。

思っていたより、傷の治りが遅いのは、なかなか剣の形態を取れないからだろう。

セインは、構造は良くは分らないが、剣の姿をとる事ができる。剣になれば、大概の怪我は、人型でいるより治りが早い。人の形を取るよりエネルギーを使わない為であるらしい。それでなくとも、通常の人間よりも、遥かに治りが早い。

だが、今回はなかなかそうも行かないようだった。

「しつかり、串刺しにされたからなあ」

キヤルと友達になりたいと、セインを貰いた、紛い物の命を持った少女。

ある人形師の想いが、紛い物の少女を作り出し、その想いは、いつか彼女本人の、人間でありたいと願う想いにすり替わり。

人の思いは、それほどまでに強いのか。

「人のことは言えないか」

自分の過去を思い出して、ふと息をついた。

それにしても、あまり負った事もない大怪我をしてしまった。

「ちよつとだけ、剣に戻りたいんだけど」

その隙を突いて、あの海賊王に攫われなくても限らないので、迂闊な行動に出られない。なにせ、彼には前科がある。

やはり、怪我を負ったセインを搔つ攫い、セインもキヤルも、たいていそう苦勞をした。

「セイン！」

ばん！と、シャワールームの扉を勢い良く開き、湯煙と一緒にキヤルが飛び出す。

「ど、どうしたの？」

あまりに早い湯上りに、シャワーが壊れてでもいたのかと、セインは腰を浮かした。

「あたしはもう充分にあつたまつたから、さつさとあんた入りなさい！」

濡れた服も着替え、タオルを頭から被って、びしりと、こちらを指差す少女に、一瞬ぽかんと呆けてしまったが、次の瞬間、つい笑いがこみ上げる。

「何笑つてんのよ！あんたが風邪引いたら困るのはあたしなんだからね！」

「ああ、ごめんごめん。今、入るよ」

不器用な思いやりに、セインはついつい笑ってしまって、彼女の反感を買う事が多い。また、いつものように殴られる前にと、着替えと包帯を持って、血の滲み出た腹を隠しながら、シャワー室に向かった。

嵐の前の嵐（後書き）

しょっぱな短くつてすみません。

ちよこちよこまとめからUPしようと思っていましたが、それだとずいぶんお待たせすることになるので、とりあえず。今から謝ります。今回は更新遅いです。本当に申し訳ありません。

相変わらずな海賊で（前書き）

お待たせしました。ようやくと続きです。

無事に投稿も済ませて、これからスピード上がると思います。

相変わらずな海賊で

「うーん。まいったなあ」

包帯を解けばじわじわと滲み出る血に、傷口が塞がっていない事が分かる。

沁みるのを堪えて血を洗い流し、傷口を綺麗にする。

シャワーから出るお湯が気持ち良く体を温めてくれるのだが、い
かんせん、傷が疼く。

早々に切り上げて、手早く傷口を手当して包帯を巻く。

血の付いたタオルを綺麗に洗って、シャワールームから出ると、
キヤルが鞆の中をこそこそと掻き回していた。

「何をしているの？」

「とりあえずご飯食べに行くのよ」

言われてみれば、もう夜で、そういえばお腹が空いた気がする。

「お財布でも捜しているの？」

ご飯を食べるのに、鞆をひっくり返す理由といたらそれくらい
しか思いつかない。

「お財布は肌身離さず持っているわ」

では、ハンターパスだろうか？キヤルが賞金稼ぎである事を証明
する大事なものだ。しかし、ハンターパスは別にご飯を食べるのに
必要は無いのではなからうか。

「あつた！」

不思議そうに覗き込むセインの前で、キヤルが引つ張り出したの
は。

「あれ？」

「さあ、お腹出しなさい！」

彼女お得意の軟膏だった。

「え、軟膏って、あの？」

「これ、何にでも効くんだから！セインのその傷にだって効くと思

うのよ」

擦り傷やら切り傷、吹き出物まで。キヤル御愛用の軟膏は、小さな村のお婆さんが作っているとかで、結構貴重な代物だ。

というより。

「バレてました？」

「痛そうにしているなあとと思ってはいたけど、多分傷口、開いているんですよ？」

痛むのは気付いているようだったので、傷口が開いているのは、どうせすぐに塞がるだろうから黙っていたかったのだけれど。

あはは、と笑ってごまかしたら、鼻を摘まれた。

「さつさと薬を塗って、落ち着いてからじゃないと、あのバカイゾクの前になんて、行けないでしょう」

馬鹿と海賊がくつついて、バカイゾク。タカが聞いたら泣き出しそうである。

「おみそれしました」

セインは大人しくベッドの端に座り、巻いたばかりの包帯を解く。

「あーあ。こんなになるまで我慢しちゃって」

半ば呆れつつ、キヤルは丁寧に軟膏を塗ってくれる。

「本当なら、今頃セインロズドになって、これくらいの傷、すぐに治っているはずなのに」

「仕方が無いよ。皆が捕まっているっていうのだもの」

「それにしたって、海賊の手助けをするヘッドハンターなんて、前代未聞よ？」

油断ならないギャンガルドと一緒に旅をしている理由は、当のギャンガルドからもたらされた。

ギャンガルドの手下たちが、この国の王様に捕まってしまう、ギャンガルドと王様は取り引きをした。

その取り引きの内容が、セインを王城に連れてくる事だった。

何というのか、王様とギャンガルドは気が合ってしまい、結構フレンドリーな仲らしい。なら、自力で何とかしてほしいものだが、

王様が話したセインのことを、知っているとギャンガルドがうつかりしゃべってしまった事により、そんな約束が交わされてしまったらしい。

断れば良いものを、この男は生来の物好きで、その方が面白そうだから、の一言で海賊王の癖に陸に上がり、セインとキヤルを捕まえて一緒に行動しているのだった。

「タカに泣き付かれちゃあねえ」

「ギャンギャン一人だったら無視できたのに、その辺狡賢いのよね」とことん信用のない海賊王である。

「ご飯食べ終わって部屋に戻ったら、少し剣の形態に戻った方が良いわね」

包帯を巻きながら、キヤルが溜息混じりに呟いた。

「大丈夫かな？」

「大丈夫でしょ。部屋には鍵をかけておくし、私が見張っていればどうということはないわよ」

ギャンガルドに見つかって、タカに泣き付かれ、海賊王の船であるクイーン・フウェイル号の乗組員達を王様から救い出すために、王都へ向かって三日になる。

その間、気は張りっぱなしだ。

これでどれだけ目的から遠のくのか。

元々、あてのないモノではあるけれど。

「本当に、厄介だわ」

「早く王都へ行って、国王の用事を済ませてギャンガルドとはお別れしたいね」

「まったくよ。みんな、よくあんなの手下なんかやっていられるわ」

クイーン・フウェイルで過ごした海賊たちとの楽しかった時間を思い出しながら、キヤルはつくづく思う。

我侬で自分の願望に正直で、ある意味猪突猛進。

そのくせ、底意地は悪くて、頭はすこぶる回転が速く、考えが柔

らかいから発想が豊かな分、厄介にも何でも見透かしてくれる最悪の男だ。

「さ、出来た」

「ありがとう」

キヤルが平たい小瓶に入った軟膏の蓋を閉めると、「ご丁寧にも部屋の戸がノックされた。

「うおーい、飯にしねえか？」

ギャンガルドだ。

「ノックする礼儀くらいはあるのね」

セインは上着を慌てて着直し、キヤルは足の銃に手をかける。

「だって鍵がかかってるんだもんよ」

二人の緊迫した空気を、知ってか知らずか、返ってくる声は暢気だ。

「鍵がかかってなかったらノックもせずに不躰にも扉を開けて不法侵入を働いていたって事かな？」

「怒ると声だけでも怖いなあ賢者様」

「その呼び方は止めて下さないかしら？」

「お嬢も怖えなあ」

それよりも、わざわざ食事に誘いに来る事自体が気味悪い。

「……………」

二人は構えるだけ構えて、返事をせずに扉を見つめる。

「久しぶりにまともな宿屋でまともな食事だぜ？皆で食いたいじゃねえか」

クイーン・フウェイルのコックであるタカがいたので、野宿といってもそれなりだったが、できる調理は限られる。まともな食事は食べたい。

食べたいけれど。

「気味が悪い」

つい声にしまった。

「俺たちや海賊だぜ？団体行動つてもんが身に染み付いてんだよ」

「君に一番似合わない言葉じゃないですか。団体行動なんて嘘っぱちでしょう」

「……」

ぴしゃりと言い返せば、ぐうの音も出なかったらしく、沈黙が返ってくる。

「何やってんすか？」

「いやあ、お嬢たちを食事に誘おうと思ってな」
外から、タカの声が聞こえてくる。

「何、似合わない事やってんすか。お嬢たち呼ぶなら、おれが呼びますよ。先に行っていて下さいよ」

呆れた調子で、タカがギャンガルドを追いやっている。

「タカにまで似合わないってはっきり言われてるわね」

「だって、似合わないもの」

ちよつとおかしくて、二人で笑っていれば。

「お嬢、旦那！飯に行きやせんか？」

タカが扉の前から声を張り上げた。

顔を見合わせて、キャルがとりあえずギャンガルドの気配がないことを確認し、戸を開ける。

「そんなに警戒しなくても、キャプテンは追ひましたよ」

苦笑いで、タカが禿げ頭を掻いた。

「ごめんね、タカ。だって、あんまり気味が悪いのだから」

「あゝ、そりゃ、まあ、そうでしょうね」

あのギャンガルドが皆で一緒にご飯を食べたいなどと、子供みたいな事を口走る事自体おかしい。

「何か企んでいるとかそういうのでなくてですね、ああ見えて意地っ張りなところがあるもんで」

「意地っ張りの塊でしょう？ギャンギャンは」

「いや、まあ、そうなんすけど」

タカが困り果ててしまっている。

「どうせ、ギャンガルドの事だから、懐いてくれない僕らが悔しい

「んでしょう」

「へえ」

「それで、だったらいじり倒して反応を楽しもって言う、何と
うか迷惑な考えなのでしょう?」

「・・・へえ、その通りで」

タカが、申し訳無さそうに首をすくめる。

「ほんつとくに迷惑だわ」

キヤルが両腰に手を当てて憤慨すると、タカはますます首をすく
めた。

「すいやせん」

「タカが謝る事はないのよ。苦勞するわね、海賊っていうのも」

「キヤル、それは」

少し違う気がする。

「まあ、僕らもお腹が空いた事は事実だし、今後の確認も取らない
といけないしね。不本意だけど、食事くらいは一緒に取ろうか」

セインがキヤルの顔を覗き込めば、キヤルは少し考えて、頷いた。

「ま、いいわ。そのかわり、ギャンギャンの奢りだからね」

「なんかもう、ほんと、すいやせん」

なんとか二人の了解を得たものの、タカは本当に申し訳なくて、
ただ謝った。

「だから、タカが謝る事じゃないってば」

キヤルが笑ってくれたので、タカも笑って応え、三人はようやく
食堂へと向かうのだった。

宿屋の一階にある食堂へ下りると、ギャンガルドが三人を目ざと
く見つけたらしい。

「うお、ここだ、ここ!」

手を上げて、ぶんぶんと大きく振る姿は、なんだか親父くさい。

「早く頼め。俺はもう頼んだぞ」

座る一同に、メニユーを差し出して、ギャンガルドはご機嫌だ。
「キヤルは何にする?」

セインはまず、キヤルにメニューを渡す。

「そうね、ギャンギャンの奢りだもの。うんと高いものを頼みましようか」

キヤルのわざとらしい一言に、ギャンガルドは眉間に皺を寄せた。

「そりゃ、いつ決まっただよ？」

「ついさっきよ。海賊王なら海賊王らしく、太っ腹よね？」

その科白に、少々肩をすくめて見せて、こちらもまた、わざとらしく溜息なんぞを吐き出す。

「やれやれ。お嬢には負けるね」

「あ、私、これがいいわ。チーズオムレツと、サーモンの香草焼き。あと、デザートにチーズケーキ。飲み物は紅茶がいいわ。ミルクをたっぷりね」

キヤルはキヤルで、すっかり海賊王を無視して、注文を聞きに来たウェイトレスに自分の好物を注文した。

「じゃあ、僕は鶏肉のドリアで。紅茶を付けて貰っても？」

「俺はこれ、ハムのステーキに、パンのセットで。コーヒーをくれ」

セインはシンプルにすませ、タカはポテトサラダの付いたハムステーキのセットを注文する。三人が三人とも注文をして、先程のウェイトレスが持ってきてくれた水を口に含めれば、ようやくひと心地がついた気がする。

「さて。今日はここに泊まって、明日なんだけど」

キヤルがさつさと話を切り出す。さつさと打ち合わせをして、さつさと食べて部屋に戻りたいからだ。

「この嵐だ。明日には晴れるかもしれんが、道が酷い事になっているだろうな」

「馬車じゃ移動できないかもしれないっていう事？」

村や町といったら、大概駅馬車くらいはあるものだ。よっぽど小さな村であれば、話は別だが、そういう時は村人の荷馬車に乗せてもらう事もできる。

「それは、嵐が止んでみない事には分からねえが、十中八九、倒木

やら何やらはあるだろ」

できれば、あまりセインに無理をさせたくない。

馬車が使えないとなると、ここに来るまでと同じ経緯で、徒歩になつてしまふのだが、それはなるべくなら避けたかった。

先程の様子では、セインの傷は普段より治りが遅い。深い傷を負つてしまえば、気の遠くなるような歳月を生きて来た彼とて、不死身ではないという事なのだろうか。

「そもそも、ここは駅馬車があるの？」

セインがコップをテーブルに置きながら、誰にともなく問いかける。

「・・・多分？」

ギャンガルドが、確かめていなかった事を無責任にそう言うので、セインは呆れてしまった。

「そのすつ呆けたような顔は、分からないって事なんでしょう？ 全く君は、子供みたいで困るよ」

ギャンガルドはにっと笑う。

そもそもこの男を子ども扱いするような人物など、目の前のセインくらいで、それが面白いらしい。

「私たちをこの村まで連れてきたのはギャンギャンでしょう？ 村のことは知っているんだと思っただけど」

これまた、海賊王をギャンギャンなどとあだ名で呼び、ちっさい癖に生意気で、対等に口を利く子供も、向かいに座るこの賞金稼ぎの少女くらいなもので。

「俺にそんな口を利く女なんざ、俺のカミさんくらいなもんだ」

「あら。そのカミさんと私、きっと良いお友達になれたわね」

「なんで？」

「あんたの悪口を言い合えるからよ。思いっきり同情するわ。きっと私たち、気が合ったでしょうね」

ぴしゃりと言われて、ギャンガルドは口をへの字に曲げた。

「キャプテンのカミさんって、どのカミさんです？」

「あ、おま、馬鹿余計な事を言うんじゃないよ」

運ばれてきた食事に喜びながら、タカが思わぬ事実を暴露した。

「あつら、そうでしたっけね、港という港に、奥さんがいるんではないっけね」

「モテる男は甲斐性があつて大変だねえ」

もちろん、ギャンガルドに対等な口を利いていた奥さんというのは、ギャンガルドが真剣に愛して伴侶にした女性の事なのだが、彼女についてはギャンガルドは自分の手下にも話していない。なにせ、彼女はもうこの世にはいないのだ。

それでも、この男の事なので、他にも女性がいるだろう事は、おおよそ予想が付いていた。だから、平気で手下の前で、カミさんなど口走ることができるのだらうし。

それにしても。

「サイツターよね」

キヤルの一言には、大きな棘が突き出ていた。

「そうは言うけどなあ、全員本気だぜ？ニーベレッドのどこに行くときゃニーベレッドの事しか考えねえし、リヤコムリカのところならリヤコムリカの事しか考えねえし」

女性の名前だけで国が違う事がなんとなく分かるあたり、流石に海賊といったところか。ニーベレッドは西の国の名前だし、リヤコムリカは北の国の名前だ。

「当然です。女性の元に行く時に、他の女性の事など考えていたら失礼というものです」

「だいたい、逃げ口上よねそれ。一夫多妻が効率的だなんて、太古に滅んだ考え方よ。獣だわ。原始人だわ」

「そうっすよね！俺なんかマーゴット一筋ですぜ！」

「そこでお前が嫁の名を口にするかコラ」

そんな会話をしているうちに、全員分の食事が綺麗にテーブルの上に並べられた。

「タカにお嫁さんがいるのかー」

「へえ、もう、可愛くって」

でれでれと顔を真つ赤にする夕方に、場の空気は一気に和んだ。

「宿屋の人に聞いてみれば、馬車の事も分かるだろうけれど」

ギャンガルドによつて大きくずれた話題を、ここぞとばかりに元へ戻すセインに、キヤルはちらりと視線を寄越して、オムレツにスプーンを差し込んだ。

「そもそも、この村はお前さんたちを追っかけている途中で立ち寄っただけだから、あんまり詳しくないんだよ」

赤ワインを飲みながら、ギャンガルドは悪びれた様子も無い。

「私たちを追っかけて、なんで逆側に来ているのよ」

キヤルたちが通つた道筋と、この村は外れている。

「とりあえずあの森の向こうに向かったつて言うのは聞いていたから、どの道でも森に着ければ見つけられるだろうと思つてな」

余り深くは考えていなかったらしい。

「それで擦れ違つていたらどうしたのさ」

「森の中か、森を抜けたどつかで会つたろ？」

確かに、二人はゼルダの森を抜けた先の遺跡を目指していた。

結局のところ、ゼルダの森の中の屋敷で出会つた人形師から聞いて、そこに目的の探し物はなかったことが分かり、次の目的地を探そうとしていた所で、この連中に発見されてしまったわけなのだが。

「駅馬車の有無くらい、普通調べるでしょう？」

「駅馬車の使い方が良く分からね」

「・・・・・・はあ」

キヤルもセインも、同時に溜息をついた。

そういえば海賊は、ほとんど馬車なんか使う必要はないわけで。

「じゃあ、どうやって私たちの後を追つて来たのよ？」

「馬？」

その馬をどこでどうやって調達して、どこへやったのか。

なんとなく想像が付いて、キヤルは眉尻あたりに青筋が浮かんだ。
「良い値で売れたのでしょうね」

「元手がかからなかったわりに高値が付いたぜ。俺の見立ては正しかったな」

すなわち、王様に借りたか貰ったかした馬なのだ。それをある程度道程が進んで、お金に困ったところで売り飛ばしたということ。「馬の二頭くらいでつべこべ言うような尻の穴の小ささじゃ、国王なんざやってられねえだろ」

「そついう問題じゃないし」

相変わらず、やる事が豪快だ。

バカイソクは海賊王（前書き）

お待たせしました。ギャングァンが何を考えているのかやっと思え
てきました作者です。

前回に引き続き、大変お待たせいたしました。頑張つて最後まで書
き上げますので見捨てずお付き合いください。

バカイソクは海賊王

「その馬二頭がいたら、今頃もつと先の道を進めたわよね」

じろりと、キヤルが海賊王をねめつける。

「仕方ないだろう？ ガンダルフの奴、旅費をケチリやがったんだ」
それは絶対嘘だ。

「何言ってるんスカ。王様はちゃんと旅費を充分出してくれたのに、キヤプテンが行く先々で散財するからすぐ無くなっちまったんじゃないですか。おれちゃんと止めましたよね？」

案の定だったらしい。

この男の事だ。立ち寄った村だの町だのの酒場やなんやらで、酒や女につき込んだに決まっている。

「だっからさあ、お前さつきから何でバラすの」

タカの肩を組んで、ぐいぐいと締め付ける。

「だっておれ、お嬢に嘘はつけねえス」

「嘘はつかなくても黙ってはいられるだろう？」

「駄目ツス！ お嬢に黙ってなんかいらんないツス！」

絞まりかかった首を何とか死守しつつ、タカは一生懸命抗議している。

「ギャンギャンさあ。そういうところが子供っぽいつて言っているのよ。あんたが いいかげんで滅茶苦茶なのは今に始まった事じゃないことくらい分かっているから、さっさと話を進めてちょうだい」

ちゃき

硬質で甲高い音に目を向ければ、黒々とした銃口がこちらに向けられていた。

「うげ」

「おおおお、お嬢？！」

慌ててじたばたともかくタカに、キヤルはにつこりと笑いかけた。
「大丈夫よタカ。この至近距離で狙いを外すなんて有り得ないから」

「それって、何をやっても当たるのは俺のみって事？」

「ギャンギャン以外に誰がいるのよ」

彼女はスプーンを銜え、頬杖を付き、艶然と微笑む。

狙い定めているのは、海賊王の額ど真ん中。

「えれえ自信家だな」

「あら？じゃ、打ってみる？」

タカの頭を放そうとしないギャンガルドに、キヤルは安全装置をかちりと外す。

しばし、二人の睨み合いが続き、彼らのテーブルだけが、凍りついたような殺気にまとわれる。

さすがに、その状況にタカが悲鳴を上げて、この場で唯一この状況を打破できる人物に、縋りついた。

「旦那あ！何とかしてくださいよう！」

「えーっと」

泣き付かれて、セインは小首を傾げてみる。

傍観するつもりでいたのだけれど、このままでは時間もかかりそうだ。

「ギャンギャン。止めてくれない？」

につこりと、さわやかに。

セインの微笑は場の空気を更に凍りつかせた。

「……だから、怖えから、微笑むなって」

「ん？それは君の態度次第なんだけどな？」

ギャンガルドは思わず自分の手下の頭を解放して両手を挙げ、降参のポーズをとった。

タカは、知らずにぶるりと体を震わせた。

「さ、キヤルもそれ、しまつて。早く部屋に戻ろうよ。美味しいお茶を淹れてあげる。ここのは、悪いけど口に合わないや」

「お茶……」

美味しいお茶、の一言で、キヤルも拳銃を定位置に戻し、先程と打って変わった表情で、ニコニコと機嫌が一気に上昇した。

「ミルクたっぷりね？」

「うん。分かってる。お湯を貰って来なきゃね」

セインの淹れる紅茶は絶品なのだ。

「後でタカもおいでよ」

「え？良いんですか？」

「そのバカイゾク王は置いて来てね？」

「もちろんです！」

もう、どちらの手下なのか分からなくなって来ているタカだった。

「じゃあ、話をまとめようか」

結局、タカもギャンガルドも、駅馬車については知らないの、明日にでもどこかで聞こうという事になった。どちらにしろ、この嵐では駅馬車があるとして、すぐに機能するの谁也か疑わしい。それに、馬車に関しては翌朝考えるところ、王都へ向かうルートを決めなければならなかった。嵐で道が分断されていた場合、回避して回れる道を確保しなければならぬ。

地図は、キヤルが購入していたもので間に合った。がさがさと、食事を片付けて飲み物だけになったテーブルの上に広げる。

現在地から、王都へ辿る道筋はあまり多くはない。何せ田舎道。そんなに大きな道が何本もあるわけではなく、大体のルートは決められてしまう。

「困ったな」

もし、山道で崖崩れや倒木で道が塞がれていたとしたら、復旧するまで足止めを食らう事になる。

地図を広げたところで、ルートが限られている事しか把握できず、どの道明日にならないとどうしようもないらしい。

諦めて、早々に地図を畳む。

「まあ、そうになったらそうだったで」

ふうん、と、キヤルは顎を摘んだ。

時間がかかるなら、いつそセインを休養させることが出来る。問題は海賊と一緒にということだけで。

「ほんと、邪魔よね」

「なにが？」

「あんたがよ」

呟きにいちいち反応する海賊王を、黄金の血薔薇の異名を持つ少女は冷たくあしらう。

国王も国王だ。よりによって、何故この男を超越するのか。

そして、セインを王城へ呼び出して、どうするつもりなのか。

キアルの眉間には、年齢にそぐわない皺が、深々と溝を作った。

「そんなに、心配することはないよ。ガンダルフだって、あのラオセナルの一応生徒だったんだし。ラオセナルの事なら、信用できるでしょう？」

「まあ、あんな国王でも、教師がオズワルド卿っていうだけで、なんとなく信用は出来るけど」

二人の会話に、タカが不思議そうに首を捻った。

「あの、ガンダルフとかオズなんとかとか、ラオセなんとかって、誰ですかい？」

そのタカの様子に、キアルはきょとして、次に視線をギャンガルドに向けた。

「説明してないの？」

「おう。面倒くさくってな。つか、そのオズワルドとかなんとかは、俺だって知らねえぜ」

鷹揚に、ギャンガルドは手を振って笑って応えた。

その態度に、セインもキアルも、盛大に溜息をついた。

「お、おれ、何かまずい事聞きました？」

「ああ、タカは悪くない。悪いのはこのバカイゾクだから」
指を向けられた海賊王は、眉間に皺を寄せた。

「んだよ。さつきからバカイゾクって？」

「馬鹿な海賊だからバカイゾクって言っているのよ」
きっぱりと言い切られて、ギャンガルドは情け無さそうに眉を八の字にした。

「えつとね？ガンダルフって言うのは国王の名前でね。今何世だっけ？まあいいや。ラオセナル・オズワルドは、僕らの友人で、国王の家庭教師だった人物なんだ。なかなかの好人物でね。僕の昔の主人の子孫に当たるんだ」

「へえ」

そんな人物達と、親しそうにしているのは流石というか。

「感心しないでよ。君のキャプテンだって、さっき国王を呼び捨てにしていたし」

そういえば、ガンダルフとか言っていた気がする。

「まあ、国王とは顔見知りくらいだし、親しい間柄でもないから、彼が僕にどんな用事があるのか分からないし見当が付かなくてね。唯一考えられるのは、彼の近衛兵の訓練くらいなだけけど、そんなことでわざわざ海賊を拉致したりしないだろうし」

「セインと同じ存在がいるって話もホントか嘘かって言ったら嘘っぽいし。行ってみない事には、何が起きるのか分からなくて」

キヤルの空色の瞳は、不安に揺れていた。

「ガンダルフは、近衛の連中が賢者にやられっぱなしで落ち込んでいるから、カツを入れて欲しいような事を言っていたがなあ」

暢気にそんな事を口にするギャンガルドを、キヤルが睨み上げた。
「あんただって、そんなのが嘘だって事くらい、分かっているでしょ」

セインは、手に入れることが出来たなら、一国ぐらい容易く手にいれる事が出来ると言われている聖剣であり、伝説の大賢者自身だ。彼と出会った時の王都の様子を思い出し、キヤルは身震いした。

出来れば、戻りたくなかった場所。

「なんか、おれたち、本当にお嬢と旦那に迷惑かけてるっスね」

しゅんとしてしまった自分の手下の背中を、盛大にギャンガルドが叩く。

「まあまあ、ガンダルフは俺の船を捕らえた初めての国王だぜ？大丈夫だって。くよくよしてたって始まるモンも始まらねえ。いざと

なったら、俺達でお嬢と大賢者を攫って逃げりゃあ良いだけさ」

盛大に笑う海賊王に、キヤルもセインもあつけに取られた。

そうか。

そういうことか。

この男が、気が合ったといっても、大人しく国王なんて権力者の下につく筈がない。きっと、いつもの悪い癖で面白そうだからこの話を引き受けたというのは、嘘ではないのだろうし、いつでも逃げられるという確証があったから、手下たちを船ごと国王の元に置いて来たのだ。

自分の考えを理解したらしい二人に、ギャンガルドはニツと笑ってみせる。

「なんだ。相変わらず食えない人だね君は」

「俺がいなくなつたって、あいつらいつだって動けるさ。なんてつたって、クイーン・フウェイルの乗組員だからな」

絶対の信頼。絶対の自信。

普段が普段なだけに、この男の本性を忘れがちになるが、やはり海賊王キヤプテン・ギャンガルドなのだ。

セインは可笑しくなつて、ついクスクスと笑ってしまった。

キヤルはキヤルで、一気に肩の力が抜けたらしい。

「分かったわ。みんなのヘッドは、そういやギャンギャンだったわね。その辺は任せるし。私たちは私たちで、何とかするわ」

「どっちにしろ、明日にならないと身動きが取れるのかどうかも分からないからね。ギャンガルドの事は、少しだけ信用してあげるよ」

「少しだけかよ？」

「当たり前でしょ？」

とりあえずは、セインを攫って逃げる気は、今のところ無いのかもしれない。

なにせ、この男は国王を大掛かりにからかっているだけなのだ。気が合ったというのも本当だろうが、ギャンガルドの性分を考えれば、有り得なくはない。

しかも相手は一国の王。

からかう相手としては申し分ない。

大胆不敵にも程があるのだが、海賊王に常識は通用しない。

「で？君は僕らに何をして欲しいのさ？」

「まあ、とりあえず一緒に来てもらって、一緒にトンスラしてもらったら、今のところは満足かな？」

「今は？」

「そのときの状況によるさ。盛大に遊ぼうぜ？」

白い歯を見せて、ギャンガルドはニヤリと笑った。

それぞれの（前書き）

すいません、風邪引いてました。何で長引くんだしかも。まだ鼻水止まんないですが、お待たせしました。続編です。本当に毎回お待たせして申し訳ないです。

それぞれの

呆れ半分、感心半分の、ついでにちょっと安心して、肺からそつと息を吐き出す。

ギャンガルドの今の目的は、自分たちではないらしい。

相手が相手とはいえ、これで、少しは休める。

そう思ってしまうば、急に眠気が襲ってくる。

「じゃあ、ご馳走様。キヤル、僕は部屋に行くけど、君は？」

勘の良い海賊達に気付かれないうちに、さつさと椅子から立ち上がり、連れの少女をさり気なく促す。

「そうね。明日の朝にならないと、身動きが取れるのかどうかも分からないなら、今日はもうこれでお開きにしましょ？」

そう言つて、わざと欠伸までしてくれるのは過剰な演技だと思うのだが、彼女が減多に見せないような年相応の稚拙さが窺えて、少々笑みがこぼれる。

「……………」

足に衝撃。

笑ったのが気に入らなかつたらしい。キヤルの踵が、足の親指に思いつきりめり込んでいる。甲は甲で、しっかり踏みつけられていて。

痛みと悲鳴をとつさに飲み込んだ自分は偉いと、セインはこっそり思つた。

「じゃ、ギャンギャン。今夜はご馳走様」

「……………あんまり苛めるなよ」

セインに必殺の一撃を加えた事を気付いたらしいギャンガルドに、キヤルはそれはもう、満面のイイ笑顔を向ける。

「何のこと？」

その微笑を受け止めて、ギャンガルドは、そつとセインを除き見て、一言。

「がんばれよー」

「うるさいよっ！」

せつかく堪えた悲鳴も痛みも、甲斐が無かったらしい。

「旦那、お大事に？」

「そこで疑問形なの？」

なんとなく三人のやり取りに事態を察したタカに労われて、セインは居た堪れない。

「・・・ギャンギャン、明日の朝食も君の奢りね」

「は？いや、何だそりゃ？」

「うん。気にしないで。八つ当たりだから」

につこりと、最上の笑みをくれてやれば、海賊王は押し黙って力クカクと首を縦に振ってくれたので、セインはタカに手を振って、ようやくと、暴力的で我侭な主と共に部屋へ戻って行った。

踏まれた足はとても痛くて、どうしても引き摺りがちになっていた。

「さて？」

歯を磨き、寝巻きを着て、就寝準備完了。

キヤルは向かいのベッドに腰掛けて、うとうとし始めたセインの前に、腕を組む。

「セインが眠いなんて、珍しい事もあるのね」

「僕だつて睡眠は取ります」

それは知っている。人の形を取れば、セインは睡眠も取るし食事も摂る。彼だつて一応人間の部類だとキヤルは思っているが、眠たそうなセインは見た事がないような気がした。

「それも怪我の所為かしら？」

「多分。休息を身体が欲しているのだろっね」

瞼がとろんとしている様は、非常に見ていて飽きない。
なんて珍しい。

「あの」

「んー？」

「じつと見られているのも落ち着かないのだけど」

へらりと笑ったセインの言葉に、無意識に自分が彼の顔を見つめていた事に気付いた。

「ああ。ぼうつとしていたわ」

「・・・珍しいね」

言った途端に、セインの上体が傾いだ。

「ちょ、セイン！」

慌てて両腕を差し出すが、寸での所で、彼は自身を支えて持ち堪えた。

「ちょっと。思ったより傷が酷いなんて言わないでよ?!」

セインの傷は塞がりかけているし、時折血が滲むとはいえ、そこまで状態が悪いとは判断していなかった。

見誤ったか。

キヤル自身も大怪我を負った事くらいあるから、なんとなく怪我の治り具合の道程は分かる。しかし。

自分は医者ではない。

結局は素人判断なのだ。

「お医者、呼ぶわ」

慌てて部屋を出て行こうとした彼女の細腕を、セインが咄嗟に掴んで引き寄せる。その手が冷たい。

「セイン？」

顔を覗き込めば、色無くして、額に汗を滲ませている。

辛そうなくせに、セインはゆっくりと首を振る。

「でもっ！」

掴まれた腕を振り解こうとしたが、血の気を失った白い手は、それでもキヤルを離そうとはしなかった。

「こんな時まで馬鹿力！」

泣きそうになれば、汗の滲んだ蒼白な顔のまま、セインがキヤルを見上げた。

ベッドの端に蹲る様に腰掛けるセインから、自分の前に立つキヤルの顔を見ようと思えば、どうしても見上げる形になる。

いつもとは逆の位置で、視線が絡まった。

「だい、じょうぶ」

喋るのも辛そうなのに、うつすらと口元は笑みを形作って。

「無理に笑ってんじゃないわよ！どこが大丈夫なのよ！」

「・・・さとられ、る、から」

ぴくりと、キヤルが肩を震わせた。

ギャンガルドに、この状態のセインを知られてはまずい。あの海賊は、ここぞとばかりに彼を攫うに違いない。

本当なら、セインだけを連れ去ったところで、彼がキヤル以外の人物の言う事を聴くはずがない事くらい、あの海賊王とて承知の上なのだろうけれど、何を考えているのか予想もつかないギャンガルドは、警戒するに越した事はなかったし、二人の中では、それ以前に要注意人物だ。

「ご、め、・・・しばらく、く、ねむ、から・・・」

だから、大丈夫。

掠れて、最後まで言い切れなかった言葉に、キヤルは自分が取り乱しすぎていた事に気付く。

すると、セインの手の平が、自分の腕から滑り落ちると同時に、彼の全身が発光を始め。

光が治まったそこには、一振りの美しい剣があった。

「まったく、苦しいなら苦しい、痛いなら痛いって、ちゃんと言いなさいってのよ」

細身の、ちょっと力を入れれば折れてしまいそうな。シンプルなデザインの柄にはアメジストが嵌め込まれて、良く見れば細工は上質で緻密。そのくせ刀身の輝きは、そこらの剣などまるで玩具に等しく。

これが、大賢者セインロズド。

セインと呼ばれる青年の、もう一つの姿であり、武器。

今ではキヤルもこの剣を振るう事があるものの、セイン自身が剣に姿を変えて意識が無い状態で、手元にセインロズドがあるのは初めての事だ。

セインは剣に姿を変えることで傷を癒す事ができる。

それをすっかり失念していた。

いや。失念させるほど、彼の状態が酷かった。

ベッドの上に横たわる剣は、一見頼り無さそうな様まで、彼を写し取っているようで、キヤルはなんだか腹が立った。

「回復したら、さっさと戻ってらっしゃい！明日の朝までそのままだったら、承知しないからっ」

いつもなら、彼の淹れてくれたお茶を飲んで、ちよつとしたおしやべりをして、それで、ちよつと小突いて。

そうして眠りに付くのに。

「あたしって、駄目だなあ・・・」

ぼつりと、呟いた。

あんなセインを見て、簡単に取り乱してしまった。そんな自分を思い返せば、セインが傷の痛みを隠してしまった理由が容易に解る。本来なら、彼とてあんな姿を晒すつもりも無かっただろうけれど、それだけ、逼迫していたという事なのだろう。食堂で、海賊相手にグズグズしすぎた。

「明日の朝、戻ってなかったら、見てなさいよ」

セインロズドに向かって呟きを落とせば、アメジストが少し煌いた気がした。

「大丈夫ですかね？旦那」

先程と変わらない食堂のテーブルの上で、タカが麦酒を片手に、大小の凸凹コンビが消えて行った方を見やった。

片や背の高い、眼鏡をかけた細身の青年。片や気の強い、まだ十代にも満たない小さな少女。この二人が凄腕のヘッドハンターと、その相棒で伝説級の聖剣などと、誰が知りえようか？

まあ、目の前でウィスキーをあおる自分たちのキャプテンの前では、それも例外かもしれない。

何せ二人とも、この男の前では殺氣も何も隠そうとしない。

自分は気に入られているようなのでそこは嬉しいのだが、この男の嫌われように、がつくりと肩を落とす。

自分はこの男を尊敬もしているし慕つてもいる。だからこそ、無理難題を押し付けられても手下なんかやつてるし、こうして付いて来てもいい。

それでも、あの二人を責める気持ちにはならない。

嫌う理由も良く分かるのだ。

「なあに、大丈夫だろう？ ああ見えて、強情者だ」

出會つてすぐさま、あの二人の力関係は知れている。伝説の大賢者を足蹴にする少女も豪快だが、その大賢者を隙あらば搔つ攫おうとするこの男も豪快だ。

現在、そんな二人に挟まれて、セインという一見青年の姿をした長老の心情を、タ力は思いやらずにはいられない。

「年寄りには勞わつてやりましようや」

「ブツ……！ゲホゴホゲホ！」

しみじみとした夕方の言に、ギャンガルドは迂闊にも、飲んでいたウィスキーを肺に入れてしまいそうになって咽込んだ。

しまった気管があっつい。

「ガッハハハハハハハハハハッハッハハハハハハハハ！！！！！」

ようやく咳が治まれば、次には堪えようもなくて大爆笑。

しまった苦しい。

「お、おま、タカ！それ、大賢者の目の前で言ってやれ！」

「何で？」

気付かないのも酷いし凄い。

常識人な様で、タカもすっかりギャンガルドの手下である。大賢者を年寄り扱いは、充分に豪快だ。

「いや、それとも、お嬢の影響かな？」

ふむ、と、ギャンガルドは己の顎を摘んで、目の前の手下の禿げ頭をつるりと撫でた。

「な、何スか？」

頭を撫でられて、気持ち悪そうに眉をしかめるタカを、ニヤニヤと見やる。

年寄り扱いされて、タカ相手にあの青年の姿をした大賢者が、どんな顔をするのか。

想像しただけで可笑しいではないか。

自分の手下は、出会った頃より確実にあの男を人間扱いしている。彼本来の性質も影響があるのだろうが、最大の原因は。

「ふん。お嬢め」

あの小さな少女。彼女の大賢者への扱いが、全く持ってそれらしくも無い事に加え、大賢者自身がそれを当然のこととして受け止めている。周りがそれに引つ張られた。それだけの事だが、引つ張られた連中を管理しているのはギャンガルド本人だ。

今まで、自分の手下どもが、こんな風に気付きもしないうちに変化させられた事は一度も無い。

大賢者は大賢者だ。それ以上でも以下でもない。今までの奴等なら、そういう扱いをしていた事だろう。それなのに。

「さすがに、頑固に五百年も眠りこけていたヤツを起こすだけの事はあるか」

自分はいまだに、あの青年の成りをした男を、人として見る事はできないでいる。

静かで、そのくせ身震いを起こさずにはいられないあの眼。

薄いくせに、深遠の淵に放り込まれた気分させられるあの色。人のもので有り得ようが無い。

それでも、あれが欲しいと思う自分は馬鹿なのかもしれない。

自覚はあるのだ。

「お嬢が踏んだ足だったら心配いらねえだろ。毎度殴られるか踏ま

れるかしているらしいしな」

問題は。

「隠した傷は、どうだか知らねえが」

ぐいと、ウィスキーを喉に流し込み、口端から零れた、喉に流し込みきれなかった雫を乱暴に手の甲で拭う。

「そっぴや、怪我、してんでしたっけ」

二人を見つけた森でのやり取りで、セインが怪我をしていると、ギャンガルドが言っていたのを思い出す。セインもそれを否定はしなかった。

しかし、この村に辿り着くまで、痛むようなそぶりは見せていなかったように思う。

「まあ、キャプテンがいますからねえ」

二人のギャンガルド嫌いは承知している。傷が痛む事を隠していたのかもしれない。そうになると、ますます心配になってくる。

「おれ、見て来ます」

立ち上がりかけたタ力を、ギャンガルドが片手を上げて留める。

「放っとけ」

「いや、しかし」

タ力は本当に、あの聖剣をその身に宿す男を、人間として扱っているらしい。それに、くつりと喉を鳴らす。

「忘れたか？大賢者は剣の形を取れば、怪我が治っちまうんだろ？」
人並みはずれた、などという言葉が生温く感じられるその現象。

それを目の前にしてでさえ、あの少女はあの男を人間だと言っただ。

「ああ、そうでした」

納得して、タ力は浮いた尻をすんと椅子の上に戻す。

「すげえ便利」

次に呟かれた言葉も、ギャンガルドは可笑しくて笑った。

「お前らも、さあ？なんだろうな。大賢者が好きだよなあ」

「はあ？」

突拍子も無く出た言葉に、タ力は目を丸くして、次に眉間に皺を

寄せた。

「そりゃあ、気に入っていますかね。あんな聖剣だろうが大賢者だろうが、普通に料理の手伝いしてくれるようなの、そうそういませんぜ?」

そつえば、以前あの二人を船に乗せた時、タカはセインに芋の皮むきをさせていた。

「警戒されているのはキャプテンぐらいですからね。おれたちや、仲良くさせてもらってますんで」

「あーあ。俺もそんな風に付き合いてえなあ」

溜息混じりに呟けば、タカは盛大に呆れたといった表情を向けてくる。

「キャプテンが無理強いするからでしょ。仲良くしたきゃ、大人しくしていて下さいよ」

「無理」

「ええー?」

結局、なんのかんのとキャプテンを筆頭に、クイーン・フウェイル号の面々は、敵対している最高級のヘッドハンターであろうが、伝説級の人外であろうが、あの二人を気に入っているのだ。

「まあ、いつか二人ともまとめて手に入れて、海原に連れ出せたら皆で祝杯を上げようや」

「やー。キャプテンがキャプテンである限り、不可能と思われるのは何ででしょうかねえ?」

「ごちん

「痛え!」

盛大に膨れた頭のコぶを抑えて、タカはうめいた。

「殴らなくなっついていいじゃねえですか!」

「ふん。まあ、今日は大人しくしておいたほうが、あの二人のためにはなんだろ」

つまみのナツツに手を伸ばし、豪快に掴んで口の中に放ると、わしわしと噛み砕く。

「お、これうめえ」

もくもくと口を動かすギャンガルドを、タ力が凝視する。

「キヤプテンも、一応気を使ってんですね」

「そりゃあ、これ以上嫌われたくねえし？」

と、いうより、ギャンガルドもセインの傷は気になっていた。

あの嵐の中を無理に歩かせたのも、まともな宿を取らせたかったからだ。キヤルも文句は言わなかった。

あの少女が何も言わずにこちらの提案を鵜呑みにした事で、ギャンガルドはセインの怪我が治りきっていない事に気付いていた。

「お嬢が気を使っているくらいだ。結構深いかもしれねえ」

ぼそりと呟く。

「何がです？」

「何でもねえ」

「キヤプテンの何でもねえは、何かがあるんですよ」

変なところで勘のいいタ力は、しかしそれ以上追及はして来なかった。

そんなところまで勘がいい自分の手下に、ギャンガルドは満足げに口の端を吊り上げた。

「どっちにしろ、明日にならなきゃ、移動できるのかどうかも解りやしねえんだ。大人しくしておくさ」

外を見やろうとして、ギャンガルドは舌打ちした。

宿屋の二階にあるこの食堂の窓は、嵐に警戒して、すべて雨戸が閉められ、室内は蝋燭とランプでのみ照らされているのを忘れていた。

自分も、気が急いているらしい事に、今更ながら気が付いた。

「朝は遠いな」

「嵐はそんなに長くは続かねえモンです」

ちくはぐに思える会話も、自分の手下が己の心情を察して発した言葉と解れば、符合する。焦った所で、世の中びくともしないのは承知の上。結果を出すには目の前の難題を払いのけなければ始ま

らないが、それも長くはかからないだろう。

ギャンガルドは、クイーン・フウエイルに残してきた手下どもを思い出す。

人質にとられた自覚も無く、ギャンガルドとて、人質にしたつもりもない。

全員に、笑顔で見送られた。

城の連中は剣呑に顔色を滲ませていたが、そんな事は知ったこっちゃない。

「お嬢と旦那に会えんのだったら大人しくしていますよ！」

「絶対連れて来て下さいよ！」

「お嬢を泣かせちゃ駄目ですからね！」

「こっちは任せといて下さいや！」

どいつもこいつも、人の心配は皆無だ。

「キャプテンはキャプテンだもんよ。心配しただけ損すらあ！」

肝の据わった連中が、二人に会えるのを楽しみにしている。

国王陛下なんざ知った事か。

食えない狸を、こっちが化かしてやろうじゃないか。

「ふん」

その、全員が会っのを楽しみにしているうちの一人が、どうも体調不良と来れば、別にもう一晩くらい、この宿に留まるのも良い。

兎にも角にも、すべては夜が明けてから。

ギャンガルドは、まだ止まない風と雨の音を聞きながら、思案を巡らせるのだった。

さりとて雨は止まず（前書き）

休憩時間に携帯でぼちぼち製作しております。

でないとまたお待たせしてしまいそうです。でも休憩時間も15分くらいしか執筆時間が無いのですけれども。

それでも頑張つて早めにUPしますので、ご容赦下さい。

さりとて雨は止まず

かたり…

物音に、キアルはうつすらと眼を開ける。

セインが人の形を取ったのだろうかと思ったが、彼の化身は目の前にある。

彼が剣へ姿を変えてから、キアルは二つあるベッドをくっ付けていた。

放置しておくのも心配だし、バカみたいに切れ味の良いセイロズドを枕元に置いておく訳にもいかず、かといって自分のベッドの隅に立て掛けて、夜中にセインに戻ってしまったら、病み上がりになりに床上に放置する事になる。

考えた末に、セイロズドを転がしたベッドに、自分のベッドをくっ付けたのだった。

辺りは真っ暗だったが、キアルは夜目が利く。そろりと部屋を見渡してみるが、何も無い。

しかし、違和感がある。

キアルは眉間を揉みほぐしてからもう一度、さほど広くもない宿部屋を舐めるように見渡した。

隣にはセイロズド。

嵌め込まれたアメジストが、暗闇の中でもぼんやりと異彩を放つ。自分以外に人の気配は無い。

きゅっ、と、胸元の緋色の歯車を、知らないうちに掴んだ。

ゼルダの心臓だった歯車は、肌身離さずペンダントにして首から下げている。

自動人形でありながら、心を持ち、自身を人と信じて疑わなかった少女の心臓は、仄かに暖かい気がして、キアルは逸る気持ちを宥めた。

そうつと、セイロズドへ手を伸ばす。

室内に気配が無いなら、室外。

天井、床下、窓の外、隣部屋、廊下。

気配を探りながら、セイノズドの柄を握り、枕の下に隠していた銃を取る。

グリップを握り、枕の下で安全装置を外して撃鉄を上げ。

不意にヨタヨタした足音が聞こえたかと思えば、ドアの前を、酔っ払いが横切つてゆく。

呂律が回らない口調が、キヤルの神経を逆撫でた。

何事か騒ぎながら、酔っ払いが通り過ぎた後も、室内の違和感は消えない。

雨戸の向こうは、未だに衰えを知らない豪雨に晒されている。雨音と言うには激しすぎるそれは、吹き付ける風も手伝って、ガタガタと窓を鳴らしていた。

しかし、キヤルの耳はそれらの音を聞いてはいない。唯ひたすらに、全神経を傾けて、違和感の正体に集中した。

呼吸を止め、ベッドの中で体制を整え。

ひゅっ

小さく息を飲み込んで、ベッドに掛けてあったブランケットをバサリと空間に投げ捨てた。

ダン！！

一息に扉へと飛び出し様、横合いへ一線。セイノズドで投げたブランケットを切り裂いた。

ついで、扉をも切り裂く。上部から斜めに降り下ろせば、木製の扉は役目を為さなくなる。

出来た隙間から廊下へ飛び出して、小さな身体に出来うる限りの酸素を吸い込んだ。

「こんの、大馬鹿者があ！！！！」

それはそれは、宿屋全体がビリビリと振動したかと思うような大音声。

部屋の中には袈裟懸けにバツサリ切り裂かれたブランケットに、

大の男が埋もれて倒れていた。

「おいおい、どうしたんだ一体!？」

「なんだ？」

ばたばたと、宿泊客達が驚きに顔を出す。

逃げる準備までしているのがいるくらいで、薄暗い宿屋の廊下は、客達が手にしたランプで、一気に明るくなった。

「大丈夫？」

聞き慣れた声に見下ろせば、自分の行動と声に驚いたのか、セイロンがいつの間にか人の姿に戻っていた。キヤルは彼の腕を握っている。

抜き身の剣なぞを手にしているのを、自分達以外の宿泊客に見られずに済んだのは僥倖か。

「どうかしたのかい!？お嬢!」

タカが見物人を押し退けながらやって来た。

「タカ」

その顔に、キヤルはホツとする。

ちらりと、自分達が借りていた宿泊部屋に目線を流せば、それだけで理解してくれる。

「ああ、皆さんがた。お騒がせして悪かったね。何でもないんだ」
何でもないというわりに、小さな少女の目の前の扉はなんだか斜めに切れているし、先程のつんざく様な大声も気になるが、相手が子供だという事と、どうもその保護者らしい男が現れたという事で、宿泊客達はぶつぶつ苦情を漏らしながら、各々の部屋へと戻って行く。

厄介事には、誰でも首を突っ込みたくなかないものだ。

見物人が減ると同時に、光源であるランプの数も減って、廊下は元の薄暗さを取り戻す。

「お嬢、一体どうしたってんだ？」

心配して顔を覗き込むタカに、キヤルは再び、扉の壊れた室内を示す。

中を見渡せば、暗い部屋の入り口近くに、廊下から差し込む仄かな明かりに、盛り上がったブランケットが二枚。良く見れば、一枚の大きなブランケットが切れて二枚になっている。キヤルが切った物だ。

「あれ？」

そのブランケットの隙間から、色々はみ出しているのは人の手足ではなからうか。

タカはキヤルを振り返った。

「うちのキャプテンなら部屋にいるぜ？」

「じゃあ、そこに伸びてるのは誰よ」

気配の殺し方、襲って来るタイミングを見ても、不法侵入者はギヤングルドだと思ったのだが。

だからこそ、容赦なくセインロズドで叩き付け、腹が立ったから怒鳴り付けたのに。

「お嬢、峰打ちにしたんだろ？それなら、うちのキャプテンだったらもつとくに立ち上がってるぜ？」

「…そういやそうね」

不本意だが、タカの意見には賛成せざるを得ない。

いくら名の知れたベッドハンターで、銃をぶちかまし、剣を振り回そうがキヤルはお子さまだ。仮にも海賊王と呼ばれる男が、あの程度で気絶なぞするはずがない。

腕力に決定的な差がある。

それでも、一般の大人くらいなら、キヤルは軽く伸してしまえるが。

「じゃあ、あれ誰よ？」

「さあ…？」

キヤルとセインとタカで、なんとも気持ちの悪い顔をした。

「とにかく、キャプテン呼んで来るわ」

この場で悩んでいても仕方がない。

どたどたと、タカはギヤングルドの部屋へと走って行く。

「ねえ、キヤル」

「何？」

セインはキヤルの側で膝を着いたまま、彼女にとられた腕で、彼女をくい、と引っ張った。

「宿屋の主人が顔を出さないのはどうしてかな？何か聞いている？」

先程のキヤルの大声に、周りの客等が様子を見に来るくらいなら、宿の管理人だつて気が付いているはずだ。

大きなホテルならともかく、ここは小さな宿屋なのだから。

「もしかしたら、この嵐の音で聞こえていないのかもしれないけれど」

ざわざわと、悪寒が首の辺りを這い上る。

「セイン、体調は？」

「さつきよりはだいぶ」

「わかった」

二人とも、部屋の中で倒れる人物から目線は外していない。

なにせ、キヤルに違和感を感じさせても、進入を許すほど気配を消していたこの人物は、ギャングルドほどとは言わなくても、それだけの腕を持つという事は解り切っている。いざとなった時、セインの体調を気にしては戦いにくい。

「へえ？なにやら物騒じゃねえか」

タカに連れられて、面白そうに廊下を歩いてくるギャングルドを、二人が見上げた時だった。

「ちっ！」

セインの舌打ちが聞こえる。

後頭部を鷲掴みにされて無理に床の上に倒されると、それは同時だった。

「へえ？なかなか演技派じゃないか」

顔を上げれば、いつでも動けるように片膝を着いたままだが、キヤルと一緒にセインも伏せている。

振り向けば、壁は横長にぱっくりと口を開けていた。

向かいの部屋の扉ごと切られていたものだから、扉の上部が切り口から綺麗に内側の室内へと倒れて行った。

「ひい！」

中に居た宿泊客の悲鳴が聞こえたが、今は構っている場合ではない。

「何すんの、よ！」

立ち上がりざまに発砲すれば、標的は跳んで弾道から逃れる。体勢が整わずに撃ったのだから、避けられても仕方が無いかもしれないが、この至近距離でそれだけの瞬発力は凄い。

驚いてもいられず、キヤルは続けて発砲する。

補充用の銃弾は部屋の中だ。あまり無駄には出来ないが、今は海賊共もいる。悔しいが彼らの実力は折り紙つきなので、ここは信頼させてもらう事にする。

遠慮なく標的をギャンガルド側へと誘い込めば、海賊王はニヤリと笑って、軽く腕を上げた。

キヤルの弾丸に誘い込まれた謎の人物は、人物なりきに勝算でもあったのだろうが、生憎相手が相手だった。

大きく振り上げた足は難なくギャンガルドに捕らえられ、次に繰り出したナイフは、ひよいと小首を傾げられて空を切る。

ぽーい、と、音がしそうなくらいに軽く投げ出されれば、後ろに居たタカに、思いつきり踵落しを食らって再び気絶した。

「ったく、人騒がせだぜえ」

またもや伸びてしまった人物を、四人で眺めおろせば、とりあえずは男だった。

「あゝあ。女だったらなあ」

「男だつて解っていたから容赦しなかったんでしょうが」

残念そうに自分の顎をさするギャンガルドに、呆れたように呟くのはタカだ。

「まあ、その道のプロってところかな？」

同業者か暗殺者か。

とりあえずはキヤルとセインを襲って来たところを見れば、暗殺者では無さそうだ。

狙いがギャンガルドであれば話は別だったが。

何にしる、刺客は刺客だ。

「何か持っていないかしら」

うつぶせに倒れた男を、キヤルはうんしょ、と転がして仰向けにさせる。

頭からすっぽりと被った黒い袋には、穴が二つだけ開いていて、そこから目が見える。服装は全身濃い目の灰色で、なんというか、いかにも、な格好だった。

腰にはナイフが数本。壁を切り裂いたのはこれだろう。大きな目のナイフはかなり刃幅が広い。風圧やらを考えれば扱いにくいのではないかと思うが、まあ、横薙ぎに振るう分には空気抵抗は無いのかもしれない。平たい刃は、人を殴るにちょうど良さそうでもあった。「もらつとく？」

「そんな使い難そうなの、いらねえよ。捨てっちまえ」

言われて、キヤルは素直にポイポイとナイフを放り出す。

ごそごそと服を脱がして、ポケットやら何やらをまさぐって、出てきた小道具を広げてみるが、針金だの財布だの、ちょっとした盗人道具だの。あまり参考になりそうなものは出てこない。

「まあ、プロなら、証拠品は持ち歩かないか」

諦めて、キヤルはギャンガルドを見上げた。

「後は好きにしていいわよ」

「ほ？」

「だって、暇なんでしょう？」

それはそうなのだが。

「役場にでも連れて行けば、賞金首だったらお金に変えられるのだけど。ここの役場、小さすぎて、手続きに時間がかかりそうなんだもの。安物ならまだしも。それなりの金額になりそうじゃない？ コイツ」

「…要するに。面倒臭いのか」

少し呆れたような顔をされたが、キヤルは眉間に皺を寄せてギャンガルドを睨んだ。

「それなりの金額になったとして、その額をそろえるだけの能力がこの村には無いって言っているのよ。そうなると、町役場に問い合わせるでしょうね。それに加えてこの嵐。助成金の到着を待つのにどれだけかかるかしらね？」

あくまで、この刺客が賞金首だったらの話だが、その可能性は高いだろう。

「それとも、コイツを一番近い町まで一緒に連れて行く？そっちの方が面倒だわ」

ふむ、とひとつ唸って、ギャンガルドは人の悪い笑みを浮かべた。ちよつとばかり凶悪だった。

「よっしゃ！」

ウキウキと楽しそうに、ギャンガルドは伸びきって抵抗も無い刺客を縛り上げ、ズリズリと引き摺ってキヤル達の宿部屋へと入って行く。

寝台のランプに灯りを付けて見晴らしを良くすると、鼻歌混じりに窓を開け、雨戸を開け。

雨風が吹き付けるのもかまわず、ヒョイと縄でぐるぐる巻きにした男を持ち上げて。

ぽい。

さて。ここは三階だった気がするけれども。

「ぎゃ」

風雨の音に混ざって、短い悲鳴が外から聞こえた。

「あら。生きているみたいね」

キヤルの言葉に、ギャンガルドは顎をつまんで少し考え、今後は廊下に戻って男から取り上げたいっさいがっさいを、タ力に持たせる。

そうして二人で窓辺に寄って。

ガラガラガシヤ。

下も見ずに投棄。

もちろん財布は抜き取った。そこはぬかりない。

今度は声も聞こえなかった。

「ナイフも捨てたの？」

「一本だけ手掛かりになるかと思って貰った。後の下で刺さって
んじゃねえか？」

セインの質問に答えながら、今度は手元に残っていた縄の端を、
ぐいぐいと引っ張った。

どうやら落つことした刺客を括りつけた縄に繋がっているらしい。
ゴン、ガン、ドカ、などと聞こえるのは、壁の突起部にでもぶつ
かっているのだろう。

「どうするの？」

「ぶら下げんの」

ある程度引っ張って、窓の外に備え付けてある転落防止の棧に縄
を結び付けて、ぱたぱたと雨戸を閉め、窓を閉じ。

一段落終えて、なんとも爽やかに、額の汗を拭う海賊王は、とて
も満足そうだった。

雨のザアザアという音と、風のビュウビュウという音で部屋がい
っぱいになる。

先程までの騒動を、嵐が消し去ってしまったかのようにだったが、
そうも暢気にしてられないのが現状だ。

「とりあえず今日はこれで心配ないだろ」

「死んじやわないかな？」

「死んだところで気にするな」

爽やかに物騒な科白を返された。

「部屋の下で死体がぶら下がってるって、嫌なんだけど」

夢見が悪そうで、セインはムツとする。そんな事を言うなら、ギ
ヤンガルドの部屋の窓にぶら下げてやろうかと思う。

「大丈夫だろう？ナイフが刺さってようが、身包み剥いて裸同然だ

ろつが、嵐の中でだつて殺し屋だ。鍛えてるだろつよ」

「運を天にまかすみたいな感じかなあ」

肺炎くらいは起こしそつだが、人を襲うような奴に、情けは無用かと、セインも開き直る事にする。というより面倒くさい。

「自分の宿屋の壁に得体の知れないのがぶら下がつてたら、この評判もガタ落ちだろ。どう考えてもこの状況、雨音がでかいにしたつて、従業員の一人も見に来ねえんじゃ、金でも掴まされてるに決まつてる。いい気味だ」

ふん、と、鼻を鳴らすギャンガルドに、キヤルは目を見開いた。

「え？そんな事まで考えていたの？」

「まあなあ。考えてつていうか、面白いだろ。朝、通りを歩いていたら宿屋の壁にパンツ一丁の男がぶら下がつてんだぜ。滅多に見れる光景じゃねえだろ」

面白い悪戯を成し遂げた子供のように、満足げな海賊王である。

真夜中のお茶会手始め（前書き）

職場の休憩中に携帯でポチポチ打って、まとまったらパソコンで編集してUPしています。それでも中々更新が進まず申し訳ありません。

来年2月にリストラされるので（派遣の方々よりはマシなんだろうけれども）暇になるかと思っています。そうしたら今よりは時間が出るでしょうから、就職活動の合間にどんどんUPして行こうと思います。

真夜中のお茶会手始め

「時々思っのよ」

「あ？」

キヤルがしみじみと呟くので、ギャンガルドは目線を下ろして彼女を見やった。

「ギャンギャンって、性格がひねくれてる以前の問題で、実は単に性格破綻しているだけのお子様かしらって」

セインとタカが顔を見合せ、ギャンガルドは眉を上げて目を見開いた。

あまり見られる表情ではなかったが、キヤルは目もくれない。

タカに頼んで、くっ付けていたベッドを元に戻し、間に部屋の隅にあった小さなテーブルを設置してもらうと、そのテーブルの真ん中にランプを置いた。

「ちよつと暗いわね」

真夜中で、嵐の為に雨戸を閉めきっているのだから当然なのだが、月の輝く夜なら、まだ部屋は明るく、先程のような輩の侵入も許さなかった事だろう。

がさごそと、キヤルが自分の鞆から何かを取り出して、セインに渡す。

「眠れない？」

おとなしく差し出された箱を受け取って、セインが尋ねれば、無言で、鞆から更にチヨコレートを取り出した。

無言での肯定に、セインはタカへ振り向いた。

「タカ、一緒に来てくれる？」

「へ？何処へ行くんです？」

急なご指名に戸惑って、つるりと自分の頭を撫でる海賊船のコックに、セインはにつこりと答えた。

「ちよつと厨房まで」

言いながら部屋を出てしまうセインを、タカが慌てて追って行く。
「こんな時間に厨房なんぞで、何をするんだ？」

二人が出て行った扉を見つめながら、ギャンガルドが呟いた。

「ギャンギャンは別に帰って寝てくれて良いわよ」

包装紙を解いたチョコレートの粒を一つ口に含みながら、キヤルは冷たく答える。

「何だよ。不信人物を捕まえんの手伝っただろ？」

「そうやって恩着せがましいところ、直した方がモテるわよ」

ちろりと睨めば、ニカツと爽やかな笑顔を向けられた。

気持ち悪い。

「俺は既にモテモテだからな。少しくらい欠点があつたって構わないのさ」

実際、モテるのだろう。だからといって自信満々に言い放つところ、またムカつく。

「俺なんぞより、お嬢の方が睡眠不足になるんじゃないか？子供は寝る時間だぜ」

急に頭をぐりぐりと撫でられる。

「首がもげるじゃない！」

ぺしりと、その手を叩き落とせば、叩かれた手をわきわきと動かす。

「子供に子供扱いされたからって、幼稚な仕返ししないでもらえる？」

「だって暇だもんよ」

「だから、部屋に帰って寝たら良いじゃない！！」

睨めば、腕組みをして考え込む。

顔だけは真剣だ。

「いやいや、賢者とウチのコックが揃って厨房に行つたってんだから、きつと何ぞ旨いモンにありつけるんだろ？」

この男は、何故こうもマイペースなのか。

大きな溜め息が、自然に吐き出される。

「お茶を淹れてるだけよ」

キヤルは諦める事にした。大きな子供程、相手をして疲れるものはない。

「こんな夜中に茶だあ？」

「ミルクティーよ。寝る前に飲むと落ち着くのよね」

どうやら期待外れだったらしく、ギャンガルドの眉尻が下がって、なんとも奇妙な表情をしている。

「何よ。勝手に期待しておいて、勝手にがっかりしないでくれる？」
キヤルはもう一粒、チョコレートを口の中に放り込んだ。

「そもそも、真夜中に食事しようって方が驚きよ。胃がもたれるわよ」

「夜中だろうがなんだろうが、運動したら腹が減るだろうが」

「呆れた！ちよつと動いただけじゃない！？」

そりゃあ、安眠妨害も甚だしい不届き者を縄で巻いて外にぶら下げたのはギャンガルドだが、こちとら一戦交えている上に、緊迫感から精神的疲労もある。

「だいたい、タカはお茶に誘ったけど、ギャンギャンを招待した覚えは無いわ」

夕食時に、タカをお茶に誘ったもののセインの体調が思わしくなく、彼を呼びに行くことなく寝てしまっていた。

もちろん、お茶だって飲んでいない。

セインロズドから、姿をいつものセインに戻したお茶汲み係の顔色が、いまだに青ざめていたものだから、この男の前に置いておきたくなかったのに。

「つまんねえなあ」

「お腹空いたんだったらコレあげる」

半ば諦めて、キヤルはベッドから飛び降り、鞆の中から紙袋を取り出した。

ぽん、と紙袋をギャンガルドに渡せば、嬉しそうにがさがと中身を覗き込む。

その仕草が本当に子供のようで、キヤルは眉間にできた皺を揉んだ。

「こんなの持ち歩いているのか？」

紙袋の中身を摘み出し、ギャンガルドはまじまじと、指の間に挟んだソレを見つめる。

薄いベージュ色の、ちよつと曲がつた丸い粒。

「ナッツ類は栄養豊富で非常食に最適よ」

「それくらい知ってる」

「じゃあ、いちいち聞かないでよ」

「だってお嬢、黄金の血薔薇だろ？」

「だから？」

「野宿しないで宿屋に泊まるだろ」

キヤルは黄金の血薔薇という二つ名を持つ、腕利きのベッドハンターで、要するに獲物に困りさえしなければ金持ちだ。

そんな自分が非常食にナッツを持ち歩くのが不思議らしい。

「あのね。私は拠点を持たないし、賞金首を狙って移動して歩くタイプのヘッドハンターだから、普通に野宿するし、移動中にご飯なんてザラなのだけど？」

「ご丁寧にも説明してやれば。」

「成長期のお子様なのに」

哀れなものでも見るかのような顔をされた。

ドン

「うお！」

「・・・っち」

超近距離でぶつ放してやったのに、寸でのところでかわされた。

「避けるんじゃないわよ」

「や、避けるだろう、普通」

憎たらしい海賊王から視線を外す。

聞き慣れた足音がバタバタ聞こえて、扉が開いた。

「今、銃声が聞こえたんだけど！」

セインが、慌てて乱暴に扉を開けるものだから、壊れた扉は、ついに壁から離れ離れに分裂してしまった。

「大丈夫よ。どこぞの海賊にお仕置きしただけだから」

「あんまり穴開けたら駄目っすよ？」

「そういう問題でもないと思う」

セインの後から、タカも顔を出し、二人でティーポットやらカップやらを手に持って、すぐ横の壁に空いた銃痕や、扉が壊れている事を除けば、微笑ましい光景だ。

特にタカが。

禿げ頭にティーポットは違和感がありすぎだろう。

「お茶もゆっくり淹れられないのはどうなのさ」

セインは半ば呆れ半分に、テーブルの上でお茶の用意を進めていく。

人数分のカップにお茶を注げば、茶葉の芳醇な香りと、ミルクの甘い香りが相まって、豊かな香りが鼻孔をくすぐった。

「はい、どうぞ」

「ありがと」

キヤルはそのお茶を、普通に口にする。

「どうしたの？」

カップを見つめたまま、微動だにしない海賊を、セインが覗き込んだ。

「いやいや」

「何が？」

「いやいやいや」

「…何が言いたいのさ。意味がわからないよ」

自分の分のカップはちゃっかり確保しつつ、手元のミルクたっぷりの紅茶と、聖剣兼大賢者の顔を交互に見やる海賊王は、とても忙しい。

その視線が、何かム力つく。

「いい加減にしないと、切るよ」

セインがにつこりと、あくまでも口調は軽く言い放つ。

「おお？」

「…切りたいみたいだね」

「いやいやいや待て待て待て！」

表情は変えずに微笑みながら、さっさと両手を合わせようとするセインの腕を、ギャンガルドは慌てて掴みかかった。

もちろん、紅茶の入ったカップはテーブルに確保して。

「…離してくれる？」

見た目に反して怪力なセインを押さえるのに、ギャンガルドの腕も震える。

「うん。悪かった。俺が悪かったから、聖剣はやめようや？」

「へー？」

表情を変えずに、セインは掴まれた腕はそのままに、くると身体を回転させて瞬時に背中をギャンガルドの懷に潜り込ませた。

次の瞬間、ギャンガルドは床から足が離れていた。

「お？」

ズダン！！

この部屋の下の宿泊客は良い迷惑だった事だろう。気が付けば景気良く床の上に投げ飛ばされている。

「いてて」

「すげえ…。俺キャプテンが投げられてんの初めて見た」

強かに打ち付けた背中を撫でながら眉をしかめるギャンガルドの横で、タカが目丸くした。

「そんなに僕のお茶を飲むのが嫌なら、別に無理しないで良いし」

冷ややかに見下ろすセインに、ギャンガルドはニヘラと笑った。

「やっぱ怒らすと恐えな」

パタパタと埃を払いながら立ち上がると、ギャンガルドはテーブルの端に確保していたカップを手にとって、思いきり匂いを嗅いだ。

「あー、良い匂いだぜえ」

目を瞑り上機嫌に呟いた。

「ちょっと。止めてくれないかしら？」

あまりの気味の悪さに、キヤルは顔色が青くなり、セインはその横でコクコクと頷く。

「何だよ失礼な奴だな」

「あんたにダケは言われたくないわ」

だけ、の部分殊更に強調してやったのに、ギャンガルドは嬉しそうにミルクティーに口を付ける。

「旨い！！お嬢ちゃんは毎回こんな旨い茶あ飲んでんのか！？」

「悪い？」

そりゃ、セインと一緒に旅をしているのだから、茶葉さえあれば、いつだってセインが淹れてくれる。

夜のお茶は定番になりつつある。

「子供の体には強いから、必ずミルクや蜂蜜なんかを入れてもらってるけど」

言っている側から、ギャンガルドの目がキラキラし出した。

「タカ！！」

「あー、言いたい事は解ります。さっき茶葉の量やら、手伝いがてら教えてもらいやしたから」

自分のキャプテンが、何を訴えているのか嫌になるくらい理解してしまえるコック長だった。

「大げさなんだよ、ギャンガルドは。だいたい、なかなか口を付けずにイヤイヤ言っていたのは何だったんだよ？」

呆れて、セインが髪をかきあげながらギャンガルドを見やる。

「だって大賢者って手先が不器用そうだからよ。こんな良い匂いの旨い茶を淹れられるのが意外だよ」

「…本っ当に、君って失礼だよね」

セインの眼が据わった。

ひよつとしなくても（前書き）

2月リストラ予定が先月リストラされました。

最後はもう、退職金も残業代も出さなくせに休憩時間まで削られるという酷使のされようでしたが、生きて何とか退職。おかげでひと月全く更新できませんでした。申し訳ありません。

今月からはバリバリ書きます。よろしくお願いします。

ひよつとしなくても

「何だよ。本当の事だろう？」

「……………ふうん？」

今度こそ、勢い良くセインは手を合わせた。

「おわわわわ！！！待て待て待て！」

「待たない！」

ついに、ずるりとセインの手の平から、聖剣の柄が引き出された。

「だああああー！」

「うるさいし！」

必死になってセインの腕を掴むギャンガルドだったが。

「おうわ！？」

ダダン！

宙を飛んだのは本日二度目だ。しかも短時間の間に。

「キヤルのナッツも食べたみたいじゃないか。もうお茶は良いですよ。さつさと部屋に戻って寝ちゃいなよ。子供は寝る時間だよ？」

「ははー。おつかねえなあー」

ひんやりとした視線をくれるセインに、床の上に伸びたまま、乾いた笑いを漏らす海賊王だった。

「うん、まあ、自業自得ってヤツっすね」

しみじみと呟くタカに至っては、おかわりを注いでもらいつつ、キヤルのとっておきのチョコレートをいただいている。

「お前、ずるいぞ」

二度も食らった背中の中の痛みになかなか起き上がれず、床の上に座り込んだまま、後頭部を撫でるギャンガルドは、子供みたいに口を尖らせた。

「タカは悪い事をしていないもの」

ベッドの端に腰掛けたまま、キヤルが美味しそうにカップを傾けている。

「へいへい、俺は邪魔者ですよーだ」

ようやく立ち上がったギャンガルドは、本当に子供みたいに拗ねてみせる。

「邪魔っていうより、害虫よ」

「お嬢？」

追い討ちをかけるキアルを、情けない顔で見やった。

「とにかく、外でぶら下がってる男の素性も分からねえままだし、嵐はまだ止まねえし。何にしたって帰って寝たほうが良いっすよ、キャプテン」

最終的には手下に宥められ、大人しく部屋に戻る事になる。

扉は壊れているので、残骸をまたぎ、枠だけになった部屋の入り口をくぐって廊下へと出て、ギャンガルドはひよい、と、室内を振り返った。

先程と同じ位置でカップを手にしたままのキアルと、背中を向けたまま、こちらを見ようとしてもしないセイン。

ふむ、と、一つ頷いて、ギャンガルドはタカの頭をぺちりと叩く。

「なんスか？」

「ちようどいいや。お前、お嬢たちの世話してから戻って来い」

自分たちのキャプテンは、人に気を使うような男ではないので、タカは眉をしかめた。

「何かあつたんスか？」

「ありそうだから、様子見て来いってんだよ」

「素直にそう言えば良いのに」

「ぼやけば睨まれた」

「うへえ。俺らにはそういう顔できんのに、どうしてお嬢たち相手だと全部台無しになっちまうんですかねえ？」

「そりゃあ、惚れた弱みってヤツじゃねえか？」

にやりと物騒な事を言われ、タカは何ともいえない複雑な心境になる。

からかわれているのだと分かってはいるものの、あながち本気と

も受け取れる。どちらに惚れているのかなんて聞きたくもないし、どっちに惚れていたって面倒くさい事この上も無い。

「茹蛸になってるぜ？」

実に楽しそうなギャンガルド相手に、タカは盛大に溜息をつく。

「ま、キャプテンがほだされてちよっかいけなくなっただけで、俺たちは面白いだけだし、二人には悪いけど諦めて貰うっきゃねえかなあ」

所詮は他人事なのだった。

実際、クイーン・フウエイルの乗組員一同、キャルとセインの二人を気に入っているのだから、自分たちのキャプテンがこの二人にちよっかいをかけるのならそれは歓迎すべき事であった。

肝心の、標的にされてしまった二人には、とてつもなく要らない迷惑なのだけでも。

何のかんと言ったところで、タカ自身も、二人に惚れ込んでいたのだった。

翌朝は盛大な大声によって、宿屋に宿泊していた全員が一斉に目を覚ました。

「何よ、朝っぱらから騒々しいわね」

つんざく様な悲鳴が聞こえたのは窓の外。

起きてみれば、部屋の出入り口に、壊れた戸板の代わりに大きな布が留められて、目隠しにされている。

昨夜、タカが付けてくれたものだ。

窓をとりあえず開けてみようと、キャルはベッドから足を下ろした。

昨日のお茶を飲んだ跡は、綺麗に片付けられている。

暗い室内は雨戸を開けばいくらか明るくはなるものの、朝靄のかかる景色は、さほど太陽光を取り入れてはくれそうにない。そもそも、まだまだそんな時間でもない。

下を除き見れば。

「ああ、そういえば」

窓の下に、ぶら下がっている男が一人。

「逃げられなかったのかしら」

外から聞こえた悲鳴は、この男を発見した通行人から発せられたものであるらしかった。腰でも抜かしたのか、石畳の地べたに尻餅をついて、指をさしている。

宿屋の窓も、ちらほら開いて、きよろきよろとあたりを見回す人々がいたが、原因が分かればどうという事はないので、キヤルは外への興味を失って、ガラスの窓を閉め、室内へと視線を戻した。

そのままベッドを横切って、扉代わりの布をめくり、廊下を覗いてみれば、向かいの部屋の中身が丸見えだった。

そういえば、昨晚ナイフで扉を切り裂かれて、大きな穴が開いていたのだった。

宿泊客は既に姿が見えなくなっている。大方、逃げ出したと見るのが普通だろう。

それが証拠に、荷物を抱えて廊下をうろろろする宿泊客がちらほら見られた。

昨夜に引き続き、今朝の悲鳴と来れば、逃げ出したくなるのも仕方がない。

それでも宿屋の主人らしき人物が、全く現れない。

従業員もしかり。

それならそれで、今のうちにトンずらして、宿泊料金を踏み倒してしまうのも、別に罪な事ではない様な気もしてくる。

「セインに言ったら怒りそうね」

ぱさりと、めくっていた扉代わりの布から手を離し、ゆっくりとベッドへ戻った。

もう一度寝直してしまおう。なにせ寝るのが遅かった。

キヤルは大きく欠伸をすると、ごそごそとベッドの中へと潜り込む。

「セイン？」

念のため、隣のベッドで丸くなっているはずの相方に、声を掛けてみる。

返事は無かったけれど、規則正しい寝息が聞こえてきて、キヤルはホッと息をついた。

「海賊どもが起こしに来るまで寝ていたって、別に罰は当たらないわよね」

外の嵐は止んでいたし、廊下はまだ騒がしいけれど、セインを休ませておきたかった。

昨日の夜は色々面倒くさかった。

まあ、結局就寝前のお茶会は出来たし、そのお茶会の後片付けはタカがやってくれたし、ついでに扉が壊れて廊下から丸見えになってしまったこの部屋に、キヤルがセインロズドで切り裂いたケットを上手くピンで繋いで一枚布に直し、扉の代わりに出入り口に付けてくれたのもタカだ。

その間、セインがどうしていたかといえば、ダウンしていた。

傷が痛むのに遠慮が無い海賊王にイライラし、投げ飛ばす事二回。その前に襲ってきた不屈き者との格闘が祟って、流石に傷口が開いた。

タカが洗い物に厨房へ降りている間に手当てをして包帯を巻きなおし、後はベッドへ放り込んでおいた。セインも抵抗はせず、疲れもあったのだろう。すぐに眠ってくれた。

本当なら、セインロズドに姿を変えさせてから眠らせたかったのが、そんな余裕も無く、一度眠ってしまったものを、また起こすのもしのびなく。

それでも、顔色は昨日に比べ、だいぶ良くなったように思える。

あとは、この村から駅馬車が出てくれれば言う事はない。駅馬車が無ければ、荷馬車に便乗させてもらうのでも良い。

それも、次の町までの道筋が、昨夜の嵐で分断されていなければの話なのだが。

「ちゃんと夜が明けたら、何を食べようかしら」

キヤルはそんな事を思いつつ、うとうとと目を瞑った。

「お嬢！！！」

「ぎゃあ！！！」

目を瞑ったところで、大声で呼ばれて思わず飛び起きた。

「早く宿を出るぞ！！！」

「な、何よ？」

タカが、ドタドタと部屋の中に許可も無く入って来る。

「ちよつと、一体どうしたって言うの？」

「説明は後々！とにかくズラかるぜ」

どこか嬉しそうな、機嫌の良いギャンガルドが、意気揚々と壊れた扉をくぐって入って来るのを見れば、何事か面倒な事が再び起こったことは分かる。しかし別段、銃声がしたとか、剣戟が聞こえたとか、朝の悲鳴以外で怒号が聞こえたとか、そんな事も無く、この海賊たちが一体何を慌てているのかさっぱり分からない。

タカは自分たちの麻袋の荷物のほかに、キヤルの鞆をとつと引つ掴む。ギャンガルドはギャンガルドで、まだ眠っているセインを右肩に担ぎ、寝巻きのままのキヤルに靴を履かせてその手を掴んだかと思えば、ひょいと左脇に抱えてさつさと廊下に出、階段を下り、誰もいないフロントを通り過ぎて宿賃も払わずに外へ出てしまった。

「あのね」

脇に抱えられたまま、早朝の村の小道を進んでゆく。

いいかげん朝も明けかけ、靄も消えてなくなり、キヤルが最初に起きた時よりも、太陽は輝きはじめている。

「ちよつと」

それなのに、何が悲しくて、大男に小脇に抱えられ、寝巻きのままブラブラと運ばれて行かなければならないのか。

「こらあ！」

鼻歌を機嫌良く歌いながら、先程から無視をし続けてくれるギャンガルドの腹を、思い切り殴った。

「ぐふうつ」

「ぐふじやないわよ！いいかげん下ろしなさい！さもなきゃ理由を述べなさい！」

抱えられていようが、いるまいが。キヤルはキヤルだった。

「お嬢ちゃん、いきなり腹はねえだろ、腹は」

両手が塞がっているの、痛む腹をさする事も出来ないギャンガルドは、口角を引きつらせて痛みに耐える。

「まあ、もうちつと先に行つてからな」

痛みが治まると、ギャンガルドは先程より更にスピードを上げて、どンドン道を進んでゆく。

「ちよ、ちよつと！私まだ寝巻きのよ！」

じたばたともがいてみても、流石は海賊王。びくともしない。

「お嬢、あんまり騒ぐと目立つぜ？」

見かねたのだろう、タカがキヤルを覗き込んでくる。

「もう、この状態だけで充分目立つてんのよ」

男二人が荷物を抱えて走っているだけなら、さほど不思議でもない。ただ、問題は、片方の大男が、人を二人抱えているという事実。しかもギャンガルドの満面の笑みに加え、担がれている方は二人ともに寝巻きのまま。

人攫いにしか見えないではないか。

「よし、この辺で」

ようやく止まったギャンガルドが、キヤルを地面に下ろした。

セインの事は担いだままだ。

見回せば、小さな裏道の、小さな戸口の前だった。

コツコツ

ギャンガルドが、その戸口をノックする。

パタパタと、軽やかな足音が聞こえると、扉に付いている小窓がぱたりと開いて、人の目が見えた。

綺麗な琥珀色の瞳。まだ若い女性だ。

「誰？」

「俺」

琥珀色の瞳の持ち主に、ギャンガルドは短く応えた。

すると一気に扉が開いて、黒髪の豊かな美女が飛び出した。

「おかえり！」

「おう」

ギャンガルドはセインを抱えているのに、抱きつく女性を軽々と受け止めている。

なんとなく事態が飲み込めて、キヤルは眉間に皺を寄せ。

こっそりと、ギャンガルドのシャツの裾を引っ張った。

「この女性があんたの愛人もしくは何人目かの奥さんだって事は分かったから、さっさと説明なり何なりしてくれないと、お父さんって呼ぶわよ」

美女には聞こえないように、小さな声で海賊王を脅す。

ぴくり、と、ギャンガルドの片眉が引きつった。

「流石だなあ」

一部始終を眺めていたタ力は、しきりに感心して、ずれた荷物を抱え直す。

「まあ、ここじゃ何だ。中へ入れてくれよ」

「ああ、ごめんよ。何だ、お連れさんが増えているじゃないか」

黒髪を撫でながらギャンガルドが美女を宥めれば、感激の涙を指で拭って、彼女は一同を、自宅へと招き入れてくれた。

「あたしは、ジャムリムっていうんだ。ここはあたしの自宅兼お店。表側は小さいけどバーになっているんだ。狭いけど、今は営業もしていないし、こっちでくつろいでいてくれよ」

琥珀色の瞳の美女は、キヤルへの自己紹介を済ませ、ギャンガルドに口付けを落とすと、嬉しそうに自宅のキッチンへと向かって行った。

店と自宅は扉一枚で繋がっている。先程招き入れられた小道側の入り口は、居住スペース側の玄関だったらしい。

現在キヤルが座っているカウンターから、後ろにもう一つ入り口があるのは、店側の入り口らしく、先程通った玄関より、扉は赤く

塗られて間口も広く、なんだか派手だった。

彼女が狭い、と言ったとおり、カウンター席には赤い椅子が五脚、他は入り口の脇に小さな二人掛けの、やはり赤いソファアが小ぢんまりと置かれているだけだった。

そのソファアに、ギャンガルドはセインを下ろす。

「…うつ」

担がれて運ばれて、セインも起きてはいたらしいが、うつすらと目を開けただけで、また閉じてしまった。

顔色が悪く見えるのは、店内が薄暗いからではあるまい。

せつかく、早朝には血色も戻っていたというのに。

「どうして今現在こんな事になっているのか、教えてちょうだい」
キヤルは足のホルダーに納めていた拳銃を抜き取った。

担がれる直前まで、枕の下に隠してあったものだ。自分でも、あの状況でよく持って来れたと思う。

その拳銃を、別段ギャンガルドに向けるわけでもなく、手元でくるくると回し、回転式の銃創へ弾を込めたり出したりしている。

手持ち無沙汰なのか、これも脅しなのか。判断に迷うところだが、ギャンガルドはどちらでも構わないらしい。

「リボルバーよりオートマのほうが使いやすいんじゃないの？」

ころころと、カウンターの upper を転がった一発の銃弾を、摘んで持ち上げた。

「人それぞれよ。弾返して」

「ほれ」

素直に返すと、ついではかりに手の平の真ん中を、ぎゅうつと摘み上げられた。

「痛い。お嬢」

「痛いようにしてんのよ！」

どうも、銃をいじっているのは冷静さを保つためだったらしい。

「今、現在、どうして私とセインは寝巻きのまま、見も知らぬ美人さんのお店でこんなことをしているのでしょうかしらね？」

ジャキン！

ついに安全装置を外された銃口を向けられる。

「お、お嬢、落ち着いて！キャプテンもいい加減にしないと、風穴開きますって！」

見かねたタカが、二人の間に割って入った。

「風穴が開いちまうのは勘弁だなあ」

「じゃあ、説明しなさいよ！」

キャルを押さえ込もうとするタカの腕の隙間から、足やら腕やらをじたばたと出して、結局のところ、銃口をギャンガルドに向けるのをやめないキャルに、ギャンガルドは降参のポーズをとった。

「さっきの女な。自己紹介したから分かっているとと思うけど。ジャムリム。好い女だろ？」

「聞きたいのはそんな事じゃないんだけど」

「前ここに来た時、知り合っただが、田舎に似あわねえくらい情熱的な女でな。いつでも寄ってくれて言ってくれたから来たんだが」

「だから、彼女とあんたの惚気話はどうでも良いのよ。問題は何故ここに来て匿われているのかってことよ！」

一向に本題に入ろうとしないので、キャルはいよいよ撃鉄を上げ、トリガーに指をかけた。

「うん、待て。お嬢が本気なのは分かった」

「確かめなくなっただっていつだって私は本気よ！」

ふうふうと、キャルの鼻息が荒くなってきた。

「宿屋に吊るされてんのが、昨日の刺客じゃなくて、宿屋の主人に摩り替わっていたって言ったら、納得するかい？」

「…待って。朝、初めに起きた時に、一度様子を見たけれど、入れ替わっていたなんて気が付かなかったわ」

すとん、と、椅子に座り直して、キャルは朝方窓を開けた時の事を思い出す。

「ああ、あの悲鳴の後だろ」

「そうよ。悲鳴上げた本人が分からないけれど、通行人らしいのが、屍餅ついて指さしていたわよ」

銃はいまだにキヤルの手の中だ。

「で、俺たちがお嬢たちを起こしに行ったまでの時間はどのくらいあった？」

「さあ？ そんなに時間はかからなかったはずよ。五分あったかしら」「ふん？」

キヤルの答えに、ギャンガルドは顎を摘んだ。

「俺はあの悲鳴が聞こえる前に起きてたんだ。宿屋の外に出て、昨日吊るした男の様子を確認できるくらいにはな」

「……どういう事よ？」

相変わらずもったいぶって話をするのは、この男の悪い習慣だと思っ

「あの悲鳴が聞こえる前に、刺客と宿屋の主人とが入れ替わっていったって事さ」

「じゃあ、私が見たのは宿屋の主人だったって事？」

「そうなるな」

「一体、何のためによ？」

「そりゃあ、俺たちを騙すためじゃねえか？」

わざわざ身代わりを立てて油断させ、隙あれば再び襲おうとしていたといった所か。

「宿屋は災難だったわね」

「ま、結局つるんだ相手が悪かったってところだろ」

「何でつるんでいったって分かるのよ」

セインもその可能性を疑っていたが、確証があったわけでもない。

「そりゃあ、お前さんたちが引き上げた後に、宿屋の亭主を縛り上げたからじゃねえか？」

「は？」

いつの間にそんな事をしていたのか。

と、いうより。秘密をバラした事によって、宿屋の亭主は刺客の

変わりに吊るされたのではなからうか。

可愛そうに。

では、またあのナイフ男が襲ってくる可能性があるということか。
「ああいった手合いに狙われる覚えは、全くないのだけど。アレじやないの？ 本当はギャンギャンたちを襲うところを、間違って私たちが襲われたんじゃないの？」

国王の命を受けて旅をしているのは海賊で、海賊の目的は自分たちだけだ。

「国王の失脚とか、そういうのを狙っている連中がいるにしたって、俺たちの邪魔したところで国は傾くとは思えねえんだが？」

国王を失脚させるなら、それ相応の効果が必要になる。が、自分たちはほぼ、国王の趣味というか、気まぐれで呼びつけられているようなものだと思うていたのだが。

「実は重要な任務でも任されるのかしら？」

「大賢者を引つ張って来いってんだから、その可能性を考えなかったわけでもねえんだろ？」

にやりと、人の悪い笑みを浮かべて、ソファに横たわるセインをちらりと見やったギャンガルドを、キヤルはぎろりと睨んだ。

もし、目的がセインだったのだとしたら、彼の正体が相手に知れてしまっている可能性があるが、それにしても。

「そりゃ、ね。でも、だからって納得いかないわ。私たちは王様の用事の内容も知らないのよ。王様だって馬鹿じゃないんだから、刺客が送られるような内容だったら、あんたたちじゃなくて、それなりの人物を使いにか越すなり、そういった事柄を匂わせるなりするはずだわ。いくらセインが大賢者で、私がそれなりのヘッド・ハンターだっていっても、油断したら殺される可能性だってあるのよ？」

「ふむ。そこいら辺が怪しいと思っていたんだが。違うか」

珍しく、ギャンガルドが真面目な表情をした。

「とにかく、こうして急いで宿屋を出てきた理由は、また狙われる

可能性が高かったから、ということかしら」

ようやく、手の中で遊ばせていた銃を足のホルターに戻し、キヤルはカウンターに両肘を付いて、手の平の中に自分のほったをうずめた。

「昨日吊るしたヤツが来る可能性もあるけどな。組織だって動いているとしたら、確実に新しい、更に物騒な刺客が来るかも知れないからな。面倒くさいし、逃げるが勝ちかと思ってるね」

「だったら、最初っからそう言いなさいよ！」

本当に、この男は。

「賑やかね。朝ごはん、まだなんですよ？」

ひっぱたいてやるうかと手を振り上げたところで、ジャムリムが両手に焼きたてのトーストやサラダを持って戻ってきた。

「まだコーヒーとか、焼いたベーコンとかあるから、運ぶのを手伝ってくれないかい？」

カウンターに料理を並べたかと思えば、指示を出すだけ出して、また奥へと引っ込んでゆく。

「おれ、持ってきますわ」

タカが慌てて、ジャムリムのあとを追った。

狭い店内は、一気に美味しそうな匂いで満たされる。

「ま、俺が様子を見に行ったのは、外でちよつとした物音があつたからなんだが。短時間でお前さんたちに気付かれずに一仕事するよな連中だ。今の賢者じゃ危ねえし、とりあえず非難しとくに越した事はねえと思ってるな」

そういったことには頭が回るギャンガルドの存在は、非常にありがたいのだが。

「礼は言っておくわ。ありがとう。けどね？説明させるまでが一苦労なのよ。ギャンギャンって」

一番面倒くさいのは、刺客でもなんでもなく、この男なのかもしれないかった。

「私のストレスが溜まるのよ」

本当に、この男の何が良くて、大人の女性たちは集まってくるのだろうか。

その謎を解くのは、セインと約束している探し物を見つけることよりも、キヤルには難解に思えるのだった。

ちょっとは先に進めそう？

「まあ、この際その思考回路の摩訶不思議は放っておくとして」
溜息をつきつつ、自分の頭の中を整理する。

「今、さり気なく酷い事を言われた気がするが」

「気にしなくて結構よ。昨夜の刺客を縛り付けておいたのに逃げられた、ということは、結局相手は誰で何が目的なのか分からないままってことよね」

「そういうことになるなあ」

別に意見を求めているわけでもないのだが、ご丁寧にギャンガルドが頷き返す。

「ついでに、どこに潜んでいるかも分からない上に、あの宿屋の主人同様、懐柔されている人もいるかもしれない、と」

言いながら、ギャンガルドをちらりと見やる。

「ジャムリムを疑ってたのか？」

勘がいいというのは、こういった時に便利だ。

「そうね。疑えない材料というものが見つからないうちは、疑ってかかるのが筋ってモノじゃないかしら？」

「ふん。俺の女を見る目を馬鹿にすんなよ？」

にやりと笑われて、キヤルもムツとする。

そういえば、そうだ。この男は、あの海賊王ギャンガルドだった。いい加減なくせに、人を見る目は確かで、状況判断もすこぶる勘が良い。

その辺りは野生動物並だ。

「さあ？どうかしら。色に目移りするのはいつの時代でも男でしょ」

「お嬢、時々年に似合わないえ事を言うよな」

「どうせ耳年間ですよーだ」

べーっ、と舌を出して見せたところで、ギャンガルドがバターを塗ったトーストに歯を立てた。

サクツと、良い音がした。

「おいしそうだね」

声が聞こえて振り向けば、ソファに寝かせていたセインが体を起こしていた。

「大丈夫なの？」

「もうギャンギャンに担がれたくないからね」

セインはゆつくりとソファを手摺り代わりに立ち上がる。

肩に担がれ、そのまま走り回られたおかげで腹の傷が悪化したのだが、これ以上寝ていては、移動のたびに担がれそう。それはご免こうむりたい。

「あんまり無理しない方が良いんじゃないのかい？」

カウンターに居るキヤルの隣に座ろうとすれば、ニヤリと意地の悪い笑みを、海賊王が作るので、セインはふう、と、面倒くさそうに肺から息を吐き出して。

「お氣遣いありがとう。けど、昨日の晩にわざわざタ力を僕らのところに寄越してくれたくらい親切にしてくれたのだから、朝っぱらからまたもや君の肩に担がれて、村中走り回られた僕の今現在の気持ちも、さっさと理解してくれるよね？」

につこりと、微笑んだ。

「はい、お待ちどうさま！」

そこへ、ちょうどジャムリムがタ力を連れて戻って来た。

「……？どうかしたの？ 凄い汗だけど」

「いや、何でもねえ。部屋が熱くてよ」

「そうかな？ ちょっと肌寒いくらいかと思って、コーヒーあったかいの淹れて来たんだけど」

苦しそうなギャンガルドの言い訳に、キヤルはくすくすと笑っている。

笑うキヤルと、ソファからカウンターへ移動しているセインを見て、なんとなくだが状況を把握したタ力が、眉尻を下げて複雑な表情をした。

「まあ、良いじゃねえか。腹減った！飯めし！」

先程齧ったパンに、ジャムリムが用意してくれた生ハムやらスクランブルエッグやらをのせ、最後にトマトを乗せて、ギャンガルドが再び勢い良くかじりつく。

それを嬉しそうにジャムリムが眺めながら、全員にコーヒーを配った。

「今度はどれくらいこの村にいられるんだい？」

「んー？今足止め食らってるからなあ。駅馬車って、使えるのか？」

質問を質問で返すギャンガルドに、嫌な顔もせずに、黒髪の美女は、細くて華奢な指を、綺麗な唇に当てて考える。

「駅馬車はここにもあるけど、昨日の嵐が酷かったから、出せるかどうかは微妙だね。もう少ししたら、駅馬車の組合連中から聞き出せると思うけど」

「駅馬車があるのね？！」

玉子とコンソメのスープを飲んでいたキヤルが、嬉しそうに顔を上げた。

「ふふ。ここは田舎だけど、流石に駅馬車くらいはね」

キヤルの様子に、目を細めながらジャムリムが微笑む。

「ほえ」

間の抜けたキヤルの声に、セインは目を丸くした。

「ど、どうしたの？キヤル、顔が赤いよ？」

「うつつ、う、うるさいわね！」

慌てるキヤルに、ジャムリムが笑う。

「あたしの顔に、何か付いてでもいたかい？」

「ち、違うの！そうじゃなくて、その、綺麗、に、わ、笑うなあつて、思って…」

顔を覗き込まれて、更に顔を赤くするキヤルだったが、弁解する言葉はどんどん尻すぼみになって、最後はもごもごと聞き取れなくなってしまった。

「だから言っただろう？好い女だったさ」

ふふん、と、鼻を鳴らして、キヤルの鼻先を指先で弾こうとしたギャンガルドの手を、セインがペチリと叩き落す。

キヤルはキヤルで、悔しそうにギャンガルドの顔を睨みつける。色々と、ギャンガルドの目が確かな事は、認めたくないけれども認めざるを得ず。

「嫌だねえ！照れるじゃないか」

当のジャムリムは、キヤルと同様に顔を赤くして、嬉しそうにギャンガルドの頭をぺしぺしと叩いている。

「あー。腹もいっぱい胸もいっぱいっすね」

なんだか上手く状況を一言でまとめたタカが、コーヒーの最後の一口を、ゆっくりと飲み込んだ。

「この頃この町、物騒なんじゃないんですかい？姉さんの事だから心配いらねえと思うんですが、何だか良くない噂話を聞きますぜ？」

「あら、そうかい？」

自分のキャプテンには任せておけないと思ったのだろう。タカがサラダをパリパリと食べながら話題を変えた。

「そうだね。物騒といえばそうかもね」

「何か、良くない事でもあるの？」

キヤルがパンを齧りつつ、話の先を促す。

自分もパンを齧りながら、ジャムリムは手の平を頬に当てて、少し考える。

「最近、物取りが増えていてね。主に旅人目当てだから、町の人間そのものには被害は無いのだけれど、この町の評判が悪くなるだろう？只でさえひなびた田舎町だっていうのに、立ち寄ってくれる人がいなくなっちゃまうんじゃないかって、皆で心配しているんだよ」

「…物取り？」

「そう。宿屋に泊まって、朝起きたら荷物が無いとか、金目のものだけ綺麗に消えているとか」

「誰か怪我したとか、そういうのはないのか？」

何気なくギャンガルドが聞く。

「さあ？それは聞いた事がないけれど」

旅人を狙った物取りが、昨日の不届き者の正体だったのだろうか。それにしても、特殊なナイフを所持していたり、身のこなしがプロのそれであつたりしていたように思う。

「なんにしたつて、お前に害が無きや、それで良いんだけどよ」

「ふふ。そんなこと言つたつて、何も出やしないよ」

二人とも、周りの目も気にせずキスをする。

軽いものであつたけれど、キヤルなどはまた顔を真っ赤にした。

「おチビさん可愛い！」

赤くなつたキヤルのおでこに、からかうようにジャムリムがキスをしたので、キヤルは余計に赤くなつて、頭から湯気が出そうだった。

なにせ彼女はキヤルの頭を抱え込むように抱きしめており、豊かな二つの胸の谷間に、キヤルは顔を埋もれさせていたので、柔らかかつたり苦しかつたり気持ち良かつたり恥ずかしかつたりと、色々とは忙しかつた。

「もう、い、いいから！それより、その物取りつて、いつくらいかなの？」

一生懸命ジャムリムを押しつけながら、キヤルは話題を戻す。

「そうだねえ、前にギャンガルドが来てくれた時あたりより、ちょっと前くらいからかしら。ここんと二週間前後だと思つけれど」

離れてしまつたキヤルの頭を残念そうに見つめながら、ジャムリムが答えた。

「ギャンギャンが来るよりちょっと前」

それは、ギャンガルドが待ち伏せされていたという事にはならないだろうか。

「だったら、この町を出た俺たちの後を着けて来ないとおかしいだろう。またこの町を通るとは限らないし、そもそも前回はそんな噂、聞かなかつたしな」

「そりゃ、被害の出始めで、この町も治安だけは良かったから、通

りすがりの余所者が悪い事をしたんだろうつていうくらいにしか、思っていなかったからね」

ギャンガルドの言葉尻を捕まえて、ジャムリムが付け足す。

ふと、ジャムリムがギャンガルドの顔を覗き込んだ。

「何？何か盗られてもしたの？」

「いや？盗られたわけじゃないな」

「じゃあ、盗られそうになったんだ？」

「そうなのか？」

押し問答で、最後はキヤルに振られて、ムツとする。

「そうなのかも何も、相手の目的が分からなかったんだから答えようがないじゃない」

「ふうん？とりあえず、何かあったんだ」

結局キヤルが説明する事になり、その周りでタカが朝食の後片付けを始めだす。

「たまには自分で説明しなさいよ」

キヤルに呆れられたところで、ギャンガルドはどこ吹く風だ。

「昨夜、宿屋でナイフを持った男に寝込みを襲われたのよね」

「え！大丈夫なの？」

「大丈夫だから、今ここにこうしているのよ」

「ああ、そうね」

ほっと胸を撫で下ろしたらしい彼女に、キヤルは笑顔を向けた。

「皆でそいつを捕まえたんだけど、朝になったら逃げられちゃったのよね。それで、一時避難しようということ、ギャンガルドに連れられてここに来たのよ」

本当ならギャンガルドの悪行もとくと語りたかったが、話が長引く上に、小脇に抱えられてしまったのは自分の不覚でもあるので、キヤルはだいぶ話を分かりやすく端折った。

「もともと、ここには顔を出すつもりだったし、面倒くさいから連れてきちまえと思ってな」

さらりと笑うギャンガルドに、キヤルは思い切りパンチを繰り出

す。

ガス！

おいしい。顎をかすった。

「痛い」

「初めて聞いたわ。その話」

「初めて喋ったからな」

ゴス！

「うぶっ」

今度は不意打ちで、腹に見事ヒット。

「そもそも知り合いがいるならいるって、最初っから言いなさいよ！そうしたら駄馬車の事だの何だの、昨夜あんなに悩まなくてすんだのよ！」

「だから、ままま町のやや奴に聞けばばって言ったじゃねええええかかか」

胸座を鷲掴みにガクガクと揺さぶられて、ギャンガルドの科白がぶれる。

「もういい。ギャンギャンの事は今までどおり、今後だって一切本気で信用しないし、ちよっとは見直そうかと思っただけど、それも止めた」

ぱつと、ギャンガルドのシャツから手を離し、キヤルはぴよい、と椅子から飛び降りた。

「なんだその、今までどおり本気で信用しないって」

「言葉どおりよ。今までギャンギャンの言う事なすこと油断なんか出来なかったし。これからも警戒態勢万全で臨ませていただくわ」

「ええー」

不満なのか、わざとからかっているのか。ギャンガルドの抗議の声に、キヤルはまた拳を作った。

「うふふ。信用なんかされるわけがないじゃない、ギャンガルドったら」

ギャンガルドの脇腹めがけて振り上げられたキヤルの拳を止めた

のは、意外な人物の、にこやかな発言だった。

「えーっと。ジャムリムさん？」

「何かしら？」

にっこりと微笑むジャムリムに、男性一同、背筋が伸びる。

「何で僕まで」

「おれっちもつすよ」

「そりゃあ、お前らだって身に覚えがあるからだろう？」

ギャンガルドの言葉に、他の二人はぶんぶんと首を振る。

「僕は理不尽な事が嫌いだからね。君と一緒にしないでよ」

「おれだって、マーゴット一筋っス！」

一斉に否定された。

「あつははは。大丈夫さ。男ってな、女の一喝には弱いもんだからね。まあ、ギャンガルドは別の意味で畏まったみたいだけど？」

んん？と、ジャムリムが顔を覗き込めば、ギャンガルドは目をさ迷わせる。それをすかさず、ぺちりと叩いた。

「イテ！」

「男がこれくらいで痛がってんじゃないよ。ギャンガルドの事だから、どうせあっちこっちに好いヒトがいるんだろう」

「分かってるじゃねえか」

「そんなことも気付かないで、あんたと付き合ってなんかいられるかい？」

「ごもつともで」

何だか、彼女の前では、あの一癖も二癖もある海賊王が、そこらの普通のおっさんに見えるのは何故だろう。

豪快なジャムリムに、キヤルは尊敬の眼差しを向ける。

「スゴーい！」

「そうでもないさ。結局許しまうんだから、惚れちまった弱みってヤツだよねえ」

ふん、と鼻息を鳴らし、腕組みをした。

「その科白、どっかでも聞いたばかりなのに、言う人が違うだけ

で、こつちも印象が違うのはどうしてだろう」

気苦労の絶えない夕方は、こつそり溜息をつく。

「じゃ、そろそろ朝市も始まるだろうし、買い物がてら駅馬車の事も聞いてきてあげるから、大人しくここで待っていてくれるかい？」

「お？俺も着いていこうか」

ギャンガルドが席を立つ。

「そうだね。荷物持ちになってくれるかい？」

「まかせとけ」

「じゃあ、おれは後片付けしとくんで」

「私、夕方を手伝うわ」

「あ、じゃあ、僕は」

「」「あんたは寝てなさい」「」

「・・・・・・ハイ」

全員の役割分担が決まってく中、セインだけが一斉に大人しくしているように言いつけられる。

言われた本人は、そんなに自分の体調は見ていて分かりやすいだろうかと、大人しく椅子の上で小さくなった。

ギャンガルドにまで言われるのだから、昨日まで一生懸命隠していた意味がなくなってしまうていた。

「何か、悔しいなあ」

「文句があるなら、お前さんにそれだけの傷を負わせた相手と、昨日の晩の間抜け野郎に言っただけやるんだな」

「今度会う機会があったら、そうするよ」

本当に仕返しをしそうな表情だった。

なんのかんのと、仲良く買い物に出かけた海賊王とその愛人を見送って、残された三人は、それぞれ言ったとおりの仕事をこなした。ジャムリムがセインに自分のベッドを使うように申し出てくれたが、流石に女性のベッドを使う気にはなれず、セインは丁重に断って、先程の赤いソファの上に横になっている。

「僕だけ何にもしていない気がする」

ぽつりと呟けば、部屋の掃除をしていたキヤルがぽつりと返す。

「してるじゃない」

「……………」

思わず沈黙で返してしまったセインだ。

「僕寝ているだけなんだけど」

「そうね。早く傷を治すために言われたとおり大人しくしているわね」

「そりゃ、そうなんだけど」

言われてみれば、確かに皆に言われたとおりになっているのだが、皆が動いているのに一人だけ寝ているというのは何だか落ち着かない。

「ああ、そうか。セインそんなに喋る元気があるなら、それも治療に回して頂戴」

ぽん、と手を打ち、キヤルがびしりと簾の柄でこちらを指す。

「え？」

「さっさとセインロズドになって、さっさと治しなさいって言うてるのよ」

確かに、セインロズドの姿をとれば、ヒトの姿の時よりも、治りは早い。しかし、ここはジャムリムの家で、彼女はセインの事を何も知らないのだ。

「大丈夫かな？」

「大丈夫よ。帰ってくるまで時間がかかりそうだし、なによりギャンギャンがいない今がチャンスよ！」

二人の会話に、洗い物を済ませて戻ってきたタカが、泣きそうになる。

「おれ達のキャプテンって、本当に信用されてないんだなあ」

「そりゃ、そうよ。タカだって全面的に信用してるって言える？」

「えーっと」

自分に振られてしまえば、答えづらい質問で。

「色々、あんなですけど、いざって時は信用してますんで、その」

信用できる時と出来ない時の落差が激しいのだ。

「海の上だったらそりゃあ、もう、あんなにカッコ良くて信用できるようなキャプテンなんざ他にいませんよ！それだけは保障します！」

拳を作つて力説するタカに、キヤルが珍しく冷ややかな視線を送る。

「陸の上では？」

「うえ、えっと、そのうう」

急にしどろもどろと、口の動きが鈍くなるのは仕方の無いことで、要するに自分の利害（面白いかそうでないか、もしくは海賊のお仕事）がからまない限り、いい加減な男なのである。

それでも、部下からの信頼は高いようである。

「ま、まあ、旦那が剣の形になるってんなら、確かに今のうちになつておいたほうが良いとは思いますが？二人つきりになつてきつと今頃いちゃついてるはずなんで、昼まで戻らんでしょう。帰つてきたら、即出発つて事もあるだろうし、それまでには少しでも治しとかなないと、道中きついんじゃないですかい？」

タカの言う事も最もだった。

それに、心なしか。

「タカ、怒ってる？」

「いいええ？旦那が傷の痛むのを我慢していたなんて、おれっち全然気が付きませんでしたし？隠されてるなんてそんな水臭い事されてるなんて？気付きもしませんでしたから？」

言いながら、段々頭が赤くなつていつているのは気のせいではないらしい。

「怒っているじゃないか」

「重傷人相手に怒れませんよ」

「あの、タカ？黙つててごめんなさい。でも」

慌てて謝るキヤルの頭を、タカは優しく撫でる。

「分かつてますよ。キャプテンに知られたくなかつたんでしょう？」

小さく、キヤルは頷く。

「正確には、気付かれているのはわかっていただけ、正直に言っ
てしまつて、あのギャンガードがどういう行動をとるかは分から
なかつたんだ。だから、君にも言い出せなくて。ごめん」

セインも、素直に頭を下げた。

「止めてくださいよ。二人に頭下げられちゃ、おれがどうして良い
か分からなくなつちまう！」

両手をぶんぶん振つて、タカは先程よりも頭を赤くした。

「まあ、うちのキャプテンですからねえ。下手すりゃ、剣のまんま
寝ている旦那担いで逃亡とか、普通にしそうですもんね……」

そうして追っかけてくるキヤルを、楽しそうにおちよくるのであ
る。

始末に終えない。

一度ならず二度三度

「流石によく分かっているみたいね」

「そりゃあ、付き合い長いですからね」

一同、顔を見合わせて、なんとなく乾いた笑いをかわした。

「じゃあ、僕は遠慮なく休ませてもらうけれど、何かあったら叩き起こしてくれる？」

「もちろん。陸ではうちのキャプテンよりも旦那のほうが頼れますからね！」

子分からそんな風に言われてしまう海賊王とはいかがなものか。

「その一言から、クイーン・フウェイルの皆の苦勞が偲ばれるわね」
「あははー」

笑ってごまかすタカだった。

セインは氣遣ってくれる二人の言葉にようやく一息つき、久しぶりに姿をセインロズドへと変えた。彼の輪郭がぼやけたかと思うと、霞がかかったようになり、セインの代わりに一振りの長剣が現れる。柄に嵌め込めれたアメジストが、きらりと輝いた。

「へえ。そんな風に変化するんですか」

「変化って言うのかしら。まあ、いつ見ても不思議よね」

「でも、いつもみたいに手から出されるより良い気がするっスね」

海賊とは、皆一様に好奇心が旺盛なのか、それとも彼らがあのギヤンガルドのクルーだからなのか。

それは分からなかったけれども、タカはまじまじとセインロズドを眺めやっている。

「あの。…タカ？あんまり見られると、落ち着かないのだけれども」
ぽつりとセインが喋ると、タカが飛び跳ねた。

「うお！喋れるんですか旦那！」

「…その反応、懐かしいなあ」

かつて、クイーン・フウェイルの風読みであるラゾワも、同じよ

うに驚いていたのを思い出す。

「いや、すいやせん。水晶やら装飾やらも見事ですけど、刃身が本当に凄いなあって。うちのキャプテンが欲しがる訳だなあと思いやしてね」

ペこぺこと頭を下げるタカには悪いが、この姿の自分を見て、ギヤンガルドに同調しないでいただきたい。

「伝説の剣とか聖剣とか関係なく見事ですわ」

「うん、褒めてくれるのはうれしいんだけどね？」

キラキラと、子供みたいな眼で見つめられれば、落ち着いてなんかいられないではないか。

「当たり前でしょ？セインは私が引っこ抜いたんだから」

そこで、何故かキヤルがふんぞり返る。

「さ、タカ。あんまり見てたらセインに穴が開くわ。後片付けは全部終わったの？」

「おう。全部終わりやしたぜ！」

キャプテン譲りだろうか。にっかりと白い歯を見せるタカに、キヤルは箸を持たせる。

「じゃあ、一緒にお掃除手伝って頂戴。ここは済んだけど、向こうの部屋がまだよ」

「おっしや！任せときなっ！」

タカが住居側の部屋の扉の奥へ行くのを見送って、キヤルはセインロズドへ振り返る。

「これで安心して眠れるでしょう？そっちの玄関は鍵が閉まってるようだし、ゆっくり寝てなさいよ。セインの言っとおり、何かあったらすぐに起こしてあげるから」

「ありがとう」

あまり見せないキヤルの気遣いに、セインは何だかくすぐったい気分だった。

「お言葉に甘えて、寝させてもらっよ」

「そうしてちょうだい。早く治ってもらわないと、あたしが困るの

よ。まったく、ギャンギャンには担がれて町中走り回られるし。セインなんか引っこ抜くんじゃなかったわ」

「酷いな。そこでそれを言う？」

「ふん。さ。早く寝ちゃいなさいよ。あたし、まだ寝巻きで、ここに着替えなきゃいけないんだから」

照れ隠しに憎まれ口を叩くキヤルに、セインは小さく笑う。今なら、剣の姿だ。笑った事もバレないだろう。

「お休み。キヤル」

「お休みなさい」

セインが静かになると、キヤルはそつと鞆を引き寄せて着替えを済ませ、掃除をしているタ力を手伝いに足音を忍ばせて部屋を出た。

「タカ！あとはどこを掃除したら良いかしら？」

「お嬢、何だったら旦那の傍にいてやればいいのに」

名前を呼ばれてタ力が顔を上げる。

「寝ている人の隣にいたってつまらないわ」

「ま、そりゃ、そうかも知れねえっすけど」

ぼりぼりと顎を搔くタ力に、キヤルは両手を腰に当て、鼻息も荒く言い放つ。

「いつまでたつても使い物にならないセインなんか、お荷物にしかないのよ。ちゃっちゃと治つてもらわなきゃ、いつギャンギヤンにどんな目に合わされるか分かったものじゃないわ。例えば今朝みたいにね？」

それを言われてしまえば、タ力は黙るしかない。しかし、お荷物扱いされてしまったセインがちよつとかわいそうだ。

「キャプテンにはよく言つて聴かせますんで」

小さくなつてしまったタ力に、キヤルはクスクス笑う。

「冗談よ。タ力が悪いわけじゃないし、ギャンガルドの事だもの。誰が何を言つたって、直るものでもないでしょう？」

「はあ、まあ」

タカはますます小さくなる。

本当に、海賊だというのにこの連中は。キャプテン以外は、実は良い人だらけなのではなかるうか。

以前、クイーン・フウェイル号に乗せて貰った時、皆で歓迎の宴会を開いてくれたのを思い出す。船を下りるときも、お別れに大きなケーキを用意してくれて、朝から皆で腹一杯食べた。

「皆、元気かなあ」

もう、随分前の事のように思える。

「元気も元気ですぜ。皆、おれたちを待ってる。お嬢と旦那の顔を見たがってやしたよ」

あのケーキを焼いてくれた本人が、にかりと笑う。

「そうね。昨日の刺客のことも気になるけれど。早くお城に着いてしまえば問題ないのよね」

終わり良ければ全て良し。

そうなると、ギャンガルドの帰りが待ち遠しくなるのだから不思議なもので。

キアルもタカも、分担して家中の掃除をさっさと済ませてしまった。

「おかしいわね」

「……おかしいっすね」

ちらりと時計を見やれば、もう針は正午を示しそうなところまで来ている。

「お昼までには帰ってくると思ったのに」

「そうっすね。時間かかり過ぎっすね」

ギャンガルドとジャムリムが出かけて既に三時間は経過している。セインはまだセインロズドの姿で寝かせたままだ。何せ帰ってくる気配が無い。

二人はもう、三十分くらいはジャムリムの住居側の部屋のソファで、タカの淹れたコーヒーを飲んでいる。

タカはミルクだけ、キヤルはミルクとジャムを入れて、美味しくいただいている。

が、あまりに二人が帰って来ないので、玄関から出て路地の向こうを覗いてみたり、窓から外を窺ってみたりと、先程からそわそわと忙しない。

この家の主であるジャムリムは剛毅な女性であるのだが、彼女は意外に少女趣味であるらしく、裏側のセインを寝かせている店の装飾と違い、住居側の部屋は白い壁紙に綺麗なトルペイントが施され、窓はカフェカーテンで飾られ、木綿のレースのフリルと手作りらしい小物でいっぱいだった。

「雑貨屋さんのようね」

「そうっすね」

朝は薄暗く、色々忙しくて気が付かなかったが、日が昇って明るくなり、落ち着いてみてみれば、女性が好きそうな物で溢れていた。

「おれっち、なんか居辛いんすが」

「セインが居たって同じ事を言うわよ」

男性にこの部屋はいたたまれないだろう。

隣ではセインロズドに姿を変えたまま、セインが眠っている。

起こすのはぎりぎりで良いだろうと、二人でこの部屋で大人しくしていたのだが。

「勝手に昼食作っちゃっても良いですかねえ？」

「そうね。あ。十二時になったわ」

「ぼーんぽーん、と、壁掛けの振り子時計が正午を知らせる。」

「オハヨウ」

かちやりと、裏側の扉が開き、セインが顔を出した。

「眼鏡忘れているわよ」

「うん。取って来る」

まだ眠いのか、瞼を擦りながら戻って行く。髪の毛は寝癖がついていた。

「旦那って、寝惚けるんだ」

不思議そうにタカが言うので、キヤルは呆れてしまった。

「当たり前じゃない。いっつもボケボケしてるんだから、寝惚けるくらいするわよ」

「へ、へーえ」

素直にタカは驚いている。

「ちゃつきりした旦那しか見た事ねえっスもん。へえー」

そんなものかと、キヤルは視線を窓へ向けた。

ばしゃばしゃと水音が聞こえるのは、セインが顔を洗っているのだろう。

次にセインが姿を見せた時には、ちゃんと寝巻きも着替えて眼鏡も掛け、髪も綺麗に整えられていた。

いつものセインだ。

「もう大丈夫なの？」

コーヒーに口をつけながら聞けば、にっこりと返される。

「ありがとう。おかげさまで、久々に体の調子が良いや」

「そ。じゃあ、怪我は？」

傍に寄ってきたセインの上着を、容赦なくべろりとめくった。

「うわあ！」

不意を付かれて慌てるセインを無視して、傷の痕の残る腹を見る。

まだ、盛り上がって完全には治癒し切れていないようだ。

キヤルの眉間に、どんどん皺が寄る。

「傷」

「あ、あの？」

セインは恐る恐る彼女の顔を覗き込む。

「なんつでまだ痕が残っているのよ」

「い、いやあ、何でって言っても……。もう、ほとんど突っ張るくらいで痛みもないし、動いてもまた傷が開くって事はないと思うし、その？」

三時間程度ではこれくらいがせいぜいという事か。

それでも常人であれば、傷を負った時にとくに死んでいておか

しくないのだから、仕方が無い。

「動くのに差し障りはないし、旅に出ても、もう問題ないくらいは回復したと思うんだけど」

「立ち回りくらい平気？」

「もちろん」

頷くセインに、キヤルはようやく彼の上着から手を離す。

外気に晒された腹を、寒かったのか服の上から一生懸命なでてから、セインは服装を整えた。

「旦那、コーヒー飲みますか？」

「あ、ありがとう。じゃあ、起きぬけだし、ミルクを入れてもらえる？」

「へえ」

セインが座り、タカが立ち上がる。

「あれ？ギャンガルドと彼女は？」

きよるきよると見回すセインに、キヤルは両手で持ったままコーヒークップを膝の上に置いて、盛大に溜息をついた。

「え？まだ帰ってきていないの？」

「そうよ。もうお昼なのに」

そう言って、キヤルはまた、コーヒークップを持ち上げて口をつけた。

「はい、旦那」

「あ、ありがとう」

暖かな湯気を立てるコーヒーを手渡され、セインは嬉しそうにタカに礼を言った。

口に含めば、甘い。

「あれ？」

「旦那、怪我したの腹でしょ。甘いほうが胃に良いかと思いやして」
気の利く料理長に、セインは微笑んだ。

「ありがとう、タカ」

「へへ、どういたしまして」

照れくさそうに笑って、タカもソファに座る。

三人揃って、コーヒーを口に運び、三人揃って肺から息を吐き出した。

「…遅いね」

「だから、そう言っているじゃない」

「見てきますかね？」

時計の針はカチコチ音を立てて進んでゆくのに、朝出かけた二人が戻らない。

「いちやついているのかしら」

不機嫌に、キヤルが眉間に皺を寄せた。今日は皺を寄せてばかりだ。このままでは、よわい八歳にして、小皺が出来てしまうではないか。

「いちやついているだけなら、良いんだけど」

心配そうなセインを、キヤルが睨んだ。

「あのギャンギャン相手に、何かしているとしても、何かあるなんて思えないのだけれど」

「それは、そうなんだけど」

くうくう

セインの腹が鳴った。

「お腹空いたの？」

「そ、そりゃ、怪我を治すのに体力は使うからねっ」

自分の腹の虫に驚いて、顔を赤くするセインに、キヤルがごそそとスカートのポケットからハンカチに包んだナッツを取り出した。

「これ？」

「人の家の食材を勝手に使うわけにいかないでしょう」

今飲んでいるコーヒーも、キヤルの持ち物だ。ミルクは買ってきて、食器は使わせてもらっている。ジャムももちろん、キヤルの持ち物だ。

「タカも食べたら？」

「良いんすか？」

「お昼はギャンギャンに奢らせる」

目が据わっている。正直、怖い。

「い、頂きまーす」

男二人で、少女の差し出したナッツを恐々と摘む風景は、はたから見たら不思議だったかもしれない。

ドドーオオオオオン

「くくぶっ！くく」

遠くで、爆発音が響いた。

思わずコーヒーを吹き出しそうになった一同だったが、何とか堪え、惨事は免れる。

「ちよ、何？！今の音！」

「やっぱり、何かあったんじゃない？こんな町で爆発騒ぎなんておかしいでしょう？」

「あ、でも、道に塞がっていた岩をふっ飛ばしてるとか？」

「そんな火薬、炭鉱の町ならともかく、こんな所で用意していると思う？」

「そりゃ、そうっすね」

口々に言い合いながら、一斉に外へ駆け出す。

家々の屋根の向こうから、煙が上がっているのが見えた。

「鞆、取ってくる！」

セインが鞆を抱え、タカが自分たちの荷物を背負って飛び出し、律儀にキヤルが家の鍵を掛けて三人で煙の上がっている方向へ走り出した。

「まあ、これでキャプテンは見つけられそうっすね」

タカが頭をつるりと撫でる。

「なんで？」

「だって、うちのキャプテンですぜ？」

「ああ、そうだね。爆発自体に関わっていそうだし、関わっていいくたって、面白そうなら絶対現場に来るよね」

行動を把握されている海賊王だった。

爆発は一行がぐぐった町の入り口とは反対側からだった。町の作
りはよく分らないが、煙が細く上がって消えずにいるのは、何か
燃えているのかもしれない。

こづなったらどうにでも（前書き）

すいません、投稿用の小説書いていて、ちょっとUP遅くなりました。次回も遅くなるかもです。

投稿小説もありますが、仕事が見つからず、もしかしたら遠方へ探しに行くかもしれません。遅くなってもちゃんと最後まで書きますので、気長にお待ち下さい。

こつなつたらどうにでも

「とにかく、急ごう」

バタバタと、不慣れな町中を、煙の上がつている方角を頼りに駆けてゆく。

途中、やはり先程の爆発音に驚いたのか、人々が窓や玄関から顔を出して、不安げな表情を覗かせていた。

「待て！その三人！」

背後から声を掛けられて振り向けば、馬に跨った、口ひげを生やした男が、こちらに銃口を向けている。胸には菩提樹の葉を象ったバッチが光っていた。

菩提樹は正義を現し、そのバッチを付けているということは、すなわち。

「保安官？」

保安官が、何故自分たちを引き止めるのか。
蹄を鳴らして、ひげの保安官は三人の前に馬ごと立ち塞がった。

「保安官が、僕らに何の用です？」

セインがイライラと保安官を睨みつける。

「すまんが、今朝方、宿屋の主人が簀巻きにされて、自分の宿の窓から吊るされているのが発見されてね。吊るしていた部屋に宿泊していた客を探しているのだが・・・」

簀巻きにしたのは確かにギャンガルドだが、ギャンガルドが簀巻きにしたのは宿屋の主人ではなく、変なナイフを使う刺客だ。それでも、状況が状況だけに、確かに疑われても仕方が無いのかもしれない。

が、しかし。

「そんな事より、あの爆発は一体なんですか？僕らの連れがいるかもしれないんです！そんな事に首を突っ込んでいくくらいなら、爆発現場を調査するのが先でしょう！」

怒鳴りつけるセインに気後れをしたのか、銃口を向けたまま、保安官は小さく唸った。

「現場には、もう一人保安官が向かっている！旅行者の君たちが心配する事ではない！」

威圧感を強めて怒鳴り返す保安官に、今度はキヤルが食って掛かる。

「連れがいるかもしれないって言うてるのよ！そこきなさい！急いでるって言うてるのが分らないの？」

「何と生意気な！子供のしつけはきちんとしたらどうだね？」

相手が小さな子供と侮ってか、保安官はひげの端を上げて鼻で笑った。

お返しにとばかり、キヤルも鼻で笑ってやる。

「あら？お子様で悪かったわね。それでもハンターパスを持つてるの。通さないというなら、腕ずくで通してもらうわ」

ひよい、と、セインへ手の平を向ければ、セインが鞆の中からハンターパスを取り出して、その手の平の上にぼす、と乗せる。

「ふん、その歳でハンターパスだと？何を馬鹿な…？」

保安官の語尾が小さくなってゆく。

うりゃ、とばかりにキヤルが見せ付けるそれを覗き込み、保安官の額から汗が吹き出た。

第一級ヘッドハンター。キャロット・ガラム。

その名前は、こんな小さな町にも知れ渡っていたらしい。

「じゅ？」

「じゅって、何よ」

息が出来ずに詰まったひげ親父の喉から搾り出されたのは「じゅ」の一字。

「ゴールドン・ブラッディ・ローズ、だろ？言つとくが、本人だぜ」
タカが、ニヤリと保安官の言いたかった名前を告げれば、ますます汗が流れて、顔色も青ざめていく。

「お嬢、保安官にも怖がられてんのか？」

「向こうが勝手に怖がつてるだけでしょ」

何せ相手は百戦錬磨のヘッドハンターで、狙った獲物は逃さない。それがどんなに凶悪な賞金首でも、だ。

銃の腕は一級の上に超が付くらしい。

こんな町でのほほんと暮らしてきた保安官になど、太刀打ちできるはずも無い。

「そ、そんな、馬鹿な。こんな、ちまつこい子供だなんて！」

まだ信じられないようで、一人で一生懸命否定している。

「言っとくけど、残念ながら絶世の美女でもなんでもないの。ま。将来そうなる予定だけだ」

きっぱりと言い切る少女に、タカもセインも、自分で言っちゃあ駄目だよと、一言添えたいところだったが、口にしたら彼女の敵意がこちらに向くので、あえて口を塞ぐ。

「邪魔なのよ。いい加減、道を開けてくれないかしら」

それでも動こうとしない保安官に、キヤルは自分の銃に手を掛ける。

「嘘だっと思うなら、役所に問い合わせなさいよ。あんたの足りない頭でぐるぐる考えるよりずっと早く、正確な答えが出るわ」

パスをセインに投げ渡し、キヤルはいつでも銃を撃てるように、スカートの下で安全装置を外す。

「くそ！」

保安官が、タカに向けて馬首をめぐらせた。

「うわ！」

馬に跳ね飛ばされるのを覚悟したタカが、思い切り目を瞑って頭を両手で抱え、地面に伏せるのと同時に、セインもキヤルも行動していた。

「ばっかじゃないの?!」

ドン！

一発で保安官の持つ手綱を焼き切った。

セインはセインで、馬の轡を引っ張って、焼き切れた手綱ごと馬

から外してしまった。

そうなれば、裸馬に跨ったも同然になる。いくら鞍を着けているとはいっても、もう足でしかコントロールが効かない。

しかも、馬はデリケートな生き物だ。セインがおまけとばかりに馬の頬を思い切り抓ったものだから、パニックに陥った。

保安官が普段乗っている馬だ。銃声くらいでは驚かないのかもしれないが、不足の事態というものには滅法弱い。

「うわわわわ！ 待て！ 止まれええええ！！！」

叫ぶ警官が鬣にしがみ付くので余計に驚き、あらぬ方向へと走り出す。

「じゃあねえ」

ひらひらと手を振って、一行はひげ保安官を見送った。

「さ、余計なことで時間を食った。早く行こう！」

三人は再び走り出す。

後ろで遠くから馬の嘶きが聞こえ、直後にはしゃん、という水溜りに落ちたような音と共に、ぎゃあ、という悲鳴も聞こえたが、気にしない。

「ざまみろ」

タカの眩きがセインとキャルにも聞こえたが、同じ様に思ったので聞き流した。

「あ。どうせだったら、馬だけ貰っとく？」

「でも、向こうに行っちゃったし。戻ってくるかな」
走りながら振り向けば。

「うわー、世の中本当にこういうことってあるんですかねえ」

先程の馬が、どうした事かこちらへ向かって走って来る。

「でも、このままだとあの子に轢かれると思うんだけど」

人と馬と、競争したところで人が勝てるわけも無いので、距離はどんどん縮まっている。

「まかせといて！」

ついに間近に迫った馬の前に、セインが立ちはだかった。

「真正面から行く奴があるか！」

キヤルが怒鳴ったが、セインは馬が目前に来るやいなや、体を反転させて馬の首に縋り付き、鬣を引っ張った。

そのまま器用に地面を蹴って背中へ飛び移ると、馬の首に後ろからしがみ付いたまま、首を撫でてやり、ぽんぽんと優しく叩いてやる。すると、興奮から徐々に冷静さを取り戻して、馬のスピードが落ちた。最後に、手綱代わりに耳を引っ張れば、大人しくなる。

「すげえ、馬ってそうやって止めるんですかい」

感心するタカに、セインは笑った。

「あんまり参考にしちゃだめだよ。正しい止め方ではないからね」

「それでも、暴走馬をあっさり止められるなんて、やっぱ旦那だぜ」

「ちよつとその褒め方、良くわからないよ？」

何でもいいから、興奮を伝えたいらしいタカに、セインは力なく笑った。

「でも、三人もこの子に乗れるかしら？」

男二人のやり取りを他所に、キヤルが馬の鼻面を撫でる。

乗れない事も無さそうだが、重そうだ。

「まあ、訓練を受けてはいるだろうし、大丈夫じゃないかな。そんなに長い距離でも無さそうだし、キヤルは軽いしね」

小さな子供は、あまり人数に入れずとも良いだろう。なら、男性二人が乗るのと変わりないと考える。なら、元々乗馬用の馬なのだから、重くてへばる事もない。

ふと、煙の立ち上っていた方角を見れば、随分と煙が落ち着いて、かすかに見える程度になっている。

「たいした事になっていなければ良いのだけれど。さあ、乗って」

セインの前にキヤルがすっぽりと埋まり、セインの背後に、キヤルの鞆を抱えてタカが乗る。

「悪いけど、頑張ってくれるね？」

セインは器用に鬣を掴み、足と鬣で馬を乗りこなす。

「すっげえ。何でこんな芸当が出来るんで？」

「そりゃ、裸馬くらいは乗りこなせないと、戦場では生き残れなかったからね」

この国に戦があつたのはもう随分昔の事ではあつたが、それは内乱だつたり他国との小競り合いだつたりで、長くは続かなかつた。

セインが生きた時代はその戦よりも更に古い時代だ。

まさに戦国の世。

国同士が戦い滅び、吸収し、そして今のこの国がある。

普段は忘れがちだが、セインはその戦乱の世において、奇跡と謳われた人物であり、手に入れば国を手に入れると同じと言われた賢者なのだ。

「二人とも、しっかり掴まっているんだよ」

言うなり、馬を走らせる。

乗り慣れない二人は、けつこう激しく上下するのに驚いて、言われずともセインにしがみ付いた。

流石に人間が走るよりも何倍も早い。

こんな田舎町の、しかもあんな保安官が所有していたというのに、よく訓練されているらしい。舗装されている路上であつても起伏は有る。器用に凹みを避けて障害物を除け、安定した走りを見せた。

「これは、馬主はあの保安官ではなさそうだな」

もしかして、あの保安官も昨夜のナイフ男と何か関係があるのかもしれない。

出来れば捕まえて詳しく聞き出したいところだが、とにかく今はギャンガルドとジャムリムの無事を確認する事が先決だつた。

町を抜け、街道を進む。

「この辺りだつたと思うのだけれど」

先程まで立ち上っていた煙は既に無い。

森の中に入れば山に挟まれ、広い街道とはいえ、片側は山肌が剥き出しになっており、反対側は転がり落ちそうな崖だつた。

下方では、川が流れている

馬を歩かせて、きよろきよろと周りを窺いながら、注意深く進ん

でゆく。

「あれかな？」

「あれっばいわね」

目の前には崖崩れで土砂と岩と倒木で塞がれた道がある。要するに急な斜面が頭上高く伸びているのだが、抉り取ったように斜面が凹んでいる。

どうも、嵐で地盤が緩んで、一気に滑り落ちたのだろう。それにしても。

「誰もいませんね」

タカが、セインの背後からひよいと顔を覗かせた。

「この道を復旧しないと、次の町には行けないんだろう？地図じゃ、他に道は無かったしな。駅馬車だって、ここを通るはず。なーんか妙だぜ？」

小さな町だ。物資の運搬が出来ないとなれば死活問題になる。そうでなくとも、街道が塞がれば、何か理由が無い限り、すぐに復旧作業に入っているはずだ。

なのに、本来こういう事態には真っ先にいなければならない作業員も調査隊も、誰もいない。

おまけに、爆破された跡もなければ炎の痕跡も無い。

では、あの爆破音と煙は、一体どこから発生したものなのか。

「ふーん？なんか、ますますギャンガルドが関わっていきそうな気がするきたわ」

「おれもです」

「僕も」

三人で確信したなら、もう間違いは無いだろう。

「ギャンガルド！いるんだろう？出てきてくれ！」

セインが声を張り上げた。

誰も出てこない。

「ちよっとギャンギャン！早く出てこないと置いていくわよ！」

「キャプテン！お嬢の言う事だから、本気で置いて行かれますぜ

「？」

キヤルもタカも、声を張り上げてギャンガルドを呼ぶ。

誰も出てこない再び。

馬の背から降り、しばし。

三人で何か反応が無いか耳をそばだててみる。

「……あつ……」

何か聞こえた。

「やん、だめだってば」

女性の声のようだ。

「だーいじょうぶだって、あの様子じゃ、こっちの声は聞こえちゃいねえよ」

聞いた事の有るような男の声。

「……あん、イケナインだからあ」

微かに聞こえるこれらの声は、どうも土砂崩れの向こう側から聞こえてくるらしい。

しかし。

これは。

キヤルのこめかみの血管はどんどん浮き上がり、タカの頭の血の気はどんどん下がってゆく。

セインは、ふう、と、溜息を零した。

「……ふうーん。そう。そっちがその気なら、こっちにも考えがあるし？」

キヤルの眼光が鋭く光った。

「クイーン・フウェイルの皆には！ギャンギャンが好人とねんごろになって戻って来ないから、私がキャプテンになってあげるって言つとくわ！安心していちゃついていなさいよ！」

「え？！キヤル、それはどうなの？！もしかして本気？それよりねんごろなんてどこでそんな言葉覚えたの！？」

ついに銃を引き抜いたキヤルに、セインは慌てて引き止めにかかる。

「本気も本気！大丈夫！海賊が何ぼのモンよ！海の賞金首の雁首そろえてあたしが海賊王の座を乗っ取ってあげるわ！」

「わー。お嬢なら朝飯前つすよねー」

「暢気に構えてないで！タカも止めてよ！」

パンパン！

キヤルが土砂の山に向かって発砲すれば、スレスレを掠めて弾丸は石ころや砂を弾いた。

わあわあと、一気に騒がしくなる。

「いい加減に出てこないと、さすがにマズいつすよキャプテン！」

セインだけでは抑えきれないと、タカもキヤルを止めにかかったところが、怒り心頭な少女の力は常識を超え、大人二人を相手に暴れまくり、顎を殴られ肘鉄をくらい足を踏みつけられ。

ぶつ。

何かが切れた。

「え？あれ？」

セインがキヤルから手を離し、ゆらりと崩れた土砂の向こうを見つめた。

無表情で崩れた土砂を見つめるセインに、タカの口元は、自然に引きつる。

背後にどんよりと渦を巻いている何かが見えるのは、気のせいであつて欲しい。

「確か、雪崩と一緒に、土砂崩れも二次災害は大きな音による振動が原因の場合があつたよねえ？」

やんわりと、セインの口元が弧を描く。

正直に。

怖い。

しかも先程から散々叫んでもいるし、ちょっと前にはキヤルが銃声を響かせたばかりだ。これでもう一度、轟音でも響かせようものなら、既に崩れた斜面が、更に雪崩落ちる危険は高いのではないか。只でさえ、足元は長引いた雨の影響で、いまだぬかるんでいる。

「ねえ、キヤル。音の一番大きな銃ってどれ？」

キヤルの鞆を開けて、がさごそと探し始める。

「えーっとねえ？ライフルでそういうのあったはずだわ」

キヤルまで鞆の脇に座り込んで、ばらばらにしてあったらしい部品を取り出して、ちやかちやかと組み立てていく。

「ま、待つてくれよ！」

二人とも本気だ。

緩んだ地盤に大音を轟かせれば、振動で斜面が崩れ落ちる。

「向こうにはジャムリムの姐さんもいるんですぜ！？」

ジャムリムの名前に、二人の行動が、ぴたりと止まる。

「・・・・・・・・」

薄ら寒い沈黙が流れた。

先に進もうと頑張ってみる（前書き）

遅くなりました。ちょっと短いですがアップです。
ギャンガルドが言う事を聞いてくれないので先に進めません。
相変わらず作者仕事が見つかりません。泣ける。

先に進もうと頑張ってみる

ジャキン！

ライフルを構え、キヤルがにたりと笑う。

「だーいじょーぶよう。ギャンギャンの事だもの。自分を犠牲に
してでもジャムリムさんを守ると思うのーお」

うふふー、などと呟いて、瞳孔が開き気味だ。

「旦那あ！」

精一杯セインを見上げるも、こちらは太陽で反射されて眼鏡の奥
が見えず、表情が読み取れない。

しかし、口元だけは弧を描いて笑ってはいるものの、その周りの空
気はどこまでも冷たい。

「タカ。何にも心配なんかする事はないんだ。だってギャンガルド
だもの」

何が？とは思ったが、見えないセインの眼が、シャレにならない
事になっているだろう事だけは分かった。

これはもう、タカが頑張るか、諦めるかしかない。

そうだ。人生は常に選択の連続だ。

選択肢があるうちはまだ救いがある。

「キヤプテン。俺はもう諦めやしたんで、覚悟決めてくだせえ！」
タカは潔く諦めた。

「なんだとコラ！もう少し努力ってモンを見せてみるお前！」

土砂の山の向こうから、ギャンガルドが顔を出した。

ちゅいん！

すかさず銃弾が頭を掠め、海賊王の髪の毛を数本焦がす・

「いやあ、もう、だってこの状況ですぜ？」

構えたライフルを使わずに、いつもの短銃で撃ってくれただけで
もありがたい。

どう考えたって、人をおちよくって女性とこんな場所でいちゃつ

こうとした阿呆な大人が、真面目に心配して駆けつけてくれた子供に言い訳が出来るもんでもない。

「よく考えたら、私たちも二次災害に巻き込まれる危険があるのよね。でも腹が立つからこの際今すぐに出てきて状況を説明するって言うなら、セインの説教だけで許してあげる」

「覚悟してね？」

につこりと、黄金の血薔薇の隣で、伝説の大賢者が微笑んだ。

正直、背筋が凍るところか、全身が粟立った。

この二人が同時に本気で怒ると、こんなにも恐ろしいのかと思うできれば、こんな所で、こんな理由で、あんまり見たくなかったなあと、タカは汗の吹き出る自分の禿げた頭をつるりと撫でた。

「ほうら、だから言ったのに」

ジャムリムが土砂の上から頭を出した。

「謝るから、勘弁してもらえないかしら？」

手を顔の前で合わせて、ごめんなさいのポーズをするジャムリムに、キヤルはふん、と鼻息を鳴らした。

「ジャムリムさんは良いの。どうせ嫌がるのをギャンギャンが無理やり付き合わせたんでしょから」

女性には寛容だなあと、タカなどは思ってしまうが、実際キヤルの言うとおり人の言う事なぞ聞く耳も持たないギャンガルドなので、フォローの仕様が無い。

「おいおい、随分扱いが違っじゃねえか」

「当たり前でしょう？世の中ファースト・レディで成り立ってんのよ」

本当に成り立っていたら、世の女性は苦労しない。

「いいかげん出てきなさい。大丈夫。あんた私の腕前知っているわよね。ジャムリムさんには当てないから。あんたにだけ命中させるから」

「いや、そう言われて出て行く俺ってどうなんだって思うよ？」

ギャンガルドが土砂の向こうで情けない声を出したが、しかし自

業自得なので、誰も賛成してくれない。

「もういいわ。早く出てきてくれないかしら？ここでギャングアンと睨み合いっこしていても、らちが明かないのよ。そもそも、保安官が一人、こっちに来ている筈なんだけど」

出て来る様子を見せないギャングルドに、キヤルが妥協するように、先程組み立てたばかりのライフルと、今度は解体して、さつさと鞆の中に戻してしまう。

「保安官だあ？」

キヤルがライフルを片付けて安心したのか、ようやくひょっこりとギャングルドが土砂から顔を出した。

「そ。さつき、ここに来る途中、馬を提供してくれたひげ親父が言っていたのよね」

「そういえば、そうだったね」

「ああ、確かに、こっちに一人寄越しているって言ってましたっけ」
セインもタカも、ひげ面を思い出して頷いた。

「まあ、馬は提供してくれたって言うより勝手に貰った、て言っただけが正しいけれどね」

馬から三人に向かって走ってきたのは事実だ。

「飼い主に嫌気が差したんでしょう」

実はそうなのかもしれない。

「ひひん！」

後ろで当の馬が嘶いた。

「正解らしいよ？」

余程嫌だったのか。

「何で馬なんかいるのかと思ったら、そういうことね。嫌味なひげ面じゃなかった？」

ジャムリムが、街道を塞いでいる土砂を乗り越える。

「知り合い？」

「知り合いも何も。小さな町だもの。保安官なんか二人しかいないし、どっちも嫌われているわ」

肩をすばめて、三人の下まで歩いてくると、くるりと彼女は振り向いた。

「まあ、一人はそこにいるんだけれどね」

ジャムリムの視線を追えば、土砂の向こうから、ギャングルドが何かを担いで出てきた。

「彼は、どうも肩に人間を担ぐのが趣味らしいねえ」

セインが、呆れたように腕を組んで、ギャングルドを半目でみやる。

ギャングルドが担いでいるのは、それなりに身長も体重もありそうな男性で、服装も、落馬したひげの保安官と似ていた。

「保安官って、制服でもあるの？」

セインがジャムリムに訊ねれば、彼女はこくりと頷いた。

「他の町はどうか知らないけれど、ここでは二人しかいないくせに、町の仕立て屋に制服を作らせていたわ。他にも、保安所の備品を新しくしたり、なんだか羽振りが良いのよね」

「それってー？」

タカが、こちらに向かってのろのろと歩いてくるギャングルドの肩でゆれる、保安官を見やる。

「保安官って、そんなにお給料が良いのかな？」

セインも、タカと同じ様な事に気付いたらしい。

「さあ？ 実際いくら貰っているのかなんて分からないけど。ここ最近よ。羽振りが良くなったのは」

セインの質問に答えたジャムリムが、何かに気付いたように、形の良い眉を吊り上げた。

「具体的にいつごろから？」

「……宿屋に被害が出始めた、その後からだね」

そう言つと、ジャムリムは顎を摘んで考え込んだ。

「何もめてんだ？」

バス！

小さな硝煙が立ち上り、ギャングルドの揉み上げが、数本はらりと

舞った。

「えーっと？」

いつの間に構えたものか、サイレンサー付きの銃を向ける少女が、それはもうギラギラと双眸を輝かせる。

それはまさに、獲物を狙う獰猛な野生動物のそれと等しく。

「私が妥協するとても？」

「おいおい……」

肩に担いだ保安官が、やけに重く感じられる。

さつさと下ろしてしまいたいところだが、殺気を放つ少女から目が離せない。

ゴールデン・ブラッディ・ローズの二つ名を持つ最上級ヘッドハンターから注意をそらせず、お互い睨み合ったまま、膠着状態に陥る。どうやら、地面に保安官を下ろすのは、あきらめた方が良いらしい。彼女の眼が、下ろすなと訴えている。

中年男一人分の体重は肩に重かったが、ゆっくりと体勢を立て直す。ひたりと、首筋に冷たい感触がして、ギャンガルドは背筋に嫌な汗が流れた。

「僕もね。妥協するなんて言っていないから」

気付けば、背後にセインが立っていた。

その手に握られ、今ギャンガルドの頸動脈に押し付けられているのは、昨夜の刺客の持ち物だった刃幅の広いナイフだ。

「まだ、あんたの愛刀でないだけマシなのかね？」

前面の虎、後門の狼。

「こんなところで、お前さんたちの本気は見たくなかったなあ」

どこぞのコック長と同じことを口にして、海賊王は自業自得という言葉を学習しない。

「このまんまだと、俺どうなっちゃうのかな？」

暢気にそんな事を聞いてくる。

二人のただならぬ様子に、ジャムリムなどはただ呆然と三人を見つめているのみだ。

「そうね。とりあえず一回死んでみる？」

「死んだら生き返れねえじゃねえか」

「そりゃあそうよ。だって死ぬんだもの。反省できたら来世でまたお会いしましょ？」

キヤルの目が据わっている。

「命が惜しかったら、さつさと状況説明をしてちょうだい」

つまりとところ、とつくの昔に二人とも業を煮やしていた上に、このままではまたギャングルドのいつものアレで、話が進まない予想をつけて先手を打つことにしたらしい。

「俺、この状況で喋んなきゃならねえの？」

肩に中年、眼前に銃口、首筋に剣。

雁字搦めである。

「人をおちよくるからこうなるのよ。いい加減学習しなさい」

「嫌だ」

「うんそう言うと思ったからこうなっているわけなんだけれどもその所解ってる？解っているよねー？解っててやっているんだもんねー？」

キヤルに言い返せば背後からセインがナイフに力を入れる。

「せ、せめて、座りましょうや？」

泣きそうになりながら、タカが提案するも、二人は全くギャングルドを解放する気はないらしい。

「ここまで来て、また話をはぐらかされるのは嫌なの。なんでこの崖崩れに来ていたのか、この保安官はどうして気絶しているのか、さつきの爆発音は何だったのか。洗いざらい喋ってくれたら、すぐに銃を仕舞ってあげるし、セインだってナイフをよけるわ」

セインの傷も、だいぶ良くなったとはいえ完治とも行かず、まだこの先王城へ行くには道のりは長い。時間が勿体無いのだ。

「ハリーはいはい解りました、解りましたよ」

さすがに降参したらしいギャングルドが、諸手を挙げた。

結局突っ立ったまま、最強の二人に挟まれて、ギャングルドは大

きく息をついた。

「この崖崩れは昨晚までの嵐で、普通に崩れたらしい。人為的なものでもなんでもないってさ」

自分が這い出てきたばかりの土砂の山を指差す。

「で、こいつは単に俺に絡んで来やがったから一発ぶん殴ったら気絶した」

今度は、担いだ保安官を指差す。

一発で気絶する保安官で、町の保安は大丈夫なのかと、タカがジャムリムを見やれば、両肩をふいと引き上げて、頭を振った。相手が相手なのでそこは仕方ないのかもしれない。

「絡んで来たって、何か理由があつたんじゃないの？」

「知らん。ここに来たらいきなり部外者はあっちへ行けたの邪魔だの、なんかこう、イラツと来たんだよ」

それはなんとなく分かる気がする。

キヤルたちが町で会った保安官の片割れなのだから、似たり寄つたりな態度だったのだろう。

「で？ギャンギャンはどうしてここへ来たのさ」

「ちよつとこのナイフどけてくれたら嬉しいんだが」

「どけるわけないじゃん。嫌だなあ」

どうにも首筋に冷たいものが当たっていると落ち着かないので、訊ねられたついでに提案してみたが、即答で却下された。

いかにも仕方がない、といったように大げさに溜息をついてみたけれども、首筋のナイフはぴたりと皮膚にくっついていて。

このまま体温で温まるんじゃないだろうか。

「ジャムリムと一緒に駅馬車の停留所まで行つたんだが、客で溢れているわりに御者も組合員も誰もいなくてな。それで、馬車の通り道に何かあつたんだつたら、見に行つて直接確かめた方が早いだろうって言う事で、ここまで来たんだよ。驚いたぜ？こんだけ道が土砂に埋まってんのに、誰もいやしねえ。どうしたもんかと考え込んでりゃ、この訳の分からん偉そうなのが現れてな」

それでムカついたから殴つたらしい。

「じゃあ、爆発音は聞いていないの？」

キヤルたち三人が、ここから離れた町中でも聞いた爆発音だ。相当大きなものだったに違いないのだが、ここに居たギャンガルドたちが聞いていないとすると、見当違いな場所から聞こえたことになる。

「爆発音は、それ。その道の外れ。下覗いてみ？」

そう言われても、覗いたらこの男は逃げる気満々に違いがないので、視線を外さずに、キヤルはタ力にお願いする。

「ごめんなさい、タ力。見てきてくれる？」

「お、おう」

ひよこひよこと、崩れた崖とは反対側を見下ろした。

「ああ？」

下に流れる川のそばに、砂利が溜まった場所がある。そこに大きな穴が開いていて、すぐ横で何人かがひっくり返って気絶していた。「どうもこの下で爆発したみたいですね」

振り返って先程から同じ体勢を崩さない三人へ叫んで報告する。

「……………どういうこと？」

訳が分からず、キヤルの小さな眉間に皺が寄った。

盗人猛々しい？（前書き）

お待たせしました。ようやくと終わりが見えてきた気がします。ギヤンガルドが言う事を聞きません。

盗人猛々しい？

「さあ？俺もそこまでは知らねえよ。ジャムリムに聞いてみたが、あのひっくり返っている連中には見覚えがないそうだ」

「見覚えがないって・・・？」

小さな村だ。住民の顔はみな分かってしているとジャムリムが言っていた。その彼女が見覚えがないというなら、崖下の連中はこの村の住人ではない事になる。

「彼の言うとおりよ。見たこと無い人たちなんだけど、何であんなところで大穴開けてひっくり返っているのやら」

キヤルの疑問に、ジャムリムがすぐに答える。

「ねえ？ギャンガルドの事なら、私が見張っているからそろそろ放してやつてもらえない？」

困った顔をしながら、ジャムリムが二人に頼み込む。

「私もね、この人のいい加減なところとか話が進まないところとか承知しているんだけどさ？」

大体の状況説明が終わり、美人に両手を合わせてお願いされてしまつては、キヤルも折れるしかなく。

「・・・解った。けど、見張っているって、大丈夫？」

「大丈夫！こう見えて私、腕っ節はあるからぶん殴るくらいできるしね！」

それを聞いて情けない声を出したのはギャンガルドだ。

「おいおい、誰も俺の味方はいねえのか？」

「あらあら？だから私がこうして二人にあんたを放してくれるように頼んでいるんじゃないか。不満かい？」

方眉を上げて、それこそ不満気にジャムリムがギャンガルドを睨んだ。

「あー、そうですね、そうですよ。俺が悪うございました」

がっくりと肩を落とすギャンガルドに、ジャムリムは満足そうに

頷いた。

「よし。あんたが逃げたら、金輪際私に顔を見せないで頂戴」

にこやかに宣言したジャムリムに、ギャンガルドはさすがに青くなつた。

「冗談じゃねえ！」

「おや？女一人の人生狂わそうってんだ。それくらいの覚悟、持つて良いんじゃないのかい？」

流石、ギャンガルドが惚れたと認めるだけあって、一筋縄ではない女性である。

「かつこいい……」

キヤルなどは銃を持っていることも忘れてきらきらと羨望の眼差しを送っている。

「どうするの？降参？」

セインが毒気を抜かれたようにくすくす笑う。先程までの殺気はどこかへ霧散してしまった。

「どうもこうも、解つたよ！おとなしくしてりゃあ良いんだろぅが」
「最初っからそうしていれば、わたしに銃を向けられる事も、セインにナイフを突きつけられる事もなかったのよ」

ギャンガルドが肩に担いだ保安官を地面に下ろすのと、キヤルが銃をしまうのはほぼ同時だった。セインのナイフはギャンガルドが降参宣言をしたときに、既に離れている。

「この間抜けな保安官はこのままでも構わないでしょ。崖下を見に行くわよ」

キヤルはようやく落ち着いて行動が出来る、上機嫌に崖下へと歩み寄つた。

覗き込めば、なるほど大きな穴が開いている。

「なんなのかしらね」

穴の傍に、数人が転がっているが、別段血が出ているわけでもなく、外傷はなさそうだ。

川の傍なので木が茂っているが、本数が少ないので良く見える。

「うわあ！」

驚いた声が聞こえて、セインもタカも崖を覗けば、目が覚めたのか、男が一人もそそと動いている。

「？」

目でキヤルに訊ねれば、先程見ていたら目が覚めたらしく、仲間が転がっているのを見て驚いているらしいと返事が返ってくる。

「こっちにはまだ気が付いていないわ」

「彼に聞いてみれば早いかなあ」

「そうっすね。手っ取り早いんじゃないですかい？」

意見が一致したところで、セインが崖を滑り降りる。

そこでようやく気配に気が付いたのか、男はこちらを見上げると、川沿いに村の方向へ走り始めた。

「あれ？」

仕方がないので、セインは近場の木の幹を使ってくるりと方向を転換し、そのまま男を追いかけた。

「ちよつと！君！」

声を掛けてみたが、こちらを振り向こうともしない。

それどころかどんどんスピードを上げる。

「・・・・・・？」

おかしい。

男の身のこなし方が尋常ではない。

セインが急な崖を注意して走り降りているのも原因ではあるが、距離が瞬く間に離されていく。

「これはひよつとすると？」

そんなことを思っていたら、頭上から何か煌くものが飛んだ。

「あ」

目の前の男の頬をかすつて、それは地面に突き刺さる。

あの、幅広のナイフだった。

突然飛んできたナイフに男が身をすくめているうちに、セインはその背中に跳び蹴りを喰らわせて確保する。

「ぐっ」

うめく男の両手を掴んで背中に後ろ向きで乗っかり、じたばた暴れる足を自分の足でがちりと挟み込めば、流石に観念したのか、男も動かなくなった。

ちらりと崖の上を見上げれば、ギャンガルドが手を振っている。ナイフを投げたのは、おそらく彼だ。

のそのそと、そのギャンガルドが崖を降りてくる。その後ろに、残りの皆も続く。

キヤルが足を滑らせるたびにハラハラしていたセインだったが、ちゃんとタカがフォローしてくれたので安心する。

下敷きになっている男は良く見ればなんというか、村に紛れ込まれたら解らないくらい普通の格好をしているのだが。

上はシャツにベストを羽織り、下はポケットの多いズボン。

「ふうん？」

セインは一つ唸ると、ズボンのポケットをまさぐりだした。

「や、やめろ！」

慌てだした男に構わず、どんどんポケットの中を引っ張り出す。

針金に小さな金属、何に使うやら粘土状の丸い玉、折りたたみ式のナイフが五本、小さな火薬が詰まったマツチ箱、などなど。

怪しげな物が次から次へと出て来る。

ギャンガルドたちがセインの元へ辿り着く頃には、男のズボンは空っぽになった。

周りで、細かな道具やらなにやら。怪しい物が散らばっているような状況だ。

「うーん」

セインはまた一つ唸って、今度は男のベストを、ボタンが飛ぶほど勢い良く開け広げた。

「ぎゃああ！ほんと、もう勘弁してくれよ！」

「・・・」

男が懇願するのも無視して、セインは男をばんざいさせる要領で、

えいやとベストを剥ぎ取ってしまった。

「なんだ、追い&#21085ぎでもしてんのか？」

「うらやましいなら代わるけど」

背後から覗き込むギャンガルドに冷たい一言を浴びせ、見向きもせずにセインは男のベストを逆さまにぶんぶん振った。

ばらばらと、またどこにこんなに収納されていたものか。

小さな改造銃やらそれ用の弾丸やら、ピックやらガラス切りの力ツターやら。

「君たち、盗人でしょ？」

まだ自分の下に敷きっぱなしの男に問えば、目が反らされた。

「ほう？なるほど」

「感心してないで、他の連中も捕まえなきゃならないんだから、縄か何か持ってきてくれないかな」

男の所有物は、鍵を開けるための道具だったり、窓を破る際の道具だったり、まあ、盗み道具と思しきものばかりだった。

この調子では、あちらの大きな穴の傍で気絶している連中も、こいつらの仲間と見て差し支えなさそうだ。

「ちよつとセインったら、何やってるのよ」

「何って、追い&#21085ぎらしいよ？」

「こらこら」

遅れてやってきたキヤルに、ギャンガルドの言った台詞でそのまま返す。

「ふうん？泥棒なのこの人」

周りに散らばった道具から、キヤルもセインの下で身動きの取れない男が、泥棒らしいと言う事は見当がついたようだ。

「ぶん」

鼻で笑って、キヤルはしまったばかりのサイレンサー付きの拳銃を、男の鼻先に突きつけた。

「昨晚私たちの部屋を襲った馬鹿のお仲間かもしれないってことよね？」

「ひい！」

突きつけられた拳銃は、先程発砲したばかりだ。まだ銃口は火薬の匂いを燻らせている。本物の銃だと男が確認できないわけがなく、引きつった声を出した。

「アレさえなかったら、私たちこんなに苦労しなかったのよね」

セインの傷はとつくに治っていただろうし、朝っぱらからパジャマ姿でギャンガルドに抱えられて村中に醜態を晒さずにすんだ。

「洗いざらい吐いてもらうから、覚悟なさい」

キヤルの迫力に気圧されたのか、はたまた目の前の銃口が恐ろしかったのか。

男は一声うなると、くるりと白目を& a m p ; # 2 1 0 8 5 ; い意識を手放してしまった。

「あ！こら待ちなさいよ！」

引き止めたところで、気絶した男の意識は戻らず。

セインはようやく男の上から体をどかし、うん、と背伸びした。

「あー、肩凝った」

ぐるんと腕をまわして肩をほぐす。

「旦那。これどうすんですかい？」

タカが男の鼻を摘みあげて遊んでいる。

「息が出来なくなっちゃうでしょ。止めてあげなよ」

「口が開いてますから、大丈夫でさあ」

摘まれた男はそのまま引つ張りあげられて、頭がちよっぴり宙に浮いた。そこでパツとタカが手を離せば、必然的に重力で後頭部を地面に打ち付ける。

「げふっ」

蛙が潰されたような声が聞こえたが、全員綺麗に無視した。

「縄のようなものが見当たらないなら、しょうがない」

セインは男のズボンのポケットから出てきた針金で、持ち主を後ろ手に縛り上げ、両足も脱がせたベストを使って器用に括っってしまう。

「なんだよ。俺が探しに行く事もなかったじゃねえか」

見事に芋虫よろしく括られた男を、ギヤングルドが感心そうに見下ろす。

「ちゃんと聞いていなかった？あちらにも捕まえとかなきゃいけない連中がいるから、どっちにしる縄が必要なんだけれど」

呆れてセインが、いわゆる「あつち」を指差せば。

「……誰もいないねえ？」

ジャムリムが背伸びをして見ている。

「あれ？」

全員が一瞬呆気に取られた。

「逃げられた？！」

キヤルが声を上げた瞬間。

キラキラと何かが光った。

「危ない！」

セインはキヤルを、ギヤングルドはジャムリムとタカの頭を抑えて地面に伏せる。

ご丁寧に人数分の刃物が地面に突き刺さった。

「不意打ちが好きみたいだね」

ずれた眼鏡を直しながらセインが顔を上げる。

飛んできたのは、昨夜の刺客の持っていたものと同じナイフだった。

「これで確定だね」

何が目的化なんて知らないが、とにかくの気絶してひっくり返っていた連中の中に、キヤルたちが苦勞させられた原因を作った本元の人物がいるということだ。

「盗人の集団が、こんな所で爆薬使って何をしていたのやら」

身を起こして崖を見上げれば、木々の合間を縫って逃亡する男たちの姿が見えた。

「保安官、上に置きっぱなしだぜ？」

「忘れ物したみたいに言わないでよ！」

キヤルが慌てた。

「もしかしたら保安官が何か知っているのかもしれないじゃないの！」

「しれないじゃなくて、多分知っているよ」

盗人連中が固まって何かをしているところへ、保安官が見張り役として待機していたのだとしたら？

ジャムリムとタ力をその場に残し、キヤルとセインとギャンガルドは一斉に走った。

確証はないけれど、保安官たちの羽振りが良かったのも、やたらと旅人ばかりが狙われたのも、盗人集団と保安官たちが手を組んでいたのだとすれば、納得が出来る。

ジャムリムが言っていたように、村人が村人全員の顔を知っているような小さな場所だ。村の誰かの家に盗人が立て続けに入れば、必ず足がつく。その点、ふらりと立ち寄った旅人の方が狙いやすい。

しかし、短期間に何度も旅人が被害にあえば、それこそ足がつくだろうに、今まで捕まりもせずに犯行は行われていた。

「田舎って、小さな権力が大きな権力に成り代わりやすいのね」

盗人集団から、賄賂でも貰っていた可能性は高かった。

「ちよつとした権力って名前がつけば、勘違いする人間はどこにでもいるぜ？」

「それは否定しないけどね」

目の前に男たちの背中が見える。なんとか追いつけたらしいが、正確な人数を把握しておかなかったのは失敗だった。

木々の合間を縫って逃げてゆく男たちは、ちらちらと見え隠れして数えにくい。

「多分、三、四人くらいなんだろうけれど」

「誰かさんがグズグズしているからこうなるのよ！」

「それって俺のことか？」

「他に誰がいるって言うの！」

パス！

キヤルが目の前の方に焼けた顔を打ちたいのを我慢して、代わり

に前方へと威嚇射撃を行った。

「サイレンサー付けといて良かったわ」

「俺のおかげ？」

「違うから」

セインが両手を合わせてセインロズドを取り出す。

先程の威嚇で、相手にこちらに銃があることが伝わったらしい。

男たちの動きが鈍くなった。

「君、得物は？」

聞けばギャンガルドはニヤリと笑って、両脇のベルトの下から何かを両手で引き抜きざま、前方の、足を木の根に取られてよろめいた男に向かって投げつけた。

「ぎゃー！」

蛙の潰されたような声とともに仰け反った背中には、二本の細身のナイフが刺さっている。そのまま急な斜面をごろごろと、背中にナイフを突き刺したまま転がり落ちていく。

「短いナイフなんだから、死にやあしねえんだがな」

ベルトの幅がいくらか広いとはいえ、それに収まる長さだ。折りたたみ式でもないのだから、柄の部分も含め子指程度の長さしかない。

「なんなら、あいつらがさっき投げて寄越したナイフを使ってやれば良かったのよ」

「僕持って来たよ」

セインが腰に挿してあったらしいそれを、ひょいとギャンガルドに渡した。

「投げづれえんだよ、これ」

幅の広いナイフは、空気抵抗やら何やらで、何度見ても扱いづらそうだ。

「うおー！」

渡されたナイフに愚痴ったところで、そのナイフと同じものが飛んできた。

ギャンガルドは難無く、ひよいとそれを広い刃で受けとめて弾く。
「おおおっ?!」

弾いた直後に、今度はまとめて飛んできた。

「油断大敵って言葉、知らないの?!」

今度はそれらを、セインが叩き落す。

そのままスピードを上げ、最後尾の男に手が届くところまで追いついた。

すると、その男の前方にいた長髪の若い男が、振り向きざまセインへ発砲する。

「!」

一発は頬をかすり、一発はセインの髪を一房焼ききり、それでもセインはスピードを緩めない。

目の前の男の怯えて縮んだ首の上、その頭を鷲掴んで台座にすると、勢いを付けて間合いを詰め、銃を放った長髪の男へと標的を変更する。

台座にされた男は後ろ向きのまま、なんとも哀れな悲鳴と共に崖から転がり落ちて行った。

ドン!ドン!

またもや男が発砲するが、既に照準は合っていない。頭上の木々の枝を打ち落とすだけで、セインにかすりもしない。

ギリリと、眼鏡の奥の薄い色彩が光る。

「ば、化け物!」

叫んだと同時に、男の脳天にセインロズドの柄先が振り下ろされた。

「うおお。全部一人でやんなよなあ」

駆け寄ってきたギャンガルドは残念そうに頭を掻く。

「まだ一人残ってるよ。あれ。君にあげる」

気絶した男の襟首を持ち上げ、そのまま荷物を担ぐように背中に担ぎながら、セインが指差した方向には、下で芋虫になっている男と似たようなベストを着た男が、必死になって崖を登りきるところ

だった。

「保安官連れて行かれたら、君の責任だからね？」

につこりと微笑むセインに、ギャンガルドはひらひら手を振って、崖を登り始めた。

「キヤル？」

いまだ姿を見せない主を呼べば、ゼイハアと、息を切らしてよろよと登ってくる小さな姿が見える。

「なんで、こんな、とこ、そんなに、早く、登れるのよ」

手を貸して引き上げてやれば、睨まれた。

「僕の場合、慣れ？」

「ギャンギャンは！」

「彼の場合は、体力の差だろうね」

改めて、ギャンガルドはある意味化け物だと再認識したキヤルだった。

こんな急斜面で、木々が点在する中を、走って登れるなんて信じられない。はじめのうちこそ、キヤルは二人と一緒に登っていたが、すぐに置いて行かれた。次々に頭上から転がり落ちてくる盗人たちに備え、木の幹を支えにしながら何とか登ってきたのだった。

「降りるのは楽だったのに」

「でも登るより降りるほうが危険なんだよ？」

それは初耳だが、重力で勝手に勢いがつく分そうかもしれない。

「ところでギャンギャンは？」

きよろきよろと辺りを見回しても、あの巨体が見当たらない。

「今頃上で最後の一人を捕まえた頃じゃないかな」

セインが見上げれば、ちょうど本人が顔を出したところだった。

「手を振ってるわね」

「上手く行っただけだね」

二人に登って来いと合図をすると、ギャンガルドはそのまま引き返していった。

「じゃあ、僕はこいつを引き上げなきゃならないし、キヤルは下の

タカたちを」

セインが急に口を閉じた。

「あら？」

「キヤル！」

背中の男に構わず、セインがキヤルに飛びついた。

「ななな！」

一体何事かと混乱する目で見えたのは、空の青と、崩れ落ちてくる大量の土砂の波だった。

不運と幸運

「うんっ?!」

痛む背中に目を開ければ、見えたのは岩や土ばかりで、他に何も見えない。

「え？」

慌ててきよろきよろと見渡せば、それは目の前だけで、キヤルの後ろにはちゃんと地面と川と、空があった。

一瞬、ほっとしたが、何か足りないことに気が付く。

「セイン？」

さっきまでそこにいた長身が見当たらない。

ザッと、全身の血が音を発てて引いていく。

うるさく響く心臓を無理に押さえつけて、もう一度良く周りを見渡す。

「…セイン？」

足元の土砂から、手が覗いていた。

「セイン！セイン！」

名前を呼べば、ぴくりと動いた。

「セイン！」

キヤルが手を握れば、確かに握り返された。

「今、出してあげる！」

土砂を素手で掘り、キヤルはセインの名前を呼び続けた。

「誰か！タカ！ギャンガルド！誰か助けて！」

自分以外に人がいることを思い出し、ようやく助けを呼んだところで、タカが走って来るのが見えた。

「お嬢！大丈夫か！？」

「タカ！タカ！助けて！」

深くえぐれた斜面の下に出来た土砂の山に、タカは最悪の事態を予想したが、助けを呼ぶキヤルの手を握る土砂から生えた手に、そ

れは無いと一瞬安堵したが、悠長な事も言っていられない事に代わりはない。

「お嬢！そのまま旦那の手、握っててくれや！離すんじゃないぞ！」
言うなり、タカは土砂を除けながら、崖の上を見上げた。

「キャプテン！こっちだ！」

見上げた先には、残った木々を器用に利用しながら駆け下りてくるギャンガルドがいた。

「旦那！生きてるか！？」

視線を元に戻すと、土砂をどける作業に戻る。

道具もなにもない状態で、手作業だけで掘り進めて行く。

「上の連中は始末してきた。生きてんのか？」

到着したギャンガルドが、そのままタカの横で作業を始めた。

「くそ！こんな事ならさっさと殺しておけばよかったんだ！」

ギャンガルドの物騒な呟きに、キヤルもタカも海賊王を見上げた。

「殺すって・・・？」

「気絶していた連中が、目を覚ましてやがったんだよ。あいつら下にお前らがいることを知ってて爆破しやがった」

「なんっ！」

その爆破した連中を捕まえ、動けないようにしてから降りてきたのだという。

「まさか、賢者が埋まってるなんざな」

大きな岩をギャンガルドとタカの二人がかりで川へ落とすと、セインの身体が土砂の中から見えた。

「あたしにも手伝える事はないかい？！」

気が付けば、ジャムリムがキヤルの背後に立っていた。

「あの男は？」

「まだ気絶してる。チョツキを近くの木ごと着せてきたから、抜けられないと思うよ」

木の幹に男をもたれさせかけ、着ていたチョツキを背中の木を包むように着せかけて、腕をチョツキに無理やり通せば、地面に生え

た木を背負う形になる。

「そりゃ、またけつたいな」

「こんな事する連中に遠慮はいらないだろ？」

「確かにな」

汗を拭いながら、ギャンガルドは土砂の隙間から見えるセインの体を覗き込む。

「やあ、面倒をかけるね」

岩の間にちょうど良く挟まったのか、意外にもセインは元気だ。

「セイン！あんた喋れるの？」

キヤルがセインの顔に手を伸ばすが、届かない。

「ごめん。何だかぴくりとも身体が動かないんだ」

土砂の圧迫によるものなのか、どこか痛めているからなのか。

「待ってる。今出してやる」

ギャンガルドの、珍しく真剣な口ぶりに、セインは思わず苦笑する。

「笑ってる場合かよ」

「だって、君のそんな顔、滅多に見られないだろ？」

土砂に体のほとんどを埋めたまま、そんなことを言うセインに、流石の海賊王も呆れた。

「余裕じゃねえか。体のどこも痛くねえな？」

にやりと、いつもの調子を取り戻して、ギャンガルドが不敵に笑う。

「大丈夫。動かないだけで感覚もちゃんとある。運が良かったよ」

土砂の中で表情は良く見えないが、セインも笑ったような気がした。

「旦那、元気なんだつたら引つ張り出しても大丈夫なんじゃねえですか？」

先程二人がかりでどけた岩の反対側も、どうやら岩があるらしく、それが壁の役割を果たしてセインは無事にいるらしい。少し間違えば、その岩と岩の間で挟まれて押しつぶされていてもおかしくはな

かった。

「強運ですね」

「はは」

タカの言葉に、押しつぶされても、果たして自分は死ねるのかな、などとセインは思ったが、口には出さなかった。

「引つ張り出すって言っても、真っ直ぐ水平に引つ張ってくれないと、多分抜けないと思うのだけれど」

身体が縦になっていれば土砂を掘り下げて脱出も可能だっただろうが、セインは横倒しのまま埋まってしまっている。体にのしかかる土砂をどけるには、土砂の量が多い上に危険が伴った。なら、引つ張って抜いてしまうのが楽なのだが、それはそれで、腕を引けば土砂の圧力で肩が抜けるか、下手をすれば腕が折れてしまう可能性もあり、水平方向に引つ張る事ができなければ、背骨を傷める可能性もあった。

「あたしがやる」

ずい、と、キヤルがセインのいる土砂の隙間を、手で掘り広げ始める。

「キヤル?! 危ないよ!」

慌ててセインが止めにかかったが、それで言う事を聞くキヤルでもないことは、場の全員が知っていた。

「どのみち、こんな隙間、お嬢しか潜り込めねえ。お嬢を俺たちが手伝うから、大人しく引つ張られとけ」

諦めたようにギャンガルドが言う。

「あ。じゃあ、キヤルちゃん。これ使えるんじゃない?」

ジャムリムが取り出したそれは、あの幅の広いナイフと、針金やロープ。

セインが捕まえた男の持っていた、盗人道具だった。

「ナイフはスコップの代わりになると思わないかい?」

言われてみれば。

「何本あんだ」

「人数分持ってきた。落ちてんだもん」

セインとギャンガルドが連中と格闘したさいに投じられたものだろう。

「そんなに投げていたっけ？」

「さあな。落としたんじゃねえの？お前さん一本持っていたしな」
どちらにしろ、今は利用させてもらうに越した事はない。

土砂の中と外でそんな会話を交わすくらいには、余裕が出てきていた。

「これ、凄く掘れるわ」

ざつとざつくと、キヤルはナイフで土砂を掘る。

「もともと、崩れた土だからな。柔らかい上にナイフの刃が刺さりやすくなってるんだろ」

「物は使いようってやつすね」

「キヤルちゃんが入れるくらい広げたらどうすんの？」

四人でざくざくとナイフを使って、土砂の隙間の入り口を掘れば、あっさりと子供一人分の穴が出来た。

「なんならこのまま掘ってく？」

「それは最終手段だろ。引っ張ったほうが早い」

ジャムリムとギャンガルドが話している間に、キヤルはさつと隙間に潜り込んだ。

「あ。これ持っていった」

そのキヤルに、ジャムリムが自分のハンカチと、短い盗人道具のロープを差し出した。

隙間から後ろ手に伸ばされたキヤルの手に、それらを握らせると瞬く間に潜って行く。

「賢者の手はまだ出ているな？」

ギャンガルドが確認を取れば、タカが勢いよく返事する。

「へえ！ちよいとお嬢の足が邪魔ですがね」

言えばキヤルの足がぶんぶん動いた。

邪魔と言われて腹が立つたらしい。

「キヤル、あんまり動くと崩れるから」

土砂の中からセインのたしなめる声がした。

「早くしねえと、またいつ崩れるかわかったもんじゃねえ。このままできてくれりゃあ、いいんだが」

いつになく、ギャンガルドが心配そうだ。

土砂の中の二人は、大丈夫なのだろうか。先程から、何か話し合っているようだったが。

「あれ？それでどうすんです？」

タカが、誰かと話し始めた。

「ああ。手？お嬢、ちよつと一回出てくれませんかね？」

言うなり、足だけはみ出ていたキヤルが、もそもそと戻って来た。『ありがとう。それで、もう少しロープないかな？』

どうやら、セインの体をロープで括って、それを引っ張らせるつもりらしい。

土砂から出ていたセインの手が、隙間の中に引き込まれた。

「ロープはないけど、針金なら」

「気が利くね。ありがとう」

ジャムリムがキヤルに渡すと、土砂の中からセインが礼を言った。『それで、どうするんですかい？』

タカが、隙間を覗き込んだ。

「セインロズドになれないの？」

キヤルが唐突に言った

『そういえば。聖剣があれば、姿を変えて引っ張り出す事も容易いのではないだろうか。』

タカもギャンガルドもそう思ったが、事はそう簡単でもないらしい。

「土砂がかなり圧迫しているからね。僕の面積が小さくなる分、この隙間が勢いで埋まる確率が高いんだ。それに、括ってもらったところで、僕の大きさに括っても、意味ないだろう？ロープが抜けちゃうから」

「じゃあ、どうするんで？」

「だから、僕の体をロープでくくってもらうくらいなら、短くても何とかなりそうだから、それをそのままキヤルに掴んでもらって、君たちはキヤルと僕を引っ張り出してくれないかな」

短いロープの代役を、キヤルにやってもらおうという事らしい。

「わかった。抜けんじゃねえぞ」

ギャンガルドが了承すると、針金とロープを解けないように一本に結びつけ、キヤルが再び穴の中へ潜って行く。

コロコロと、土砂の上から小石が落ちてきた。

「まずいね。小石が落ちてくるなんて、また崩れるんじゃないかい？」

ジャムリムが不吉な事を言う。

「おいおい。小石くらいどうってことねえんじゃねえのか？」

「ギャンガルドは海賊だから知らないんだろうけど、こういう崖崩れは小さな石が落ちてくるだけでもまた崩れる前触れなんだよ！」
陸の事は良く分からないが、ジャムリムはこの土地で生まれ育っている。なら、彼女の言う事は真実だ。ギャンガルドは二人を急かした。

「早くしろ！」

しかし、セインからもキヤルからも返事がない。

「おいおい」

キヤルの足は隙間からはみ出ているが、セインの腕は作業のために中に入ってしまったて見えない。

先程小石が落ちてきたあたりから、今度はざらざらと砂の塊が滑り落ち始めた。

イライラと二人の合図を待つのが、やたら長く感じられる。

「引っ張って！」

キヤルの声が聞こえたと同時に、ギャンガルドとタカがキヤルの足を引っ張り、ジャムリムがその二人の腰のベルトを更に引っ張る。
「せえの！」

掛け声を掛け、ありったけの力で引っ張るが、キヤルの足が浮くだけでびくともしない。

「痛いってば！上に引っ張らないで真っ直ぐ引っ張れって言われたでしょう！」

くぐもったキヤルの叱責に、三人は重心を低くして引っ張った。ずるり。

まさにそんな感じだった。

斜面の上から、大きな一塊の土砂が、滑り落ち始めた。

「くそ！」

目端に見える土砂崩れは、感覚的にスローモーションのようだが、しかし実際はとてつもなく早い。

その時。

くん、と、セインの身体が何かから抜けたような感じがした。

一瞬軽くなったと思えば、あとは転がるように引っ張り出した。

セインの足が完全に抜けた頃。目の前を大量の土砂が津波のように通り過ぎていった。

「た、助かった、のか？」

土砂は川を堰き止める勢いだったが、完全に塞ぐまでにはいたらなかったらしい。水は形を変え、土砂を迂回して流れ出す。

「はは、君たちのおかげだよ。ありがとう」

土にまみれてぼろぼろのまま、セインが全員に頭を下げた。

「こんな事になるなんて、本当手間がかかるんだからあんたは！」

ぼろぼろと、大粒の涙をこぼしながら、キヤルがセインをぽかぽかと殴る。

「ごめん、ごめんよ。心配かけた」

「あんたなんか、引っかくんじゃなかった！わあああん！」

そのまま大泣きし始めたキヤルの頭を胸に引き寄せて、セインは何度も謝りながら、キヤルの土だらけになったふわふわの髪を撫でる。

「あーあ。こんなスリル、経験するものじゃないわねえ」

あたりと、ジャムリムが座り込むのを皮切りに、ギャンガルドも

タカも、一斉に笑い出した。

「な、なんだか、ホツとしたら、笑うしかねえっていうか」
タカが、目に涙を浮かべて笑う。

「あー。疲れたぜ」

ギャンガルドが地面に座ったまま、汗を拭う。

「体は大丈夫なのか？」

聞かれて、セインは力なく自分の足を見た。

「ああ？」

ギャンガルドはまだ泣き止めないタカに頼むわけにも行かず、立ち上がるとセインの傍でしゃがみ込む。

まだぐずるキヤルの頭を抱え込んだままのセインの足を掴めば、セインが顔を顰めた。

「・・・痛むのか」

「骨は無事みたいだけどね」

その言葉に、キヤルが顔を上げてセインを見上げた。

「ごめんね？」

また謝るセインに、キヤルは何も言わずにしがみ付く。

「ちよいと、見るぞ？」

ギャンガルドがセインのズボンの裾をめくりあげれば、それだけで痛むのか、体を強張らせる。

「あー。こりゃ・・・」

土砂の圧迫で足が内出血を引き起こし、紫色に腫れ上がっていた。

「両足共か」

「・・・みたい。まさかこんなになっていとは思わなかったけど」
壊死の一手前だったのはよしとするべきか。

せつかく腹の傷が癒えたばかりだというのに、なんというか。

「お前さん、運が良いのか悪いのか。わからんなあ」

「しみじみ言わないでくれる？」

これでは立つ事もままならないだろう。

「あらあ？」

ジャムリムが、素つ頓狂な声を上げた。

「なんです？」

タカが訊ねれば、土砂の川岸の隅を指差す。

「あれ」

見れば、よろよると人の形をした土の塊が立ち上がっていた。

「何だありや」

見ていると、うーん、とうめいて、そのまま川へ落ちた。

水に流されるのをそのままに観察していれば、流れに洗われて、本来の姿が徐々に見えてくる。

「あれはー」

セインがぼつりと呟いた。

土砂が崩れるまで、セインが担いでいた男だった。

「仲間がいても爆破するんだから、たいしたもんだ」

タカが呆れたように呟いた。

しかし、誰も彼を川から引き上げようとはしない。

「彼こそ運がいいんじゃないかな。僕なんか埋まった拳句にこれなのに。放つといってもこれだけ運がいいなら生き延びるよ」

セインの言葉に、皆が頷いた。

「そっぴや、剣はどうした？」

流れ下る男を眺めていたギャンガルドが、ふと思いついたらしい。

「ああ。そこらに転がってなければ、多分この中だね」

転がっている確立は低そうだ。なにせ、土砂に飲み込まれるまでセインが手に握っていたのだから。

「キヤルを突き飛ばしたときに、流れていった彼と一緒に手放しちやったからなあ。出てこれるかな？」

暢気なセインの呟きに、ギャンガルドは額を手で覆った。

「おいおい、勘弁してくれよ。これを掘り返すなんざ、俺はもうごめんだぜ」

それに、セインはきよとんと返す。

「へ？ああ。そうか。知らないんだっけ」

「あ？」

何を知らないというのか。とにかくどうしたものの口を開いたギヤングルドだった。

「彼女は？」

きよろきよろと見回すセインが探しているのは、ジャムリムらしい。

彼女は男が流れていった方角を眺めていた。

「見てないなら大丈夫かな」

なにが、と言おうとして、ギヤングルドは口を開きかける。

「おいで」

セインが片手を高く掲げて呟いた事で、開いた口は別の言葉を発した。

「なんだ。その、愛玩動物を呼ぶような呼び方は」

「忘れてるでしょ。僕はセインロズドで、セインロズドは僕なんだよ」

と、いうことは何だ。自分を呼んで「おいで」なのか？

言いたい事はあったが、掲げられたセインの手の中に、いつの間にか聖剣が握られていた。

「どっから出した」

「どっからって、埋まっていたところから？」

泣き止んでもセインから離れようとしないキヤルを抱えたまま、セインは自分の剣を横に凧いだ。どうも土が付いていたらしい。剣先から土が飛んだ。

「あー。汚れちゃってる」

もそりと、キヤルが立ち上がると、セインに手を差し出した。「洗ってくれるの？」

真っ赤に泣きはらした顔で、こくりと頷いたキヤルの手に、セインロズドを渡すと、それを抱えて、とてとと、川岸へ歩いていく。「キヤルを泣かせちゃったな」

そんなことを気にしているセインを、ギヤングルドは眺めやる。

「さつきから、何？」

流石に、助けてくれたとはいえ、すぐ傍でじっと見られればいい気はしない。

「別に」

「別にで君は人の顔を見るの？」

どうも何を考えているのか分からない。

「いやあ、セインロズドに姿を変えられるんだったら、その方が土砂から抜けやすかったんじゃないかなあと思ったただけだ」

なんだかごまかしているような気がして、セインはギャンガルドを睨んでみたが、にかりと笑われれば、溜息しか出てこない。

「わかってて言っているんでしょう。足がこんな風になるくらいだもの。僕の面積が小さくなれば、余計に土砂に埋もれただろうね」

土砂の重みというのは物凄い。岩に守られていたからといっても、少しの均衡が崩れただけで更に状況は悪化していただろう。道具のほとんどないあの状況では、早々に掘り返すことも出来なかったのだから、一気に引き抜くしかなかったのである。

そこに、キヤルが帰ってきた。

無言でセインロズドを差し出す。

「あ。ありがとう」

差し出されたセインロズドを、セインは手の平の中に収めた。もちろん、ジャムリムの目を気にしてだが。

「で？どうするよ」

今度は背中にキヤルを貼り付けたセインを、ギャンガルドは見下ろした。

「本当だったらセインロズドになってタカがキヤルに運んでもらうのだけだ」

そこでギャンガルドの名前が出ないのは、もう仕方がないのだろう。

「ジャムリムの事だったら、気にしなくていいんじゃないか？口は堅い女だぜ」

「そつだろっけど」

なるべくなら、見せたくない。噂はどこから広まるかわからないというのもあるが、女性の心臓にはあまりよろしくない自覚はある。「なんにしたって、ここにずつつといるわけにはいかねえんだ。行くぜ」

「わあ！」

言うなり、ギャンガルドはセインを背負った。

「ちょ、ギャンガルド！」

抗議するセインだったが、抵抗するわけにも行かない。なにせセインの背中には。

「あら。亀の親子みたいで可愛いじゃない」

ジャムリムがそう感想を漏らすのも仕方がない。ギャンガルドはキヤルを背中に貼り付けたままのセインを背負っているのだ。

「キヤル、落ちないでよ？」

背中を気遣えば、キヤルの手にぎゅつと力がこもった。

「キャプテン、それでこの斜面を登るんで？」

タカが心配そうにおろおろしている。

「何。しがみ付いてりや落としゃしねえだろ」

ギャンガルドの無責任な言葉に腹も立ったが、それしか方法がないのだから仕方がない。セインは諦めて、ギャンガルドの背中にしがみ付く事にした。

「何かあつたら首でも絞めればいいしね」

物騒な事を口にした。

すったもんだであれやこれ（前書き）

仕事しなくなっってから激太りした作者です。お待たせして申し訳ありません。しかももう少し続きます（汗）

すったもんだであれやこれ

近くの崖は、土砂崩れで更に地盤が弱まっている可能性があったので、少々川下まで下ってから、登りやすそうな場所を見つけて、なんとか全員、元の崖の上にまで戻って来た。

「ふう、一時はどうなる事かと思いやしたぜ」

タカが、どつかりと地面に座り込んだ。

「あんたが捕まえたって言う連中は、どこにいるんだい？」

ジャムリムが見渡ししながら、困ったようにギャンガルドに訊ねた。なんにしても、一気に地形が変わってしまったている。崖崩れと爆破による衝撃で、来た時に見た土砂の山があった道は挟れて跡形もない。本当に、元の場所に帰ってきたのか疑ってしまうほどだ。

「崖と一緒に崩れてなきや、そこらへんに転がってんだろ」

セインとキヤルを地面へ下ろし、自分も探しにかかる。

「括っておくとかしなかったんですか」

「だって道具が無えだろが」

「そりやそうですけど、こんな見晴らしの良い場所でパツと見て見つからないなんて、逃げちまったんじゃない？」

タカが珍しくギャンガルドにばやきながら、残された道の上をきよろきよろと見渡した。

「あ」

岩の影や土の塊の下に、人のものらしき手やら足やらが見える。

走りよれば、総勢四人。保安官を入れて五人。気絶したまま、ばらばらに倒れていた。

「おや。まあ」

「うはーっ。これはまた」

「流石だねえ、ギャンガルドったら」

「だろ？」

なにやら気絶した連中を見下ろして、それぞれに感想を漏らせば、

次に一斉に大笑いが始まった。

「な、何？みんなどうしたのさ」

離れた場所にいるセインには見えないので、楽しそうな一同を怪訝に見やる。

「ああ、旦那も見ますかい？傑作ですよ、こりゃあ」

言いながら近づいて、タカが背中を差し出すので、とにかく見てみることにした。

セインを負ぶっている間も、タカは笑いが治まらない様で、肩を震わせている。

「私も！」

一人取り残されていたキヤルも、我慢が出来なくなってタカの横を抜けて走っていく。

「あ。お嬢は見ねえ方が」

タカが言い終わらないうちに、ギャンガルドとジャムリムの間へ割って入ったキヤルから、変な悲鳴が聞こえた。

「ぐぎやつ?!」

「キヤル？」

「あー。遅かったか」

タカに負ぶさりながら、一足遅れて一同の下へと着いて、セインも悲鳴こそ上げなかったものの、ぽかんと口を開けてしまった。

「これは…。やるねえ？」

ようやく閉じた口から出た言葉は、悔しいながらギャンガルドを褒め称えた響きがあった。

何にせよ、こんな目に遭わせてくれた連中には、ふさわしいというべきか。

件の下手人どもは、気を失ったまま、綺麗さっぱり素っ裸にされていた。

なるほどこれは、お笑い種である。セインも遠慮なく笑わせてもらった。

「なんてモン見せんのよ！」

キヤルが吠えた。

「まあまあ。元気が出たじゃねえか。良しとしようぜ？」

ギャンガルドはぼん、とキヤルのふわふわの金髪に手を置くと、そのまま激しい抵抗も物ともせず、にガシガシと頭を撫で回した。

キヤルの髪はぐしゃぐしゃだ。

「縛っとくもんも無えし、だったら手っ取り早くて良いかと思ってな」

素っ裸なら、気がついた所で逃げようが無い。逃げたところで、逃げ場所が無い。

「苦肉の策？」

「嘘をおっしゃい。君の事だもの。楽しかっただけでしょ」

セインの冷たい視線を受け流し、ギャンガルドはわざと大仰に溜息をついて見せた。

「ま、もちろん楽しかったけどよ。つーか賢者さんよお？」

「何？」

「説教が年寄りくさ、おわ！」

言い終わらないうちに飛んできた礫を体を反らして避ける。

「いくら足が使えなくてもね。君くらいどうにでもできるよ？」

「悪かった！もう言わねえから！」

体内にしまったばかりのセインロズドを、もう一度取り出す体勢に入ったセインをあわてて止める。

すると。

「ぐほっ！」

横から小さな足が、自分の足の小指めがけて振り落とされた。

足が小さいとはいえ侮ってはいけない。少女の全体重を乗せた思い切りのいい踏み付けは、非常に、痛い。

「髪が収集つかないじゃないの！どうしてくれるのよ！」

さらにぐりぐりと踏みにじってくれるので、ギャンガルドの瞳には、迂闊にも涙が滲んだ。

「はいはい、駄目だよ。そんなにあたしのいい人をいじめないでおくれ」

唸るキヤルの両脇に手を差し込んで、ひょい、と持ち上げたのはジャムリムだった。

「意外と力があるんだね」

セインが諦めて手を下ろす。

「それでも女一人で店を切り盛りしてるからね。キヤルちゃんくらいなら軽いもんさ」

言いながら、ジャムリムはキヤルを下ろし、くしゃくしゃになった髪を、手櫛で整えてやったが、整わない。

「ブラシがあればねえ」

「あるわ！」

そういえば、カバンである。

「どこに行ったのかしら」

あの爆発に巻き込まれて土砂の中だとすれば、発掘は困難だし、下手をすれば川に流されている可能性もある。

「キヤル。アレじゃないかな」

セインが指をさした先は、崩れた崖から離れた岩の下だった。

「あーっ！！！」

幸い、崩落からは免れていたものの、被害は少なからずあったよ
うで。

「へこんでるー！」

遠目に見ても、窪みが出来ているのが分かった。

走り寄って蓋を開け、中身をチェックする。

「中身は何とか無事ね」

中に仕舞っている服やタオルがクッションにでもなったのか。重
火器系は傷一つ無く無事だった。ついでに、財布とパスも無事で、
キヤルはホッと胸を撫で下ろす。

しかし、今現在一番必要なものが、鏡と一緒に大破していた。

「どうしたの？ブラシは？」

無言でカバンを引き摺りながら戻ってきたキヤルに、ジャムリムが訊ねると、涙目で二つに割れたブラシを差し出された。

「あらあら。これじゃあ、無理だねえ」

真つ二つになったブラシは、毛の部分も折れてあちらこちらを向いていた。

多分、カバンがへこんだ時に直撃でも食らったのだろう。

「うちに帰ったら、結ってあげるから」

ジャムリムが頬を撫でれば、キヤルはこくりと頷いた。今にも泣き出しそうなので、ジャムリムは小さく笑うと、その小さな体をひよいと抱え上げ、片腕に抱き上げた。

「さ、帰ろうか？」

彼女のその一言が合図になって、みんなで足をそろえて岐路へと着いた。

「だつて、めんどくせえし」

というギャンガルドの意見に珍しくみんなが賛成し、裸の連中はそのまま残して帰ることにした。崖下にも、芋虫にされた盗賊が転がされていたが、それも全く同じ理由で見なかったことにされる。

しかしもちろん、彼らの衣服、持ち物は財布から小道具にいたるまで、きつちりと貰い受ける事にした。これで、目が覚めたところで裸一貫無一文言う事なし。

彼らの悪行に対する、ほんのささやかな嫌がらせであった。

「ごめんね。重いだろ？」

ギャンガルドに担がれるのを断固拒んだセインを、タカが背負っている。

「なあに、旦那一人、どうってこた無いですぜ」

「そうかい？頼もしいな」

「へへ」

何だか仲が良い二人を、ギャンガルドがつまらなさそうに見やる。

「俺の時と随分態度がちがうじゃねえかよ」

セインもタカも、一瞬きよんとする。

「当たり前じゃないか。何を今更」

「そうっすよキャプテン。怪我人だからってどうせまともに旦那を運ぶつもりなんか毛頭無いくせに、何言ってるんです」

いかにも当たり前前に批判されれば、そのとおりなので、とりあえず黙ってみる。

「キヤルちゃんの髪は綺麗だねえ」

「えへへー。毎日ブラッシング欠かさないからね！」

女性陣は女性陣で、きゃっきゃきゃつきゃとギャンガルドの後ろで、先程から可愛らしい会話に花を飛ばしていた。

「俺、一人で浮いてる？」

「さあ、どうでやしょ？」

「浮いているって思うから浮いているんじゃない？」

「帰ったら髪、綺麗に結ってあげようね」

「ジャムリム大好き！」

ぼそりと呟いた言葉に、反応してくれた二人は冷たく、残る二人は聞こえてもいなかったのか、完全に無視だ。

「ううー。あいつら、裸にするだけじゃなくて皆川に流してくりや良かったぜ」

要するに八つ当たりなのだが、これには全員の賛同を得た。

「ホント、身包み剥いで真っ裸にするだけじゃ足りないよね」

「どうせなら土砂の中に埋めてしまいたかったわ」

「発破なんか、あんなところで使って何するつもりだったんだか」

「ああ、多分それ、客の足止めだわ」

「えー」

そんなことを言っているうちに、村の入り口にまで辿り着いていた。

「あの馬」

タカに負ぶさったまま、セインが木の影を見やった。

「あれ？あの子」

つられて、全員が一斉に視線を向ければ、道から外れた野原で、

草を食む馬を見つけた。

馬も、こちらを見つけたらしい。ゆつくりと近寄ってくる。

「僕らに乗せてくれた馬だよね？」

ギャンガルドたちを探しに行く途中、保安官から勝手に拝借したあの馬だった。

「戻ってきていたんだね」

擦り寄ってきた馬の鼻面を撫でてやろうと手を伸ばすと、動けないセインを気遣ってか、体ごと擦り寄ってくる。

「うお、旦那、逆にあぶねえですね？」

「ああ、ごめん」

どうも、背中に乗れとっているらしい。

「でも、もうすぐジャムリムの家でしょ？」

遠慮がちに彼女へ問えば、気前の良い笑顔が返ってきた。

「大丈夫よ。うちには客用に厩もあるからね。ま、乗ってもすぐ降りる事になっちまうだろうから、連れてくれば？」

ありがたい申し出だった。

「ハイ、馬ゲット！」

キヤルが嬉しそうに馬の顔に抱きついた。

思わぬところで馬を調達できた一同は、ようやくジャムリムの家へと辿り着く。

結局のところ、すでに日は随分と傾いてしまっていて、もうすぐ夕焼けが見られるだろう。

「今日はうちへ泊まっていきなよ。店は閉めちまうからさ！」

ジャムリムのありがたい提案により、結局、もう一泊この村に滞在する事になった。

肝心の駅馬車については、タカが調べてきてくれたので、セインはそれを、彼の手当てを受けながら聞いている。

ジャムリムは自分のブラシを取り出して、約束どおりキヤルの髪を結っている。

ギャンガルドは小腹が空いたのか、台所を借りて、ハムをスライスしていた。

心和む光景というヤツだ。

「なんだか、久しぶりな気がするよ」

「へ？何がです？」

痛む足を手当てしてもらいながら、ぽつりと呟けば、タカが包帯を巻く手を止めた。

「ギャンガルドがいるのに平和だなあって思ってたさ。その原因を考えていたんだけど」

和みながら思ったことを、本人たちに言えばどんな顔をするのか見物ではあるが、言っではいけないことなので、タカにだけ、こっそり耳打ちすると、目をまん丸に見開いて、何度もセインの顔と、自分の後ろの三人との間を、視線をさ迷わせた。

ギャンガルドがお父さんで、ジャムリムがお母さん。

「確かに、内情を知らないヤツが見たら、そう見えるかもしれないがね」

「面白いでしょ？」

そう言えば、タカは苦笑いした。

「おれっちには、旦那とお嬢のほうが、家族に見えますがね」

「そう？僕には、君たちクイーン・フウェイルのみんなのほうが、家族に見えるよ」

セインとタカと、顔を見合わせて小さく笑いあった。

ギャンガルドがいるのにゆったりした時間が流れているのは不思議な感じで、できればこれからもそんな時間を過ごしたいところだ。

「しかし、あの盗人連中、結局何がしたかったんでしょうかね？」

再び、包帯を巻き始めたタカに両足を委ねながら、セインはふいと、窓の外を見やった。太陽の光が、金色に変化し始める一歩手前。

西日が、暖かな恩恵を村にもたらしている。

「彼らの持っていた物と、あの身のこなしから察するに、まあプロ集団であることに間違いは無さそうなのだけだ」

あの素っ裸で転がっていた中に、昨夜の刺客の顔は無かったように思う。また、土砂崩れが起きる前に追い落とした中にも、いなかっただけだ。

「また、来る様な気がするけど」

なんとなく、そんな予感はしていた。

終わり良ければ全て良しってどうだろう

「とにかく、今晚だけは来ないで欲しいね」

「そりゃそうだ」

今晚どこるか、盗人も刺客も、ずうつと来なくていい。

「ほれ。飯が出来るまで摘んどろ」

ギャンガルドが、スライスしていたハムを皿に乗せてセインの座るソファの前のテーブルに置く。

キッチンでは、キャルの髪を結び終わったジャムリムが、夕飯の支度にとりかかっていた。その横で、キャルが大きなエプロンをつけて、彼女の手伝いをしている。

「珍しい。君が気を使うなんて」

驚いて、眼鏡のズレを直しながらギャンガルドを見上げれば、海賊王はテーブルの向かい側に、どかりと腰を下ろし、ハムと一緒に持ってきた麦酒をぐいとあおった。

「ただの怪我人なら放っておくが、足は致命的だ。歩けんのか？」

「……」

セインが黙り込んで、眼鏡の掛け具合を調節しながら、珍しいものでも見るように、まじまじとこちらを見つめてくる。

何か嫌味の一つでも飛んでくると思っていたギャンガルドは、気味が悪そうに少し身を引いた。

「あんだよ」

「初めて君に、人間扱いされた」

その一言に、ギャンガルドは今口に含んだばかりの麦酒を噴き出しそうになって、慌てて飲み込んだ。

「げほげほげほっ！かはっ」

「キャプテン、大丈夫っスか？」

咳き込むギャンガルドの背中を、慌てて回り込んだタカがさする。

「こ、こら、賢者、げほ」

「何？」

「お前俺を何だと思ってやがる」

人を咳き込ませておいて、悪びれる事もなく、包帯だらけの足をさするセインを、ギャンガルドは睨みつける。

普段であれば、誰もが縮みあがるその眼光も、セインはさらりと受け流して、ギャンガルドの持ってきたハムの、一番薄いところを摘み上げた。

「その言葉、そっくり君に返してあげる」

ぱくりとハムを口に放り投げて、もくもくと口を動かすセインに、ギャンガルドはぐうの音も出ない。

以前、自分の船の上でも、似たようなやり取りがあつた思い出す。

「僕はこんなだからね。人間として見てくれなんて言わないよ。だいたい、僕の正体を知って、人として扱ってくれる方が珍しいんだ」
「そりゃ、そうだろうよ」

生身の体から剣を取り出すその異常さに加え、自身そのものが剣にもなれる。今でこそ、人の姿をして、怪我なぞしているが、その怪我も、常人の何倍も治りが早い上、剣の姿をとれば、あっさりと完治する事ができるという。

そのどころが、人間だというのが。

「聖剣なんて、どうして言われ始めたのか僕には分からないし、実際、自分は化け物だっという自覚はあるよ」

「へえ？」

「でも、旦那だって、痛いものは痛いし、旨い食い物は旨いんですよ？」

今までギャンガルドの背中をさすっていたタカが、きょとんと話の間に割って入る。

「痛覚も味覚もあるからね」

たしかに、現在怪我した足は痛いし、タカの料理はとても美味しいと思う。

「だったら、立派に人間でしょ」

にかりと笑うタカを、今度はギャンガルドとセインが凝視する。

「あれ？おれ、なんか変な事言いました？」

ぼりぼりと頭を掻くタカに、セインはくすくすと笑い、ギャンガルドは盛大に溜息を吐き出した。

「へえへえ。俺がおかしいんですよ」

拗ねた様に呟くギャンガルドに、セインは笑いかける。

「そんなこと無いよ。さっきも言ったけど、僕を人として扱ってくれる方が珍しいんだから。ただ、君がなかなか僕への警戒心を取らなかったからね」

「はあ？」

思わず聞き返す。警戒心剥き出しだったのは、むしろセインとキヤルではなかったか？

「君が警戒しているから、僕らも警戒していたんだ。ああ、そうか。やっとわかった」

ギャンガルドがいるのに、キヤルも自分もゆったり出来た理由。

「君が、警戒心を解いたからかな」

「んだ？そりゃ」

「そのままさ」

訳がわからないといったギャンガルドの様子に、セインはまたくすくす笑い、タカは首を傾げる。

「はいはい！ご飯できたわ！」

小さな体には大きすぎるトレーに、大皿や小皿なんかを乗せて、キヤルがキツチンから出て来る。

「どうかしたの？」

楽しそうなセインと、気まずそうなギャンガルドを見比べて、キヤルがテーブルにトレーを置いた。

「あ。おれ、手伝いますよ」

気を利かせたタカが、皿をトレーからテーブルに移す。

「ありがと。セインの足はもういいの？」

「うん。タカが手当てしてくれたから、だいぶ痛みも引いたしね」
ジャムリムの手により、今はツータールになったキヤルに笑い返して、テーブルの上のハムやらをどけ、食卓の配置準備をしようと手を伸ばすセインの頭を、キヤルはぺん、と叩く。

普段なら届かないが、椅子に座っている今なら手が届く。

「痛い。何するの？」

「怪我人は大人しくしていなさい」

そう言って、なんだかぶつぶつと不機嫌に何かを口の中で呟くギヤングルドの隣へ移動すると、キヤルはセインを叩いたよりも思い切りよく、ギヤングルドの後頭部を、べん！と叩いた。

「いで！何だよ！」

すっかり油断していたギヤングルドは、思い切りキヤルの平手打ちを食らって、前のめりにテーブルへ額をぶつけそうになった。

「何だじゃないわ。あんたは五体満足なんだから、さっさと手伝って頂戴」

きろりと睨まれて、ギヤングルドはキヤルをじっと見る。

「な、何よ」

「いやあ、ちっちゃえ母ちゃんみてえだなあと思ってたよ」

「なっ！」

口をぱくぱくさせるキヤルは、どんどん顔が赤くなっていく。

「ぶ！わはははは！」

その様子にギヤングルドが笑い出し、セインはびくりして目を丸め、タカはキッチンの入り口で、キヤルの目に入らないようにこっそり腹を抱えている。

「あんたねえ！！」

キヤルが噴火して、まだ座ったままのギヤングルドの足を、思い切り踏みつけた。

「ぎゃあ！」

悲鳴を海賊王が上げたところで、本日のメインディッシュを両手に、ジャムリムがキッチンから顔を出した。

「何だか楽しそうだねえ」

テーブルの中央に、鍋をどんと据えると、先にキヤルが持って来ていたスープレに中身を取り分けて配り始める。

「ああ、誰か。キッチンにまだ鶏肉があるんだ。取ってきてくれな
いかい」

「へい、おれ行きます」

タカがキッチンから鶏肉を持って戻ってくるころには、ギャンガ
ルドもジャムリムを手伝って食器を並べ、食卓はすっかり良い匂い
に包まれて、みんなの腹が、一斉に空腹を訴え始めた。

「さあ、飯だよ！いただきます！」

全員が席に着くと、ジャムリムの声掛けで夕食が始まった。

「ああ、これ、もうちょつと辛くても良かったかねえ」

「ハーブは何使ってるんで？」

「ほら、キヤル。こぼしているよ」

「美味しい！」

「……」

ジャムリムの家の食卓は、いまだ踏まれた足を労わる約一名を除
き、一気に賑やかになった。

「明日こそ、村から出られるかしら」

ふと心配そうに呟くキヤルに、タカがぽんと手を叩く。

「馬車は出るみたいですね」

しかし、今日の爆発騒ぎで、道は分断されたままだ。

「タカが聞いてきてくれたんだけど。一旦僕らがこの村に入るまで
辿ったあの道へ出て、そこから迂回路を取るらしいんだ。盗人騒ぎ
と、あの爆発で、どうも旅行者が騒ぎ始めたらしくてね」

都市へ向かうには随分と遠回りになるが、それでも盗人が出て、
妙な爆発音が聞こえる村にいるよりずっといい、ということになっ
たらしい。

「でも、あの道だって嵐の影響がなかったわけでもないんだらう？」
ジャムリムが口元まで持ち上げたスプーンを、そのまま下に下ろ

す。

「なんだかあの保安官に邪魔されて、先まで見に行く事ができなかったらしいのだけど。客の意見を尊重したみたい」

「あの保安官。ますます怪しいわね」

セインの答えに、キヤルは落馬した保安官を思い出す。あのまま他の馬にでも踏まれていたら良かったのに。

「それじゃ、行き当たりばったりで馬車を出すって言うのかい」

ジャムリムのもっともな疑問には、直接組合から聞いてきたタカが答える。

「らしいですぜ。向こうは山が無いから平坦だし、馬車がぬかるみに嵌るか、倒木で道が塞がれるかしても、大丈夫だろうって事になったようです」

「とにかく、これであの盗人連中と保安官が組んでいるって可能性は高くなったわけだ。つーか確実に決定だろう。旅行者をこの村に閉じ込めて、何がしたかったんだか」

ギャンガルドの言うとおりで、おそらくはあの保安官二人と盗人組織は手を組んでいたに違いない。嵐で足止めされた旅行者から、盗めるものは盗んでおきたかったという事だろうか。

「だったら、新しい客を入れて、どんどん盗んだ方がお金になるんじゃない？」

キヤルがパンをちぎって口に放り込む。

「そうでなければ、誰か特定の人物の足止めをしておきたかったか」
セインの呟きに、一同一斉に顔を上げた。

「ふむ」

「やっぱアレですかね。邪魔したいんですかね？」

そう考えるのがやはり自然なのだが、本来の目的が本当に自分たちなのか、いまいち確証に欠ける。

なにせ、相手が盗人というのも何故なのか良く分からない上に、自分で爆薬を仕掛けて失敗し、仲間もろとも気絶して伸びているような連中だ。

いくら腕はあったようだけれども、間抜けとしか言いようが無い。

昨夜の刺客も、結局何が目的だったのか分かっておらず。なんとなく、襲われたので自分たちが目的なのだろうか？という予想に止まってしまふ。

「考えていたって仕方が無いさ。もしかしたら僕ら以外の何か重要人物がお忍びで来ているのかもしれないし、そうじゃないかもしれないし。あんな間の抜けた盗人集団に依頼する方も間が抜けているのだろうから、気にしないでとにかく明日の事を考えようよ」

セインの言う事ももっともだが、すつきりしないと云うのは何とも気持ちが悪い。

「うーん…。それはそうなのだけど」

スプーンを咥えて、キヤルが考え込む様相を見せる。

「賢者の言うとおり、心配していたって始まらねえさ。いいか？振り向くなよ。奴さんたち、そこにいるぜ？」

ギャンガルドが窓の外を顎で示した。

キヤルとタカと、ジャムリムが、窓に視線を移しそうになって、

一瞬固まった。

「なんだ。気がついていたの」

セインとギャンガルドだけが、何でもないように食事を進めている。

「おう。おりゃ、これでも背中に目が付いてんだ」

「わー、かいぶつだー」

「棒読みで冗談返してんじゃないわよ！」

「ごいん

「痛い…」

殴られた頭をさすりながら、セインはズレた眼鏡を、中指で押し上げて掛け直す。

「あんた自分が動けない事を忘れてるんじゃないでしょうね！？」
キヤルに睨まれながら、へらりと笑う。

「タカのおかげで随分マシになったけど、結構痛いのに、忘れていられるわけじゃないか」

「ごん！」

「あうう！痛い！ほんとに痛い！」

「い、た、い、よ、う、に、し、て、ん、の、よ！」

テーブルの上に勢い良くおでこを押し付けられて、セインがじたばたともがく。

スープレに直撃しなかったのは不幸中の幸いか。

「痛いんだったら痛いって顔してなさいよ！わかんないでしょうが！」

「ごめんなさい」

泣きながら謝るセインに、キヤルも手を離す。
起き上がったセインの額は、見事に赤い。

「うう。ひどいよ」

赤くなった額をさするセインを、ジャムリムが呆然と見つめている。

「あ」

セインと彼女の視線がかち合った。

「ぶっ！あははははははははは！」

「あー。そうですね、そうなりますよね」

爆笑するジャムリムと、がつくりと肩を落とすセインは対照的だが、そこで感心している場合でもない。

「お。来るぜ？」

ギャンガルドの言葉の直後。

誰かが玄関のドアをノックした。

一瞬にして、賑やかだった食卓は緊張に包まれる。

「どなた？」

ジャムリムが、家主らしく声を上げる。

「・・・・・・」

暫く待ったが、返事は無い。

がたりと席を立ち、扉へ向かおうとしたジャムリムを、ギャンガルドが引き止めた。代わりに、がしがしと頭を掻きながら、自分で玄関へと赴く。

「まったく、今日の今日だろうが。お忙しいこつて！」

言いざまに、ドバン！という激しい音とともに、扉を蹴り上げた。衝撃に、勢い良くへし折れながら、扉が吹っ飛ぶ。

「ぎゃー！」

蛙が潰されたような声は、扉とともに飛んでいった男のものだ。

外の空気が殺気立つのも構わずに、のそりと、海賊王は外へと踏み出した。

「中によあ、俺の女と怪我人に、ガキがいるんでな。こういう事は他所でやってくんねえかい？」

宵闇へと差し掛かった薄暗い村の空気に、ギャンガルドの眼光が浮かび上がる。

「何が目的か知らねえが、気に入らねえなあ」

ボキボキと指を鳴らし、ギャンガルドがジャムリムの家から溢れる逆光を背に、路地に一步、また一步と歩き出せば、ざわざわと気配が揺れる。

「ふん、四人か。随分減ったもんだ。それとも、盗人どもは罔で、お前さんたちが本物かい？」

闇にまぎれたつもりでいたのだろう。人数を言い当てられた男たちは、一斉にギャンガルドへと襲い掛かった。

「ふん」

鼻で笑うと、ギャンガルドも姿勢を低く構え、まずは一番近くに
いる全身灰色の男の脇へと、一瞬のうちに踏み込んだ。

「遅いぜ」

「?!」

ドン！

驚愕に目を見開く灰色男の腹に一発、強烈なストレートをぶち込めば、胃の中から様々な物を吐き出しながら、向かい側の民家の壁

に激突した。

「きつたねえなあ。ちゃんと掃除してから帰れよ？」

次に、怯んだのか一瞬足の止まった右横にいた黒尽くめの男の頭に、そのまま回し蹴りを喰らわせ、地面に顔面を打ちつけたところで頭を踏みつけた。

「ぐげっ」

小さな悲鳴を残して気を失ったのを踏み台に、同時に前後の屋根から降って来た男たちのうち、眼前の男へ向かって迷わず跳び上がる。

その行動そのものが予測不能だったのだろう。飛び掛られた男は、被っていた覆面から除かせていた眼を、驚愕に見開いた。

「海の男を舐めんなよ？」

擦れ違いざまに囁き、うなじの上辺りを両手を組んで殴りつければ、あっさりと落ちた。

残った最後の一人はと言うと。

「あれ？」

しっかりとジャムリム宅へ押し入って、怪我をして動けないセインの喉元に、ナイフを突き立てていた。

「こらこら。容易く侵入を許すな」

どうも、前方へギヤンガルドが跳びはねたのを見るや、一瞬のうちに標的を変更したようだ。

自分が蹴破った扉の向こうに、窓際で固まる三人と、動けないので食卓の椅子に座ったままのセインと、その背後の全身黒で統一した、覆面男が見える。

ギヤンガルドが倒した男共も、皆色の違いはあれど、覆面に、全身黒か灰色の、いかにもな。どこかで見たことがあると思うのは気のせいでもないのだろう。

キヤルが銃を構えているのは流石。それでもあの早撃ちを誇る彼女が銃を抜いただけとは、相手の体捌きは相当なものを見て取るべきか。

「昨日の晩の人？」

キヤルが銃口を向けたまま、手短かに訊ねるが、男は答えない。

「何が目的？」

「・・・・・・」

その質問にも男は答えず、立てないセインを引き寄せ、抱えあげようとするが、体勢が体勢なので、上手く行かないらしい。

この刺客の男にも、キヤルの銃の腕は知られているようだ。彼女から目を離れた隙に、穴が開くのは男の方である。

「もしかして、目的は僕？」

セインが背後の男を見上げれば、覆面から覗く眼球が、ぎょろりと動いた。

「僕なんかどうこうしたってどうしようもないと思うのだけど。もしかして貴族会の方々の差し金かな？」

「・・・・・・」

男の表情は、一見何でもないように見えたが、ぴくりとセインの首筋に当てているナイフを持つ指が震えたのを、セインは見逃さなかった。

「ふむ。当たりみたいだね」

今度は明確に肩が震えた。

「詳しくはこうでしょ。国王は僕に近衛の皆の訓練を要求している。今の近衛でさえ厄介なのに、これ以上強くなられては国王に近づく隙が無くなる。イコール、国王暗殺なり何なり、とにかく今のガンダルフが国王じゃ困る方々がいるってことでしょ？」

「・・・・・・！」

「うん。大体、合っているみたいだね。それで、あわよくば僕を脅すなり宥めすかすなり懐柔して、逆に自分の私兵を訓練させる腹積もりだ。僕が邪魔なだけなら、今このナイフを僕の首に突き立てれば良いだけだからね。こんなところかな？」

眼しか見えないのに、男の顔から血の気が引くのが分かるようだ。「でも、ごめんね。僕もマスターがおっかなくてね。このままやら

れるわけにはいかないんだ」

言うなり、セインはナイフを持ったままの男の腕を掴み、そのまま自分の肩口へ男の上体を引っ張ったかと思うと、空いた手を男の腕に絡ませ襟首を引っ掴み、男がバランスを崩したのを利用して、そのまま背負い投げよろしくテーブルの上に投げ飛ばした。

その拍子に、セインが絡ませた男の腕は、ボキリと嫌な音を發てて折れ砕ける。

「ぎゃあああああああ！」

たまらず悲鳴を漏らし、腕を押さえてテーブルの上の皿や何やらが落ちて割れるのも構わず悶える刺客を、セインは冷ややかに見下した。

「僕も今回はあちこち怪我して痛くてね。原因を作ったんだから、八つ当たりくらい良いでしょう？」

事が終わり、キヤルが銃をしまってセインに駆け寄った。

「キヤル、無事だっ」

「げいん！」

「いたい！」

「おっかないって、誰の事よ！」

言い終わらないうちに頭を殴られた。

「今僕を殴った目の前のあなたです」

とは、言ってしまうえばまた殴られるので、セインはにへら、と笑ってごまかした。

「ジャムリム、ごめんね？食器駄目にしちゃった」

食事はほぼ終わっていたので、全員の腹の中に納められている。それでも、食器類は片付ける前だったので、盛大に割れてしまった。のた打ち回った男は終いに床へ転がり落ちて後頭部を強打。そのまま伸びている。

「いいのよ。気にしなさんな。あたしも明日から、ここを空ける事になるしね」

「え？」

華やかに笑うジャムリムに、全員が彼女の顔を見やった。

「おいおい、それって、着いて来るって事か？」

外で伸びきっている連中を、またもや素っ裸にひん剥いて、一纏めに括ったところでギャンガルドが戻って来た。

「おや。言わせて貰うけど。この壊れた扉どうしてくれんのさ」

刺客の不意を打つたとはいえ、盛大に扉は真つ二つだ。

「修理すんのに、いくらかかんのかね？」

「あー、そいつはー。。。悪い」

行きの旅費で派手に使ってしまった手前、手元に残った金額は微々たるものだ。

「それに、キヤルちゃんとも仲良くなつたしね？」

ジャムリムが軽く、足元のキヤルにウィンクした。

「でも、またこんな連中に狙われるかもしれないよ？」

セインが問えば、ジャムリムがごろごろと笑う。

「両足動かせないくせに、こんなヤツを申しちまえる人に何言われたって怖くないよ。ギャンガルドもあんたも、それにキヤルちゃんだっているんだ」

そこまで言つて、彼女はギャンガルドを振り返る。

「もちろん、守ってくれるんだろ？」

につこりと問われれば、それは最早決定事項なのだと悟るしかない。

「ふん。ますます好い女になつたじゃねえか」

顎をさすつて、ギャンガルドはにやりと笑う。

「当たり前だ。俺を誰だと思ってやがる。天下のギャンガルド様だぜ」

「そうこなくっちゃ！」

またもや同行人が増えたところで、一同は部屋の片付けに入った。床に転がった男も外の連中と一緒に裸に& amp;#21085;いてロープで簀巻きにし、同じ場所に山積みにする。

その裸の塊は、騒ぎに駆けつけた村の自警団に引き渡した。

自警団の皆さんの、何ともいえない複雑な表情は、しばらく忘れられないだろう。

誰だって野郎の素っ裸の塊なんざ見たくはない。

しかし彼らから剥ぎ取った衣服から、ぼろりと密書が出てきて事の顛末が判明するのは翌朝の事。

がたごとと揺れる馬車の上で、他の乗客とぎゅうぎゅうになりながら、一同は王都を目指す。

「密書持ち歩いてたって事は、僕らを襲った後、とっとと引き上げる予定だったらいいねえ」

びらりとその密書を広げて、誰の眼もはばかりことなく読みながら、セインがぼやく。

「まあなあ、思ったより俺らを見つけないのに時間がかかったんだろ」
ギャンガルドがセインの隣で興味も無さそうに、持ち込んだビーフジャーキーを齧っている。

「でも密書持ち歩くなんて、間抜けだねえ」

「プロにはあるまじき行為よね」

キヤルは、またもやジャムリムに髪の毛をいじってもらっている。今日はお団子にしてもらうらしい。

「それだけ焦っていたんでしょねえ。大掛かりに盗人集団まで雇って、宿屋の主人まで手懐ける用意周到さは認めますがね？」

タカが手元で何かくるくると回しているので、何かと思えばタテイングレースを編んでいた。

「上が頭悪いと、下の連中が苦労するって事じゃない？タカ、君器用だねえ」

「へへ。嫁に教わったんですよ」

セインは密書を折りたたんで、キヤルの鞆の中に仕舞った。

要するに。セインが刺客に喋った予想は大当たりで、貴族会のメンバーのうち、馬鹿な考えを起こした人間がいて、セインの誘拐を目論んだらしい。

行き先は、国王が伝言に旅立たせた人間の足跡を辿れば良い。それで、帰る途中で同じ場所に立ち寄ると踏んで、只でさえ近衛兵の訓練を頼むような達人らしいから、ちょっとした罠を張ってみたのだ。

しかし、そこで雇った盗人集団がいけなかった。

喜び勇んで盗みを働き、村の評判を落とすので、仕方なしに宿屋の主人と保安官を買収し、悪評が広まらないように苦心したものの、結局嵐で爆破しなくても良くなった街道を爆破し、騒ぎを大きくしてくれたのだ。

「どこまでも不運な人っているからねえ」

「それを言っちゃあ、奴らが可愛そうだろうがよ」

足止めをするはずが、爆発騒ぎで結局駅馬車が動く事になり、更に焦ったという事か。

「そういえば、クレイは？」

「心配しなくても、ちゃんと着いて来ているわ」

昨日、セインに懐いた馬にクレイと名付け、馬車に同行を許してもらっている。

賢い栗毛の馬は、名前を呼ばれたのが嬉しかったか、かばかばと走り寄って、幌をめくった部分から顔を出した。

「ああ、ほらクレイ。危ないからね？」

「ひひん！」

言われてすぐに顔を引つ込めて、馬車と併走する。

「馬車馬たちが殺されなかったのだけは、感謝かな」

セインが呟く。

足止めが目的なら崖を崩すよりも何よりも、手取り早く馬車を破壊するか、馬たちを殺すかすれば良かったのに、それをしなかったのは、彼らも駅馬車を使つての移動を考えていたのだという事になる。

「こんな小さな村で、馬を人数分用意して脱出なんて、目立って仕方がないだろうからね。そういうところは抜け目無かったのにな」

依頼して来た人間然り、雇った人間然り。

そして何よりターゲット然り。

本当に、色々な意味で彼らは不運だったのだろう。

「あたしはあんたの正体がバレていなかったただでひと安心だったわ」

お団子を二つ作ってもらって、いつもとちょっと雰囲気の違いキヤルは、なんだか大人っぽく見える。

「へえ。可愛いじゃない」

「ふふーん。似合ってる？」

「うん、似合ってる」

髪型を見せて満足そうなキヤルと、ぱちぱちと手を叩くセインを、ギャンガルドは呆れたように見やる。

「賢者さんよお。ロリコンも大概にしねえと、そのうち捕まるぜ」

「なっ!？」

顔を真っ赤にしてうるたえるセインに、ギャンガルドは機嫌よくにやりと白い歯を見せた。

「仲が良いのはかまわねえが、あんまり惚気てると周囲が引くぜ？」

「ど、どういう意味だよ!？」

「お前さんがロリコンって意味さ」

その発言に、キヤルが拳を振り上げた。

「げいん！」

「うおっ」

「あんたがそういう事を言うなら、浮気であたしもあんたを訴えるけど良いのかい？」

ギャンガルドの目の前にはキヤルではなくてジャムリムが立っていた。

いつもならキヤルの鉄拳が飛ぶのだが、今回からは海賊王の躰は彼女がしてくれるらしい。

「いやあ、姐さん。頼りになりますわー」

「すてき！」

タカとキヤルから羨望の眼差しを受け、ジャムリムはふん、と胸を張る。

「覚悟してね？」

艶やかに、華やかに。

笑顔で宣言されれば、ギャンガルドも呆然と頷くだけだった。

「確かに、君の女性を見る眼は確かだよ」

同じく呆然と驚きながら、ぼつりと呟いたセインの言葉に、ギャンガルドはがつくりと頂垂れ、ジャムリムは嬉しそうにセインに微笑みかけた。

「ありがと」

「はは。どういたしまして」

空は青く澄み渡り。

鳥がさえずり、頬を撫でる風が心地よい。

強力な助っ人を手に入れて、キヤルもセインも、大船に乗ったような気分で馬車に揺られていた。

王都で何が待っているのか分からないけれど。

かの都で、多分自分たちの帰りを、首を長くして待っている友人に会つのを、楽しみにしていよう。そう思っただった。

二人の旅は、まだまだ始まったばかりなのかもしれない。

終わり良ければ全て良しってどうだろう（後書き）

これにて「H E A V E N！ヘヴン！H E A V E N！3」は終了させていただきます。気がつけば、400字詰め原稿用紙P290に達してました。新たな道連れも増え、これからまたドタバタします。ジャムリム姐さんは、ギャングルドを御せ無い作者に見かねたようです。ありがたいことです。

それでは、お付き合い下さりありがとうございました。出来れば、次回作にもお付き合いいただければ幸福至極。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0370f/>

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！3

2011年9月9日03時17分発行